ロスト・ワールド

ミーティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロスト・ワールド

【Ｎコード】
Ｎ８６２６Ｋ

【作者名】
ミーティ

【あらすじ】
ある人の小説に触発して書きました。
一部キャラの出会いやストーリーの一部が被っていると思いますが、どうぞ宜しくお願いします。

ある島に１人、また１人と『ロスト』される。
それの意味するものとは一体？
誰が、何の為に？

彼らの運命は？
出会う筈もない者達が邂逅する時、一体何が起きるのか？
それを知る者はいない…。

※原作の内容は殆ど知らない為、殆どオリジナルストーリーです。
※

オープニング

西暦２３１３年

中東のとある場所で紛争が行われた。
だが其処に一機のフラッグが現れ、瞬く間に戦場は沈静化した。

？？？？「…武力介入終了…。」

そうフラッグのコクピットで呟くのは、ＣＢ（ソレスタルビーイング）のガンダムマイスター、刹那・Ｆ・セイエイであった。
刹那はリボンズ・アルマークとの戦いの後、ダブルオーガンダムＳ７／Ｇ（セブンソードスラッシュジー）を一時的に乗った後、新たなガンダムが開発されるまでの間、刹那用に改修されたフラッグを駆り、中東を中心に武力介入を行っていた。

刹那「…俺は戦いしか…、戦い以外に平和を勝ち取る方法が見付けられない…。だが、俺は戦う。全ての紛争を、戦争を、歪みを全て駆逐するまでは。」

そう言うと、一時的な潜伏場所に向かってフラッグを飛行形態に変形して飛翔した。
因みに、フラッグの左肩のアーマーは被弾して原形を留めていなかった。

刹那「……」

刹那はフラッグの操縦をオートに切り替え、黒いパイロットスーツ

（かつてガンダムエクシアリペアと世界を見て回っていた時のスーツ）のヘルメットを取り、軟包装容器を取り出し、中身を飲んだ。
今飛んでいる地点から潜伏場所までおよそ３０分。刹那はその間に過去の事を振り返ろうとした。
だが、異変は其処で起きた。

刹那「？！　視界が…！？」

刹那はコクピットのモニターが濃い霧に覆われているのを確認した。

刹那「霧…！？　だが、この時間帯に霧など…！！」

そう、今の時間は午後１２時半を過ぎていた。
朝方ならともかく、こんな太陽が燦々と照り付ける時に霧など発生する可能性はなきに等しいのだ。

刹那「クッ…！　突っ切る！！」

刹那はフラッグの操縦をマニュアルに切り替え、全速力で濃霧を突破した。

刹那「なっ…！？」

濃霧の中を突破した刹那は、あまりの衝撃に絶句した。

刹那「どういう…事だ…？！」

目の前に広がる光景は、『一面の海だった』。

刹那「バカな…！！　俺は今まで中東の、砂漠地帯にいた筈だ！

何故こんな海が…？！」

刹那はコクピットから出て、辺りを見渡した。

刹那「……前に島がある以外何も無い……。」

刹那はそう言うとコクピットに戻った。

刹那「クッ！　取り敢えずあの島に向かうか…。」

刹那はフラッグをその『目の前の島』に向け、飛ばした。

これにより、刹那・Ｆ・セイエイは元の世界からこの島に『ロスト』された。

だが、刹那以外にも多くの者が『自分の世界からこの島にロストされる』とは、誰も彼も思わなかった。

第1話（前書き）

タグ通りにキャラを出します。

第1話

？？？？？「一体此処は何処何だ…？」
？？？？？１「…ｚｚｚ…土方のあのヤローの死体が２４７２…ｚｚ…土方のくそったれの死体が２４７３…ｚｚｚ…」

その２人組は黒い服に腰には日本刀という何処か昔の、だが、それに現代を混ぜたような感じだ。
片方の大柄の男は顔がゴリラに似ており、黒い服と体格と合わさってこの島のジャングルによく似合っている。

もう１人の男は目玉が描かれてある赤いアイパッチを付けて寝言（！？）を言いながら寝ていた。……危機感無さすぎだが。

？？？？？「これからどうするんだ総悟……！？　おーーーーーい！！！！！！　総悟ーーーーー！！！！！　寝てるんじゃねぇええええええええええええええええええええ！！！！！！」
？？？？？１「ん…？　何ですかィ？　そんな大声上げて？」
？？？？？「いや！！　この状況で良く寝ていられるな！！　周り見ろ周り！！」
？？？？？１「どうかしたんですかィ……！？」

？？？？？１改め、真選組一番隊隊長、沖田総悟はやっと周りを見て、流石に固まった。

沖田「…俺ら…、屯所に居た筈じゃ…！？」

？？？？？改め真選組局長、近藤勲は総悟の態度に少し驚きながら返事を返した。

近藤「ああ…、そうだったな…。」

沖田「…どうするんすかい？　このまんまだとまんまゴリラですぜい？」

近藤「…そうだな…。取り敢えず海に出よう。」

沖田「アイアイさァ～。」

沖田は何処からか取り出したバズーカを担いで近藤と共に海に向かった。

？？？？？「ドラえもん！！　此処は何処？！」

メガネを掛けた少年、野比のび太は、ドラえもんに言い寄っていた。

ドラえもん「う～ん…。」

ドラえもんは地面に置いた多数の写真を見て、難しい顔をしながら腕を組んでいた。

ドラえもん「この島は世界中のどの島にも当てはまらないんだ。」

のび太「えっ？！　じゃあ僕達…、別世界に来てるって事！？」ドラえもん「まぁ…そういう事になる…。」

のび太「一体僕達はどうなるんだろう…。」

ドラえもん「でも、よく調べたらこの島の空間に所々歪んでいる所を見付けたから、ひょっとしたらそれを使って脱出出来るかもしれない。」
のび太「本当なの？！」
ドラえもん「でも、それとは別にこの島を何らかのバリヤが覆っている。」
のび太「バリア？」
ドラえもん「のび太が気絶している間にあっちこっちテレビと一緒に偵察衛星を打ち上げたけど…」
のび太「けど？」
ドラえもん「上空８０ｋｍの所で突然下に落ちて、それで慌てて衛星を起動して、この島を落ちて壊れるまでに撮った。」
のび太「その時に何らかのバリアを見付けたって事？」
ドラえもん「うん、そうなんだ。しかもそのバリア、どうやら空間を切り取る能力を持っているらしい。」
のび太「もしかして衛星が落ちたのもそのバリアなの？」
ドラえもん「いや…、『落ちた』というよりもバリアの力でこの空間が切り取られているから、衛星は真っ直ぐ飛んでいたつもりでも、そのバリアのせいで『この空間の外側には出られない』から、そのまま地面に真っ逆さま。だからあらゆる物はこの切り取られた空間でしか行動が不可能というのが判ったけど…。」
のび太「じゃあ、どこでもドアとかは？」
ドラえもん「四次元ポケットは使えたけど、どこでもドアはさっきも言った様に、この切り取られた空間でしか動けない。他の空間移動の道具もそうだ。」
のび太「そんな～！」
ドラえもん「今はこの島で生き残る事を考えよう。」
のび太「……」

のび太は項垂れたまま、頷いた。

ドラえもん「（でも、誰が何の為に僕達をこの島に転送させたんだ？　目的は…？）」

ドラえもんは深い思考の奥に向かった。

ドラえもんとのび太の近くの草むらに隠れて話を聞いている2人の男女がいた。
その格好は旅行者の格好をしていたが、腰に巻いてある冬物のジャンパー等を見る限り、どうやらドラえもんや勲等と同様、何処かの世界から突然この島に『ロスト』されたようだ。

？？？？？「なん…だって…！？」
ドラえもん達の話を聞き、男の方が驚いた顔をした。

？？？？？１「どうしたの？」

女も男と同様に話を聞いていたが、どうやら日本語が殆ど分かっていないようだ。

？？？？？「どうやらあのロボットらしき者と少年の話によると、この島は空間が分断されているようだ。」
？？？？？１「えっ！？　そうなの！？」
？？？？？「どうやら話を聞く限り、彼らも僕達と同様にこの島に来た…いや、越させられたのか…？」
？？？？？１「でも…、あの子達が話している言葉がよく判らない

けど…。」
?????「そうか。マリーは日本語を知らないみたいだね。」?
????1「そうだけど…。でもアレルヤはどうして判ったの?」

男は女をマリーと言い、女は男をアレルヤと言った。
そう、彼はCBのガンダムマイスター、アレルヤ・ハプティズムであり、女の方はマリー・パーファシーである。
彼らは今、一時トレミー（プトレマイオス2）を降り、巡礼の旅に出ていたが、今はご覧の通りである。

アレルヤ「僕達ガンダムマイスターは世界中の紛争を止める為に色々な所に潜伏する必要がある。勿論ガンダムと一緒に。だから色々な国の言葉を知っているんだ。」
マリー「そうなんだ。」
アレルヤ「さてと…。」

アレルヤは立ち上がろうとした。

マリー「アレルヤ?」
アレルヤ「此処が何処か解らない以上、『同じ境遇の人』と一緒に行動した方が良い。」

そう言ってアレルヤは立ち上がり、草むらから出た。

?????「此処は何処だぁあああぁああああぁあああああああぁああああああああああああああぁああああああぁああああああああぁあああぁあああああああああああああぁああああああぁああああ

あああああああああああああぁああああああっっっっっっ！！！！！！！」

銀髪の天然パーマの男——坂田銀時は、海に向かって思いっきり叫んでいた。

銀時「ゼェ…！！　ゼェ…！！　ゼェ…！！　ゼェ…！！」

明らかに叫び過ぎて体力を使い果たした銀時は暫く肩で呼吸した後、砂浜に座り込み、いちご牛乳を飲みながらこれまでの経緯を思い出していた。

銀時「確かよ…あの時確かジャンプといちご牛乳を買った帰りだったよなぁ…？」

銀時「あの時確かジャンプといちご牛乳を買った帰りだったよなぁ…？」

銀時はそう言ってジャンプを見て、頭を掻いた。

銀時「んで、歩いて帰ってたらいきなり『霧』が出てきて、気付いたらあら不思議、こんな所に出てきました…ってウォオオ！！！！！！！　何なんだ此処はぁ！！　訳わかんねぇよこれ！！！！　何？　何か？！　ある日主人公達が飛行機事故にあって、運良く助かったけど、其処は謎の無人島で、主人公達はその島から何とか脱出しようとする奴だろ？　銀さんはそん位分かりますよーだ！…………ハァ…………」

銀時は深い溜め息を吐いた後、砂浜に寝っ転がった。

銀時「アレは色んな奴らが同時にいるんだぜ？　銀さん独りぼっちだぜ？　ぱっつぁんや神楽、定春もいねーんだぜ？　俺完全に独りぼっちだぜ？　銀さん多分寂しすぎて死んじゃうよ？……いや、ぜってー何がなんでも生き延びてやるわあああ！！！！！！」

銀時は立ち上がり、叫びながら木刀と、ジャンプといちご牛乳の入ったビニール袋を振り回し、森の中へと走って行った。

銀時「コノヤロぉおおお！！！！！！！」

？？？？？「ねぇジャイアン…。」

？？？？？1「何だよスネ夫。」

骨川スネ夫とジャイアンこと剛田武もまた、ドラえもん達と同じようにこの島に『ロスト』されていた。

スネ夫「此処は何処なんだろう…？」

ジャイアン「知るかよ！　俺様だって此処が何処か知りたいぜ！！」

スネ夫「まあ…ね…。」

ジャイアンとスネ夫は砂浜を歩いていた。

スネ夫「僕達…どうなるんだろう…？」

ジャイアン「お～い！！　のび太～！！　ドラえも～ん！！　何処だ～！！」

スネ夫は落ち込み、ジャイアンはのび太とドラえもんの名前を叫んだが、返事はない（が、のび太とドラえもんはこの島の何処かにいる）。

ジャイアン「くそ～！！　皆何処にいるんだよ～！！」

スネ夫「ジャイアン…。」

ジャイアンとスネ夫は暫く砂浜を歩いていると…。

ガサガサ…！

2人「！？」

少し離れた所から草むらをかぎ分けている音がした。

スネ夫「な…何…！？」

ジャイアン「お…俺様が知るかよ！！」

ジャイアンは震えた声を出しながらも、直ぐに殴れる体勢をとった。

ガサガサガサガサ……

草むらをかぎ分ける音は更に大きくなった。

そして…

ガサッ！！

森の中から何者かが出てきた。

２人「ゴ…ゴリラ～～～～～～～～～～～！！？」

２人は驚愕の声でそう叫んだ。

？？？？？「此処何処ネ！　何でいきなりジャングルなのネ！！」

？？？？？１「ワン！」

メガネ「まあまあ落ち着いてよ神楽…って何でメガネなんだよおい！！　『？？？？？２』とかじゃねぇのかよ！！」

？？？？？「そんな小さな事いちいち気にしてるから何時までたっても新一じゃなくて新八のままでアルよ。」

メガネ「うるせー！！　つか何時までメガネのままだよ！！」

そう突っ込む、メガネこと志村新八と、チャイナ服と傘の少女、神楽と、一見して巨大な犬、定春もこの島にいた。

神楽「一体どうなっているネ！！　冷蔵庫の扉開けたら煙か何か出てきて、気が付いたらこんな所アルね！！」

新八「確かに…。此処は何処なんだろう…。」

定春「ワン！！」

定春は何か匂いに気付き、走り出してしまった。
神楽「定春！？　何処行くネ！？」
新八「ハッ！　もしかして銀さんだよきっと！」
神楽「マジアルか！？」
新八「とにかく行こう！」
新八と神楽は定春の後を追った。

？？？？？「何だこれは…？！」タバコを口にくわえている男は目の前の光景に顔をしかめた。
？？？？？１「うわあ…。これは惨いですね…。」
タバコをくわえている男の隣にいる地味な男は、その光景に然程動揺する事はなかった。
だが、その光景自体は常人なら衝撃を受け過ぎて吐き気をもようし、気の弱い人は気を失い、目を背いても頭の中に残る程のものである。
その光景とは、『１０人もの人間が死んでいる』という、確かに惨すぎる光景だった。
だが、その２人は対して驚きもしなかった。
何故なら、タバコをくわえている男は真選組副長、土方十四郎、地味な男は真選組密偵、山崎退である。
土方「どうなってやがるんだ…？　おい、山崎。」山崎「了解しま

した。」

土方は山崎にあの死体達を調べろと顎で言った。
山崎は分かりきった様子でその死体達を調べた。

土方「チッ、何が何だが…。」

土方はこれ迄の経緯を思い出した。

土方「俺と山崎は確か攘夷士のアジトの情報を近藤さんに知らせる為に屯所にいたよな？」

山崎は死体を調べながら言った。

山崎「確かにそうでしたね。でも、組長の部屋の襖開けたら突然隙間から霧が出てきて、気付いたらこんな所ですよ。」
土方「ん…？　山崎、お前霧とか言わなかったか？」
山崎「ええ、あれはどう見ても霧でしたよ？　毛虫と間違えましたか？」
土方「『煙』だろうが！！」

土方は山崎の頭を思いっきり殴った。
山崎は運の悪い事に血溜まりに顔面からダイブしてしまった。

山崎「あ～あ、顔が血塗れになりました～。」
土方「コイツ…！！」

土方は天然な山崎に呆れていた。

山崎「あ、そうそう。一応の検視終わりました。」

土方「んで、どうだっだ？」

山崎は血塗れの顔で言った。

山崎「１０の内、３人は持っていた銃を自らの口に入れ、引き金を引いた。後の７人はサバイバルナイフで自決しましたが、その内５人はトンでもない方法で自決しています。」

土方「とんでもない方法…？」

山崎「ええ、まず、円形に並び、そして持っていたナイフで前の人の首筋をこう…。」

山崎は右手で手刀を作り、自分の首筋に中指の先を軽く付くように後ろから前に払うように右手を動かした。

山崎「後３人は自分の手首を斬っていました。」

土方「何時死んだ？」

山崎「恐らく３、４０分前に自決したと推測。後死体の服装から、冒険家と思われ、数人のポケットから日記帳らしき物が。」

山崎は土方にその日記帳を渡した。

だが土方は日記帳の内容を見て、顔をしかめた。

土方「此は…？　何を書いているんだ…？」

山崎「さあ？　恐らく天人の文字でしょう？　死体は全員人間でしたけど。」

土方「いや、夜兎族の例もある、普通の人間という確証は無い。取り敢えず、この日記帳は一応持っているとして、もう何か証拠品は無いのか？」

山崎「食料品はありましたけど、確保しますか？」

土方「食い物有ったのに自決とは、正気の沙汰じゃねぇな。まあ、俺達が生き残るには、食い物を確保しなきゃならねぇ。山崎。」
山崎「分かりました。」

土方と山崎はある程度の食料品を確保した。

土方「もうこんな所には様は無いな。後山崎、何時まで顔に血付けているつもりだ？」
山崎「え？　こうしてると何処かの先住民族っぽいじゃないですか？」
土方「……」

土方は無言で山崎の頭（血が付くので後頭部）を殴った。

土方「下らねぇ事言ってねぇでさっさと行くぞ！」
山崎「イテテテ…！　あっ！！　待って下さいよぉ～！！」土方と山崎はその場から立ち去った。

だが、『ある者』がそれを見ていたとは、誰も思ってはいなかった。

第１話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

銀時「俺叫んでばっかじゃねぇかよコノヤロォオオオ！！！！！！」
新八「今も叫んでいるじゃないですか！！」
神楽「銀ちゃん叫ばないと死んじゃう病気アルか？」
刹那「どんな病気だ？」
アレルヤ「いや、刹那も本気にしなくてもいいよ。」マリー「私も気になる。」
アレルヤ「えっ！？　マリー！？」
土方「じゃあその首を斬って声出せなくして死なせてやろうか？」
新八「土方さん止めて下さい！　それと銀さんそんな病気掛かってません！」
沖田「旦那は殺らせねぇぜぇ？！」
近藤「此処でバズーカを使うな！！　外でやれ！！」
アレルヤ「いや、そんな問題じゃないと思う…。」
ジャイアン「じゃあ俺一曲歌います。」
ドラえもん勢「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」
他の皆「？」
ジャイアン「お～れはジャイアン～♪　が～き大将～♪」
皆「ギャアア！！！！！！」

利那「ガンッッダァアアアムッッ！！！！！！」

銀時（耳栓をしていた）「え〜、ジャイアンの歌で強制終了になりました。次回も見てくれよ。」

山崎「あれ…？　俺は…？」

第2話（前書き）

これから、1、2週間毎の土日に投稿します。

第2話

刹那「……」

刹那は唖然としていた。
フラッグを洞窟の中に隠し、パイロットスーツから私服（第2話で着ていた私服）に着替え、念には念を置いて緊急時の為にコクピットに入れて置いたテントや食料、医療品等をリュックサックに詰め、拳銃（CBのそれとは違う）をホルスターに入れ、サバイバルナイフをしまってコクピットから出ようとした。
だが、視界の隅に何かが見えた為、それを見た。
それが今唖然としている顔の原因である。

刹那「……これ…は…何故…これが…？！」

刹那が震えた声を出す程の物、それの正体はアサルトライフルであるが、普通のライフルなら何とも思わないが、そのライフルは刹那の『過去の記憶』を一瞬で思い出させるには十分だった。
そう、そのライフルは『刹那が幼い頃に使っていた物』だったのだ。
だが、予備のマガジン数個やグレネードランチャー数個を入れたベルトが有るにも関わらず、それらは『一切コクピットには置いていなかった筈』なのだ。

刹那「…まさか…！？　あの霧の中でこれが…！？」

そうとしか考えられない。
刹那はそう思い、そのベルトを腰に付け、ライフルは肩に担ぎ、コクピットから出た。

刹那「……」

刹那はコクピットにロックを掛け、そして森の中に消えて行った。

ドラえもん「えっと…、あなたは…？」

ドラえもんとのび太は、突然草むらから現れた男に目を白黒させていた。

アレルヤ「ああ、ゴメン。僕の名前はアレルヤ・ハプティズム。少し君達の話を聞いていた。」

アレルヤと呼ばれた男は、悠長な日本語で喋っていた。

ドラえもん「僕ドラえもんです。」

のび太「僕は野比のび太です。」

アレルヤ「ドラえもんとのび太君か、宜しく。」

アレルヤは右手を差し出し、ドラえもんとのび太と握手をした。

アレルヤ「あ、そうそう。マリー、此方に来て。」

アレルヤは自分が出てきた草むらに向かって手招きをした。

ガサッ…！

其処から、銀髪の女の人――マリーが現れた。

アレルヤ「彼女はマリー・パーファシー。僕は日本語は喋れるけど彼女は日本語を知らない。」

ドラえもん「ああ、そういう事ね。ちょっと待ってて。」

そう言うとドラえもんはお腹の四次元ポケットに手を入れ、ポケットから『アレ』を取り出した。

ドラえもん「『ほん訳コンニャク』～！」

アレルヤ「えっ…！？」

アレルヤとマリーは、ポケットの中から突然物が出てきた事に驚いていた。

アレルヤ「えっと…、翻訳…コンニャク…？　それでどうするの？」

ドラえもん「食べれば判るよ。はい。」

ドラえもんはマリーにほん訳コンニャクを渡した。

マリー「えっと…アレルヤ…？　これ…。」

マリーの言葉は読者からすると日本語だが、ドラえもんやのび太には何の事だがさっぱり分からない。

アレルヤ「まあ…、食べればいいと思う。」

アレルヤは半ば半信半疑だたっが、マリーにほん訳コンニャクを食べるよう、勧めた。

マリー「……うん。」

マリーはアレルヤの言葉に頷くと、ほん訳コンニャクを食べた。

マリー「……！」

ドラえもん「どうでした？」

マリー「！？　凄い…！あなたの言葉が良く判る！！」

ドラえもん「そうですか。マリーさん、僕ドラえもんです。」

のび太「僕は野比のび太です。」

マリー「ドラえもんさんとのび太君ね。宜しく。」

マリーはドラえもんとのび太と握手をした。

アレルヤ「す…凄い…！！」

アレルヤはドラえもんの出した道具の力に驚いていた。

アレルヤ「取り敢えず…、折角友達になれたし、僕達の事をもう少し話そうか。」

のび太「あ、そうですね。」

アレルヤ達は自分達の事を話した。

近藤「クソッ！　獣道すら無いのか此処は！？」

沖田「近藤さん、そんなに慌ててたら駄目でっせェ？　更にゴリラ度が増しますぜェ？」

近藤「……もういいよ……。」

近藤は落ち込みながら草をかぎ分けて進んでいた。

近藤「！？　向こうから光が差し込んでいるぞ総悟！」

沖田「マジかァ！？」

近藤「もうすぐ海だ！」

近藤は最後の草をかぎ分け、森から出た。

？？？？？「ゴ…ゴリラ～～～～～～～～～！！？」

近藤「えっ！？」

だが、森から出て早々、近藤はいきなりゴリラと言われた。

沖田「近藤さんはゴリラじゃねぇよ。ゴリラさんだろィ？」

近藤「いや、何のフォローにもなってないから！」

沖田「近藤さん、あの２人の子供が先に言いましたァ。」

近藤「無視？！……ってえっ！？」

近藤はそちらを向いた。

其処には大柄な少年と小柄な少年がいた。

近藤「や…やあ…！」

近藤はその２人の少年に挨拶した。

？？？？？「…ゴリラじゃない…？」

近藤「ガクッ」

沖田「違いまっせ。ゴリラ『さん』だろィ？」
近藤「いや、さん付けも何も、俺ゴリラじゃないし。顔はとか体格とか似てそうだけど違うし。近藤勲って言う名のちゃんとした人間だし。……所で君達は？」

近藤は一頻り突っ込むと、その２人の少年に問い掛けた。

？？？？？「あ、はい。僕は骨川スネ夫。」
？？？？？１「俺達は剛田武だ。」
近藤「おお！！　そうかそうか。この島に来て初めて総悟以外に人と出会う！　ホラ、総悟も。」
沖田「へ～い、俺は沖田総悟でさぁ。」
スネ夫「は…はぁ…。」
近藤「まあ、恐らくこの島から脱出するまでの仲だが、宜しくな。」

近藤達はそれぞれ挨拶を終えた。

？？？？？「あ…あああ…！！」

少女は目の前の光景に恐怖していた。

？？？？？「も…もしかして…『あの人達』が…！？」

少女はつい先程立ち去った後ろ姿の黒服の２人組の男が目の前の惨劇を生み出した張本人と思い、その場から逃げようとした。
だが、直ぐ後ろが木だと気付かず、その木に額をぶつけて倒れ、更

に後頭部を地面にぶつけて気絶してしまった。

神楽「定春〜！　待つアルよ！！」
新八「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…！！　もう…限界…！！」
神楽と新八は定春を追い掛け、既に１０分が経とうとしている。
夜兎族の神楽はともかく、普通の人間である新八は限界に達しようとしていた。
定春「ワンッ！！」

定春は立ち止まった。

神楽「！　定春が止まったでアル！」
新八「ハァ…！！　ハァ…！！　ハァ…！！　ハァ…！！」

新八はそれどころではなくなっていた。

神楽「定春！　何見て…えっ！？」
新八「か…神楽ちゃん…？　ど…どうし…えっ！？」

息切れしていた新八は、その光景を見て、息をする事を忘れた。

その光景とは、『土方と山崎が見ていた光景だった』。

新八「なっ…何だ…これは…！？」
神楽「きっと宴会をやり過ぎて過労死したでアル。」

新八「いや、それはないから。」
まあ、神楽のボケのお陰で冷静になれたけどね。
新八は心の中でそう言った。
新八「もしかして、定春はこの血の臭いを嗅いで来たのか…？」
神楽「多分そうアル。」
定春はその死体達の周りを回っている事から、死体から流れる血の臭いを嗅ぎ、此処に来たのだろうと推測した。
定春「……？」
定春は何か『血の臭いとは違う臭い』を嗅ぎ、其処に歩いて行った。
神楽「…ン？　定春？」
新八「何か見付けたのか？」
新八と神楽は、定春の前に向かった。
新八「…女の子…？」
神楽「何でこんな所で寝てるネ。」
新八「いや、多分『あれ』を見て、怖くなって逃げようとしたら、其処の木に頭ぶつけちゃったんだよ。」
神楽「地味メガネのクセによく言うネ。」
新八「いや俺地味メガネじゃねぇよ！！」
神楽「煩いネ。だから新一じゃなくて新八アル。」
新八「だから名前関係ねぇだろっ！！」
？？？？？「うっ…んっ…」
少女は新八と神楽の口喧嘩によって目覚めつつあった。

？？？？？「あれ…？」
神楽「黙れダメガネ！」
新八「何だと！？　もうキレたぞ！！」

新八はそう言って竹刀を取り出し、構えた。

神楽「おうおう！　掛かってこいアル！！　一瞬の内にミンチにしてやるアルよ！！」

神楽も傘を構え、そして、

新八「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」
神楽「ナンボのモンじゃあああああああああああああああああああああああい！！！！」

遂には喧嘩を始めてしまった新八と神楽に、

？？？？？「あ…あの〜…。」

少女の声など、聞こえる筈もなかった。

？？？？？「う…ん…？　此処は…？」

黒髪に赤目の少年はこの島に『ロスト』されていた。

？？？？？１「おお！！　起きたか。」

そんな少年の耳に、知らない…いや、『誰か』に似た男の声が聞こえてきた。

？？？？？「（此処は…？　俺は何を…？）」

少年は、ボヤけた頭で何かを思い出そうとしていた。

？？？？？１「どうした？　少年？」

その少年に声を掛けている長髪の男の服は、少年の服とあまりにも違っていた。

少年の服は、今時の若者らしい服（若干地味だが）である。

それに対し、長髪の男の服は、まるで江戸時代の和服を着ていて、更に腰には刀を差している。

更にその男の隣には、まるで着ぐるみのような白いペンギンがいたが、少年は未だ気付いていない。

？？？？？「（俺は確か…、アスランにやられて……）…ハッ！？　オーブは！？　ザフトは！？　世界は！？」

少年はガバッと起き上がった。

？？？？？「……えっ…！？」

少年は周りを見て、唖然とした。

？？？？？「確か俺…、月面にいた筈じゃ…？！　何でこんなジャングルに…！？」

？？？？？？1「少年？　どうしたんだ？」
？？？？？「！」少年はまた唖然とした。
其処には、まるで時代劇で見た事のある服を着た長髪の男と、その隣には、着ぐるみのような白いペンギンがいた。
？？？？？？1「ん？　俺の顔に何か付いているのか？」
？？？？？「いや…、何でも…ないです…。」
少年は溜め息を吐いた。

第2話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

近藤「ゴリラって…」
スネ夫「ご…ごめんなさい…。」
沖田「どうせ近藤さんはゴリラ似でさぁ。」
ジャイアン「そうなのか…？」
近藤「総悟ぉ！！　俺はゴリラじゃねぇよ！！」
沖田「はいはいはい、分かりやしたよ近藤さん。」
神楽「おうおうおうおう、誰かと思ったらドSじゃねぇかヨ。さっさとくたばれヨ。」
沖田「はぁ？　オメェがくたばれチャイナ。」
新八「オィィイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！？？？　何やってんだアンタらぁ！？」
沖田「邪魔しねぇでくれぇ。これは俺達真選組の威信を掛けた決闘でさぁ！」
新八「何の威信だよ！！　言っとくけど、こんなチャイナ倒した所で、何の足しにもならねぇよ！！」
神楽「何？！　このダメガネ！　このドSと一緒にブッ殺すアルヨ！！」

新八「んだこの野郎！！」
沖田「これから俺と新八は同盟を組みまさぁ。」
新八「おっし！　コノヤロー！！」
神楽「纏めて掛かってこいアル！　返り討ちにするアル！！」
沖田「掛かってこいよ、後悔させてやらぁ！！」
アレルヤ「…何か無茶苦茶な展開になってるから、此処で終わりにしよう。」
マリー「またね。」

刹那「俺がガンダムだ俺がガン

ダムだ俺がガンダムだ俺がガンダムだ俺がガンダムだ俺がガンダムだ……」

全員「……」

新八「（えっ…？！　全員黙った…！？）」

銀時「あれっ？　俺の出番は…？」

新八「いやアンタ出てなかっただろ…。」

第3話（前書き）

新キャラ登場！！
後、何故か銀時が下らない指導を行います。

銀時「下らねぇって何だゴラァ？！」
刹那「落ち着け坂田銀時！」

……はい、始めましょう…。

銀時「無視すんなやぁコノヤロー！！」
刹那「…駄目だコイツ、早く何とかしないと。」

第3話

？？？？？「此処は…？」

この少女もまた、『ロスト』されていた。

？？？？？「えっと…。確か夏休みに世界の家に二泊泊まって…、それから家のドアを開けたら…、突然霧が出てきて…。気付いたらこんなジャングルに…。」

少女は辺りを見渡した。

？？？？？「……」

少女は無言になった。

？？？？？「……どうすればいいんだろう…？　携帯も使えないし…。」

少女は携帯を見ながらそう言った。

ガサッ…！

？？？？？「！？」

少女は突然の草をかぎ分ける音にビクッとなった。

？？？？？「だ…誰！？」

少女は大きな声で叫んだ。

？？？？？「あれぇ～？　此処何処だ～？」

青年はテントから出た時の第一声がこれだった。

？？？？？「確か俺…、ヒマラヤにいたよな…。何でこんなジャングルに？」

青年は首を傾げた。

？？？？？「ま、悩んでもしょうがないし、行動するか。」

そう言い、青年はテントを片付けた。

？？？？？「お～！！　何かワクワクしてきたぞ！」

青年はヒマラヤからこんなジャングルにいきなり移動したのにも拘らず、寧ろそれが青年の冒険魂に火を点けてしまったようだ。

？？？？？「あ、でも暑いから服脱ごう。」

青年はジャンパー等、厚手の物を脱ぎ、冒険を始めた。

？？？？？「さあ、どんなのが出てくるんだ？」

青年は草をかぎ分けて進んだ。
所が、
？？？？？１「だ…誰！？」
いきなり少女の叫び声が聞こえた。
？？？？？「えっ…！？」
青年はそのまま固まってしまった。

刹那「…ん？」
刹那は少女の声を微かに聞いた。
だが、それは本当にほんの微かであり、常人には殆ど聞こえない。
だが、今の刹那は『純粋種のイノベイター』であり、脳量子波を使わなくても感覚は常人よりも高い為、今の声も聞こえたのだ。
刹那「今のは…？　いや、考える必要は無い。」
そう言って刹那はライフルを持ち、声のした方に走った。

？？？？？「……？」

青年はその後、少女の声が聞こえてこない事に疑問を持ち、声が聞こえた方に向けて草をかぎ分けながら進んだ。

だが、

？？？？？１「誰！？　其処にいるの？！」

と、何故か自分が動いた途端に少女の声が聞こえた。

？？？？？「えっ…？！　もしかして…、犯人俺…？」

青年はそのまま動けなくなってしまった。

刹那「もう少しか。」

刹那は少し走りながら、そう言った。

刹那「！」

刹那は確実に少女の姿を感じ取っていた。

刹那「此処か！！」

そう言って草むらに飛び込む刹那。

？？？？？「！？」

少女は突然現れた刹那にひどく驚いた。

？？？？？「あ…あなたは…？」

刹那「俺は…ん？！　誰だ！？」

刹那は自分の名前を言おうとしたが、人の気配を感じ、ライフルをそちらに向けた。

？？？？？「？！」

少女は刹那が持っているライフルに驚いた。

？？？？？「（凄い…！　あれが本物の…？！）」

刹那「大人しく出てくれれば撃たない！！」

刹那は姿が見えない者に向かって言った。

？？？？？１「ほ…本当に撃たないで下さいよ…。」

すると、先程の青年が両手を上げながら出てきた。

刹那「ああ。」

刹那は一言そう言ってライフルを下ろした。

刹那「お前達は一体何処から――――」

？？？？？２「コノヤロぉおおお

おおおおおおおお！！！！！！！」

刹那は少女と青年に『何処から来た』と言おうとしたが、其処に何処かで聞いた男の声で掻き消された。

？？？？？？「！？」

？？？？？？１「えっ！？　何！？　何処！？」

刹那「！」

刹那はライフルに何故か付いていた狙撃用スコープを取り出し、周りを見た。

刹那「…？」

だが、周りには誰もいなかった。

刹那「（いない…？　何処に…？……ハッ！）　２人とも！！　早く此処から逃げろ！」

２人「えっ！？」

２人は一瞬刹那の言葉に戸惑ったが、直ぐに動いた。

そして、

ドカァアアアアアアアアアアアアアン！！！！！！！

？？？？？？１「うわっ？？！」

？？？？？？「キャッ！？」

刹那「クッ！？」

3人は『それ』が落ちた時の衝撃を少し受けた。

？？？？？「なっ…何？！」

？？？？？１「今のは！？」

？？？？？２「あ～…イテテテ…！！」

３人「えっ…！？」

３人は、『それ』が落ちた事によって出来たクレーターの中から男の声がした事に驚いた。

？？？？？２「コノヤロー、走ってたらいつの間にか空に落ちてたぞコノヤロー。」

？？？？？２の正体は坂田銀時であった。

？？？？？「？？？？？？」

？？？？？１「えっ？！　どういう事？？」

刹那「……」

少女は目の前の光景に頭を白くし、青年は慌てふためき、刹那は唖然としていた。

銀時「ん？　何だよコノヤロー。俺は見世モンじゃねーよコノヤロー。」

刹那「……お前、空から落ちてきて大丈夫なのか…？」

銀時「あん？　俺は基本ギャグキャラだからこの程度の事なんざ、怪我にも入らねーよコノヤロー。」

刹那「…そうなのか…？」

刹那は片眉を潜めながらそう言った。

銀時「所でアンタら、何者だ？　俺は坂田銀時だ。」
刹那「ん、ああ。刹那・Ｆ・セイエイだ。」
銀時「セスナ・Ｓ・千円？」
刹那「……」

刹那は無言でライフルの銃口を銀時の眉間に当てた。

銀時「す…すすすすすスミマセンでした～～～～～～～～！！！！」

銀時は即座に土下座をした。

銀時「いやこれはジョークで言った訳であって、決して本気で言った訳ではありません！！」
刹那「……」
？？？？？「……」
？？？？？１「……」
銀時「と…所で…、残りのアンタらは…？」

銀時は刹那に怯えながら言った。……威厳皆無（元々銀時に威厳もクソもないが）。

？？？？？１「あ、俺はこういう者でして。」

？？？？？１は刹那達に名刺を渡した。
銀時「夢を追う男…？」
？？？？？「２０００の技を持つ男…？」
刹那「五代雄介か…。」
五代「はい、五代雄介です！　宜しくお願いします！」

銀時「後は其処の嬢ちゃんだな。」
？？？？？「私は、清浦刹那…。」
刹那「刹那…？」
銀時「ん？　刹那？　マンガとかテレビとかなら顔とかで区別できっけどさ、小説じゃあ区別なんざ、口調以外で出来る訳ねぇだろ。そこでだ。どっちがどっちの刹那かハッキリする様にすりゃいいだろ。」
五代「どうやって？」
銀時「ああ、今作者が頭の中で俺に囁いてる事を言えば…、台詞の横に誰が言っているのか分かるように、そいつの名前（真選組や一部キャラは殆ど名字）があるだろ？」
例。

名前無し

「死ねやコラッ！！」
「んだとオラァ！！」

銀時「ホラ、これだけだと誰が言ってんのかわかんねぇだろ？」
刹那「いや、それだと殆ど判らないだろう…。」

名前有り

神楽「バーカバーカ！」
沖田「土方死ねぇ～い！」

銀時「…みたいな感じだ。因みに、上の名前無しの所、上が銀さん

で下がマヨラー星人（土方）だ。」
刹那「…何故こんな下らない事を…。」
刹那「確かに…。」
銀時「はい！　名前が一緒だとどっちがセイエイで、どっちが清浦が分かったモンじゃねぇ。そこでだ。セイエイの方に『刹那F』って付けておけば問題ねぇ。」
刹那F「何なんだコイツ…。（何だかんだで付いてるしな…。）」
刹那「確かに…。」

銀時「いや、刹那ちゃんの台詞が『確かに…』だけなんだ？……まあいい。これで誰が誰なのか一目瞭然だ！！」
刹那F「いや、別にアンタが言わなくとも、作者の説明だけでよかった筈だが…？」
銀時「……よし、他にもこの島に来ている奴もいるかも知れねぇ、行くぞ。」
銀時は歩き始めた。

刹那F「……坂田銀時…、アンタは一体何なんだ…？」
五代「あっ！　早く行きましょう！！」
刹那F「確かに…な。」
刹那「…刹那さん…。」
刹那F「？　何だ清浦？」
刹那「あっ、何でもない…。それより、銀時さん行っちゃいますよ？」刹那F「ああ…、そうだな。行くぞ、五代、清浦。」
五代＆ａｍｐ；刹那「はい！」

３人は銀時の後を追った。

第3話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

刹那F「何だあれは？　アンタは何がしたかったんだ？」
銀時「アーアーキコエナーイ、アーアーキコエナーイ。…って訳で、『仮面ライダークウガ』から、五代雄介。英語面倒だから略称の『スクイズ』から、清浦刹那が来ました。はい、拍手。パチパチパチパチ。」
五代「こんにちは！！」
刹那「……」
刹那F「新しい奴が出る度にやるのか…？」
銀時「らしいな。まあ、名前が出たらやるらしいけどな。」
刹那F「そうか…。後、酷くないかその口で拍手。」
銀時「……」

？？？？？「へぇ～、此処がロスト・ワールド楽屋ですか？」
？？？？？1「そうらしいな。」
刹那F「？　お前は…？」
銀時「て…テメェは…？！」

ロスト・ワールド楽屋に現れたのは誰か？　それは次回を待て！！

第４話（前書き）

銀魂勢（銀時、近藤、沖田以外）がはっちゃけます。

第４話

神楽「ハァ…！　ハァ…！　ハァ…！　ハァ…！」

新八「ゼェ…！！　ゼェ…！！　ゼェ…！！　ゼェ…！！」

バトルが始まってから１５分が経過していた。

神楽「（新八のくせになかなかやるアル…。）」

新八「（何とか気力だけでやってるけど…、やっぱり神楽ちゃんは強い…。）」

新八＆ａｍｐ；神楽「（だったらこの一撃に全てを掛ける（アル）！）」

その言葉を言った直後、２人は駆け出し、

新八＆ａｍｐ；神楽「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

お互い、一撃を決めようとした。

だが、

定春「ワンッ！」

ドガァアアアアアアアアアアン！！！！

新八「ぐはっ！？」

神楽「ぐほっ！？」

新八と神楽は激突寸前に定春の体当たりを諸に受け、『真っ直ぐ吹っ飛んだ』。

新八＆ａｍｐ；神楽「ギャアアア

今、目の前にいる男の名前は桂小太郎と言ってた。
何か自分は『ヅラではなく桂だからな』とか言ってたが、その声は『アイツ』を思い出す。
因みに好物はそばとか言っていた。
その隣にいる白いペンギンの着ぐるみみたいな奴は、『オッス、オラ、エリザベス。』と書かれたプラカードを掲げていた。

桂「さて、そなたの名前をまだ聞いてはいなかったな。」
？？？？？「えっ…？！　あっ、ああ…、シン・アスカです。」
桂「ふむ、良い名前だな。」
シン「そうですか。」

だが、俺は幾つか疑問があった。
と言うのも、月面にいて、デスティニーのコクピットに座っていたのにも関わらず、この場所にいた事、着ている服がパイロットスーツじゃなくて私服（オーブで着ていた服）だった事、この場所は桂さんもエリザベスも分からない事、そして俺の所持品はザフトの拳銃とナイフ、何故か綺麗に畳んであったザフトのエースの証の赤服、そして妹の形見の携帯だけだった事。
所持品はまだ良いとして、桂さんも知らない場所で、更に桂さん達に『違和感』を感じていた。
だが、俺は確か…『死んだ筈』…。
まさか…？！　ステラが…！？

桂「なら、攘夷士に入らな――――」

ドガッ！！

桂の言葉は其処で止まった。
何故なら、桂は突然横から来た『何か』に当たり、その『何か』と一緒に吹っ飛んだ。

シン「えっ！？……ハッ！　桂さん！　エリザベス行くぞ！」
エリザベス『サイサイサー！』
シン「さ…サイサイサー…？」
エリザベス『あ、間違えた。アイアイサーだった。』

エリザベスはプラカードを回転させていた。

シン「そんなのどうでもいい、早く行くぞ！」
エリザベス『アイアイサー！』

ようやくシンとエリザベスは走り出した。

近藤「鰹釣れたな。」
沖田「こっちは鮪でっせ。」
スネ夫「僕は鯛だ。」
ジャイアン「俺様は鰤だぜ。」

近藤達は手作りの竿で何故か大物ばかりを釣っていた。

土方「チッ、此処は何処だ？」
山崎「さあ…？　でもハッキリ言えば此処は江戸じゃないのは確かですよ？」

山崎は海水で顔を洗いながら喋っていた。

土方「んな事は分かっている。此処は何処だって事だ。」
山崎「副長、顔洗いましたので行きましょう。」
土方「取り敢えず今は歩くしかないか。」

土方は煙草とマヨネーズの容器の形のライターを取り出し、煙草に火を点け、山崎と共に歩き出した。

そして２０分程歩き続けた。

山崎「何時まで歩けば良いんですかね？」
土方「フゥ…。んなもん知るかよ。」
土方は煙草の煙を吹きながら喋った。

土方「……ン？　おい山崎、アレを見ろ。」
山崎「え？　どれですか？」
土方「其処だよ馬鹿。」

土方は後ろから山崎の頭を両手で鷲掴みにし、『あれ』を見させた。

山崎「へー、大きい建物ですね。３、４階位ありそうですね。」
土方「そこじゃねーよ！！」

土方は山崎を頭から砂浜に突っ込ませた。

山崎「フゥ…、死ぬ所でした。」
土方「良く見ろ。あれはどう見てもコンクリだろ？　しかも窓まで付いているって代物だ。そんなものがこの島の何処に有るんだ？」
山崎「確かに…。よく考えてみるとそうですね。」

突然土方達の目の前に現れた建物。
その材質はどう見てもコンクリートで出来ていて、更に全て木の板で塞がれているが、窓まで付いているのだ。
だが、何故『コンクリート製の建物がこの無人島に存在する』のか。
先住民が建てたのか？　それなら他の場所にも同じ建物、或いはその残骸も有っていいのだ。
だが、土方達がジャングルから海岸までのルート上には建物どころか道路らしきものすらないのだ。
しかもそのコンクリートの材料はこの島の何処で手に入るのか？
謎が謎を呼ぶコンクリの建物、そしてこの島。
そして原点は、『何故違う世界の者達をこの島に『ロスト』させたのか』。
恐らくそれを解決させるのは他でもない、この島に『ロスト』された者達なのだ。

土方「此処から見てもデケェ扉だな。」

土方は建物の一階部分にある鋼鉄製の扉を見た。
その大きさは建物から数百m離れた所にいる土方から見てもその大きさが目に付くだろう。
その大きさは推定5、6m。下手すれば後1、2m程もあるだろう。

土方「まあ…、雨宿りには丁度良いか。」
山崎「所で顔が砂まみれなのでまた顔を洗いに行っても良いですか

？」
土方「勝手にしてろ。俺はあの建物に向かう。お前も後から来いよ。」
山崎「了解しました。」
土方は謎の建物に、山崎は顔を洗いに海に向かった。
土方「…ン？」
土方は『人の気配』を感じた。
土方「（何処だ…？！　山崎は後ろにいるし、いや、段々近付いてきて……）」
ドガァァァァァァァァァァァァン！！！！！！！
土方「！？」
土方は後ろから聞こえた爆発音に振り向いた。
土方「山ざ…なっ？！」
土方は後ろにいた山崎に呼び掛けたが、途中で止まった。
土方「何…！？」
土方は余りの驚きに、くわえていた煙草を落としてしまった。
その光景とは、夕日をバックに吹っ飛ぶ４人の男女の姿が…

シン「いや待てよ！！　今太陽かなり上だったぞ！？　何でいきなり夕日！？　どうなってんだよ！！」

シンは目の前の光景の殆どにツッコミを入れた。

エリザベス『多分、バカデミー大賞のアレだよアレ。』

シン「えっ？　アレなのか？」

エリザベス『ウンウン。』

言っておくが、エリザベスは全てプラカードを使って話をしている。

土方「おいおいおい…。４人とも溺れてるぞ。」

シン「アンタも助けに行けよ！！」

土方「いや、ジョーズみたいなサメが来てるから無理だな。」

シン「…って４人とも食われるわぁあああああああああああああ！！！！！！」

シンは新八並のテンションとツッコミをした。……声は沖田と一緒だけどね。

４人「大佐、只今戻りました。」

シン「ちょっ！？　いつの間にそんな大量の魚捕まえてきてるんだ！？　つーか大佐って誰！？」

エリザベス『うむ、良くやった。』

シン「ってエリザベスかぁあああああああああああああああああああああああ！！！！」

土方「よく見たら万事屋の天パー抜いた奴らかよ！！　つーか桂テメェ！！」

土方は刀を引き抜こうとした。

シン「えっ…！？」
桂「フッ、真選組副長、土方十四郎。この島は謎が多い。謎を解決する為に人は１人でも多い方が良いだろう？　それに俺達の法など、こんな所では通用しない。即ち、此処は敵も味方もいないという事だ。」
神楽「いちいち長いネ！」

神楽は桂に飛び蹴りを食らわせた。

桂「グハッ！？」
新八「おいー！！　何やってんだー！！　桂さんはただ話してただけだろーが！！」
神楽「だって私の出番殆ど無いネ！　だからブッ叩いたヨ！！」
土方「何やってんだテメェらは。」
新八「あれ？　土方さんと山崎さん？　何でこんな所に？」
土方「知るかよ！　俺達だって気付いたらこんな所にいたんだ！」
神楽「黙れ税金泥棒。」
土方「あ〝あ！？　テメェ、ブッた斬られてぇのか？！」
新八「ちょっと土方さん！　落ち着いて下さいよ！！」
神楽「ダメガネは黙れアル。」
新八「んだこの野郎！！」
シン「アンタも落ち着けぇえええええええええええええええ！！！！　ってかこれどうやって収集つくんだ！？」
定春「ワンッ！！」

ドガッ！！

新八＆ａｍｐ；神楽＆ａｍｐ；土方「グハッ！？」
シン「また海に落ちたー！！　また太陽が夕日になったー！！　っ

てか何で桂さんとかもー！？　また溺れたー！！　またサメに襲われたー！！」
5人「大佐、只今戻りました。」
エリザベス『うむ、良くやった。』
シン「何時までこんな事するんだぁあああああああああああああ！！！！」

シンは6人（？）の頭を殴った。

6人（？）「」
シン「この…！！」
？？？？？「あ…あの…。」
シン「ん？」

シンは声のした方を振り向いた。

シン「君は…？　ってか犬デカっ。」

シンは少女と少女が乗っている犬――定春――を見た。

？？？？？「私は源しずかです。」
シン「しずか？　俺はシン・アスカ。その犬は？」
しずか「この犬はあのチャイナ服の女の子と和服で眼鏡の男の子と一緒にいた犬だけど…。」
シン「そうか…。」
神楽「アンタ何するネ！」
シン「何って、ツッコミですよツッコミ。アンタ達が暴れ過ぎるからしただけですよ。」
神楽「何だと！？　あのドSに声が似てるクセに！！」

その神楽の言葉に関心したような顔をする銀魂メンバー。

土方「誰がに声が似てるなと思っていたが、総吾だったか。」
シン「いや、取り敢えず自己紹介くらいしないと、自重されますよ？　俺の名前はシン・アスカ。アンタ達は？」
桂「コホンッ、もう挨拶は済んだが、あの少女にはまだしていないからな。俺から言わせて貰う。俺は桂小太郎だ。好物はそばだ。」
エリザベス『オッス、オラエリザベス！』
新八「僕志村新八って言います。宜しくお願いします。」
神楽「私は神楽ネ。後コイツはペットの定春ネ。」
定春「ワンッ！！」
土方「俺は真選組副長、土方十四郎だ。」
山崎「自分は真選組の山崎退です。趣味はミントンです。」
しずか「私は源しずかです。」
土方「突然だが、アレを見ろ。」

山崎以外の人は皆頭に『？』を浮かべながら土方が指差した所を見た。

数人「！？」
桂「何と…！」
シン「た…建物…！？」
新八「土方さん、これは！？」
土方「見た通りだ。中はこれから見ようとしてたがな。見た目は恐らくコンクリ製。だが此処の何処でその材料が手に入る？」
桂「俺は見た事が無いな。」
エリザベス『同じく。』
シン「まあ、此処でなら見た事は無いですね。」
神楽「私は新八とドンパチやってたから見てないネ。」
土方「…何やってんだよオメーら。んな事より、彼処に行くぞ。」

桂「待て、もしかしたら何か罠があるかも知れないぞ。例えば、ドアを開けたら、其処には貞子に似た松子が追い掛けて来て…」
新八「だから松子って誰だよ！！」
土方「行くぞ！」
桂「まっ…待て！　もしかしたらＳＭ嬢の松子が…」
シン「だから松子って誰だよ！（……ってハッ？！　全く同じツッコミだ！）」

土方達は妄想に耽る桂を置いて建物に向かった。

桂「待て！　置いて行くな！！」

直ぐに桂は土方達を追った。

第4話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

作者「機動戦士ガンダムSEED　DESTINYから、シン・アスカ。銀魂から、桂小太郎とエリザベス。そしてドラえもんから、源しずかが『ロスト』されました。」
シン「どうも。」
桂「第3話の後書きで出てきた2人組、あれはシンと俺だ。」
エリザベス『今晩わ～。』
しずか「えっと…初めまして…。」
作者「因みに、このシンは、本編＋漫画版（ボンボン）＋『オリジナル』でいこうと思います。」
土方「何？　オリジナルだと？　なら、近い内にその話が出てくるのか？」
作者「はい、そうですが何か？」
土方「……」
シン「良し、じゃあ次回も宜しくな！」
新八「早ッ！？」

第5話（前書き）

ドラえもん達は『彼ら』に遭遇します。

第5話

ドラえもん達は海に向かっていた。

アレルヤ「…やっぱり僕達とドラえもん達は別の世界から…。」
ドラえもん「そうみたいだね。僕が生まれたのは22世紀だけど、実際は20世紀から。アレルヤさん達は24世紀から。でも、アレルヤさん達は僕達の事は知らないし、僕達もMSという人形機動兵器の事は知らない。やっぱり別世界から…。」
マリー「でも、どうしてその別世界の人達がこうやって出会えたのは、この島には何かあるのかもしれない…。」
のび太「バリアといい、アレルヤさん達といい、本当に何か有るよね。」
アレルヤ「…ん？　海…かな？」
のび太「えっ？！　ホント！？」

アレルヤは海を見付けた。

アレルヤ「兎に角、食べ物は無いとね…。」
ドラえもん「確かにね。」

そう頷くドラえもん。

そして森を抜け、海に出た。

アレルヤ「やっぱり…海は壮大だな……ん？」

アレルヤは海岸の少し遠くの方に釣りらしき事をしている複数の人影を見付けた。

マリー「どうしたの？」
アレルヤ「……ハッ！！　彼処に人がいる！」
３人「えっ！？」

３人はアレルヤの指差した方を見た。

のび太「た…確かに…。」
マリー「釣りをしている。」
ドラえもん「もしかしたら、僕達の他にもこの島に来た人が…。」
アレルヤ「行ってみよう！」

アレルヤ達はその釣りをしている人達の方に向かった。

近藤「うむ、こんなに魚を取れれば今日の夕飯は豪華だぞ！」
沖田「すげぇな。」
スネ夫「魚ディナーだな。」
ジャイアン「早く食いてぇな。」
近藤「そろそろ日も落ちてきてるし、食うか。」

近藤達は夕食の準備に入ろうとした。

？？？？？「あー！！　ジャイアンとスネ夫！！」
ジャイアン＆ａｍｐ；スネ夫「えっ？」

ジャイアンとスネ夫は思わずそちらを見た。

スネ夫「！！　のび太とドラえもんじゃないか！！」
ジャイアン「おお～、心の友よ～！」
のび太「まさかこんな所で会えるとは思ってなかったよ！」
ドラえもん「ジャイアンとスネ夫もこの島に…？」
近藤「ん？　彼は？」
スネ夫「友達だよ。」
近藤「そうか。」
沖田「あー、早く土方をブッ飛ばしてぇ。」
近藤「ん？　何だこのタヌキみたいな奴？」

それを聞いたドラえもんは激怒した。

ドラえもん「僕はネコ型ロボットのドラえもん！！　僕はタヌキじゃない！！」
近藤「ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！！！　耳がぁあああああああああああああ！！！！！」
沖田「自業自得でっせ、近藤さん。」
ドラえもん「所で、あなた達は？」
ジャイアン「ドラえもん、それはこっちのセリフだぜ。」
アレルヤ「まあまあ、取り敢えず皆で自己紹介すればいいと思う。」

アレルヤの言葉に皆が賛成した。

アレルヤ「僕はアレルヤ・ハプティズム。」
マリー「私はマリー・パーファシー。」
ドラえもん「僕ドラえもん。」
のび太「僕は野比のび太。」ジャイアン「俺様は剛田武だ。」

スネ夫「僕は骨川スネ夫。」
近藤「俺は近藤勲だ。」
沖田「俺は沖田総悟でさぁ。」
アレルヤ「ん？　こんなに魚釣っていたのかい？」
沖田「そうでさぁ。これから魚ディナーさぁ。」
近藤「そうだな。誰か捌ける者はいないか？　短刀を貸してやるから。」
アレルヤ「ああ、それなら僕が。」
近藤「そうか。有難う。」
アレルヤ「いえ、この状況下では、皆で協力していく事が重要です。」

アレルヤの言葉に頷く一同。

近藤「…これで全員、という訳ではないかもしれんな。」
ドラえもん「全員じゃない…？」
近藤「そりゃそうだろう？　ひょっとしたら他の世界、ヘタすりゃ身内が来てる可能性がある。日が昇ったら捜しに行こう。」
アレルヤ「でも…何処か洞窟みたいに『休める場所』は無いの？」
近藤「……」

近藤は黙りこくってしまった。

のび太「えっと…、近藤さん？」
沖田「見付からなかったでさぁ。でも近藤さん『だけ』はジャングルでも大丈夫さぁ。」
近藤「ちょっとぉ？！　総悟ぉ？！　それどういう意味！？」
アレルヤ「ドラえもん、何かそういう道具はないのかい？」
ドラえもん「えっと、ちょっと待って…。」

ドラえもんは両手を四次元ポケットに入れ、何かを探した。

ドラえもん「……あっ、有った有った。『デラックス・キャンピングカプセル』～！」

アレルヤ「？　それは？」

ドラえもん「まあ、見てれば分かるよ。」

ドラえもんはデラックス・キャンピングカプセルの杭を地面に刺した。

グググググググ…

ドラえもん勢以外「！？」

地面に刺さったデラックス・キャンピングカプセルの支柱は伸び、それから本体が巨大化した。

近藤「どぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！？？？？」

アレルヤ「凄い…！　これが僕達の知らない世界の力…！」

沖田「……チッ！」

近藤「すすすすスゲェなぁ…！……ん？　総悟？　何で舌打ちしたんだ？」

沖田「あの外観見てるとあのチャイナを思い出す…。あー、何かムカつくから土方と一緒にブッ飛ばしてやりてぇな…。」

そう、デラックス・キャンピングカプセルの外観は中華の宮殿みたいになっていて、それがあのチャイナ――神楽を思い出すのだ。

近藤「そ…そうか…。だが、間違っても壊すなよ。」
沖田「……アイアイさぁ～…。」
沖田は低いテンションで応えた。
ドラえもん「じゃあ入ろう。」
ドラえもん達はデラックス・キャンピングカプセルの中に入った。
アレルヤ「すっ…凄い…！」
マリー「最初はあんな小さかったのに…！」
近藤「何でもありだな…こりゃ。」
のび太「ね、ドラえもんは凄いでしょ！」
スネ夫「またそんな調子付いちゃって。」
ジャイアン「やっぱドラえもんはスゲェな。」
沖田「近藤さん、ベッドとか有りまっせ。」
近藤「ハァ…、こんな無人島でどうなるかと思ったぁ…。」
ドラえもん「あ、そうそう。台所もあるから、魚は其処で捌いても良いよ。」
アレルヤ「台所？！　それもあるのか…。」
沖田「無人島でディナーですかぃ。他に此処に来ている人がいたらぶちギレそうですなぁ。土方とか旦那とかチャイナとか。」
近藤「ハハハ、そりゃそうだ。」
スネ夫「近藤さん達も手伝って下さいよ。」
近藤「おっと、それは悪かったな。総悟。」
沖田「アイアイさぁ～。」
近藤達は食事の用意をした。
そして食事を終え、一同はそれぞれの部屋にいた。

アレルヤ「……」
マリー「アレルヤ…？」
アレルヤ「……ん？　ああ、ごめん。ちょっと考え事をしていた。」
マリー「考え事…？」
アレルヤ「そう、何で此処に来ている事。僕はずっとそれを考えていた。」
マリー「それで…、答えは？」
アレルヤ「さあ？　それは分からない。でも、この島を出る時、その答えはひょっとしたら分かるかもしれない。」
マリー「そう…。じゃあ、答え見付けられたら教えてね。」
アレルヤ「ああ。」

近藤「なあ…総悟…。」
沖田「ん？　何ですかぃ？」
近藤「いや、大した事じゃない。真選組の事だ。」
沖田「さぁ…？　俺や近藤さんがいなくてもやってのけているんじゃないですかぃ？」
近藤「そうか。」
沖田「ひょっとしたら他の奴らとかも来てるんじゃないですかぃ。土方とか旦那とかチャイナとか。」
近藤「ハハッ、有り得そうだな。」
沖田「どうせなら土方が来てくれれば『色んな意味』で助かるんだけどなぁ。暗殺とか暗殺とか暗殺とか。」
近藤「ハハハ…。」

近藤は沖田の発言に対し、乾いた笑いをするだけだった。

スネ夫「ジャイアン、僕達これからどうなるんだろ…。」
ジャイアン「どうなるってお前、ドラえもんとかいるから大丈夫だろ？」
スネ夫「そりゃそうだけど…、この島、やっぱり何かおかしいよ。」
ジャイアン「確かにな。その所はドラえもんにでも聞いておけば良いんだよ。」
スネ夫「まあ、そうだね。」

ドラえもん「う～ん…。」
のび太「どうしたのドラえもん？」
ドラえもん「僕とのび太の他にスネ夫とジャイアンが此処に来ているという事は…ひょっとして…」
のび太「ひょっとして…？」
ドラえもん「何を言ってんだい？　しずかちゃんに決まっているじゃない。」
のび太「……あっ！　でも、もしかしたら来てないって可能性も有るでしょ？」
ドラえもん「まあ、確かにそうだけど、スネ夫とジャイアンまで来てたら、しずかちゃんまで来ているって考えたくもなる。」
のび太「……そうだとしても…、今は…。」
ドラえもん「まあ、明日にならなきゃ駄目だよ。」
のび太「…うん。」
ドラえもん「お休み。」
のび太「お休みなさい…。」

ドラえもんとのび太は就寝した。

第5話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

銀時「は～い、何の特徴も無い回でした～。強いて言えば、『ゴリラとの遭遇』だな。」
近藤「何その『未知との遭遇』みたいな感じ?!」
マリー「特徴無いって…。」
アレルヤ「しょうがないよ。本当に遭遇しか無かったんだから。……」
マリー「アレルヤ?」
ハレルヤ「ってか何で俺の出番がねぇんだよ!!! ブッ殺すぞ作者ぁ!!!」
アレルヤ『作者殺したらこの小説を書く人がいなくなるよ! ってかハレルヤが出てこれるだけの出番が無いよ!』
ハレルヤ「ハッ!! そうですか!!……」
アレルヤ「フゥ…。あ!」
皆「……」
銀時「…えっ? 何? 今の何? 二重人格ですかコノヤロー?」
アレルヤ「……ハァ……」

第6話（前書き）

『建物』の中に入るシン達。
其処で出会った『者』とは…？

第6話

山崎「でかいですね。」
土方「ああ、確かにな。」

土方達は、謎の建物の扉の前にいた。

シン「開けますか？」

シンは扉の取っ手を触りながら言った。

桂「だが、結構重そうだな。なら、俺とシンと新八は此方の扉、真選組とチャイナはそっちの扉を開けてくれ。」
神楽「えー、何でアルか？　私銀魂のヒロインアルよ？」
新八「…ゲロ吐くヒロインがいるのかよ…。」
シン「…へっ？！　マジ？」
シンの神楽に対する（元々そんな高くない）好感度が下がった。

桂「んまい棒をやるからやれ。」
神楽「何で命令口調アルか？！　このハゲズラ！」
桂「ハゲズラではない、桂だ。」
土方「さっさとやるぞ！！　斬るぞ！！」

土方の鶴の一声で一同は黙り、大人しく扉を押し始めた。

ギギギギギギギ……

扉は、重い音を出しながら開いた。

土方「フゥ…、開いたか…。」

桂「ホラ、褒美のんまい棒、八朔味だ。」

新八「一応あげるんですね……って、いや、何八朔味って?！　聞いた事無いぞ！?」

シン「中に何があるか分からない。一応武器は出した方がいい。」

シンは拳銃を取り出しながらそう言った。

土方「そりゃそうだな。」

言って土方、山崎、桂も刀を抜いた。

土方「おい桂、いきなり襲い掛かったら斬り殺すぞ。」

桂「フッ、今の俺がそんな事をすると思っているのか?」

シン「昔だったら斬ってたのか…。」

桂「俺達が前に出るから、シン君は後ろで援護しろ。」

シン「分かりました。」

桂、土方、山崎は先に建物の中に入り、その後ろをシンが拳銃とナイフを持って入り、新八、神楽、しずか、定春、エリザベスも入った。

神楽「ぱっさく味んまいアル。」

新八「はいはい。後八朔味ね。」

山崎「暗いですね。」

土方「当たり前だ。電球も無きゃ、電気もねぇからな。」

桂「……?　誰かの視線を感じる…。」

桂は真選組に追われた事で研ぎ澄まされた感覚で、こちらを見つめる視線を感じ取った。

シン「！？」
土方「本当か！？」
桂「フッ、伊達に貴様等真選組に追われて研ぎ澄まされてはいない。」
土方「チッ！」
山崎「何処にいるんだ？」
桂「よし、シン君、付いて来い。」
シン「分かった。」

シンは桂の後を付いた。

桂「おい、其処にいるのは分かっている。大人しく出てくれれば何もしない。」

桂の問い掛けに、影らしきものが動いた。

シン「！」
桂「やはり俺の感覚に間違いはない。」
土方「…何かムカつくぜ。」
山崎「…同感で――――」

ドガッ！！

山崎「グハッ！」
土方「テメェは地味のクセに何言ってんだよ！！」
山崎「それはいくら何でも酷すぎますよ！」
土方「黙れ！！」

ドゴッ！！

山崎「ボゲガッ！！」

桂「ん？　出てくるぞ。」

その影は桂達の前に現れた。

？？？？？「フッ、随分楽しそうだな。」

桂「お前は…？」

その影の正体は、スーツ姿に金髪、その顔には、右側に大きな傷跡があった。

？？？？？「そうだな…、私は――」

見た目は全くの外人でありながら悠長な日本語を話す男は自分の名前を言った。

？？？？？「グァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！！！！！！」

『紅き月』が照らす町で、『それ』は高らかに叫んだ。

『それ』に対峙するは、三日月と鈴の付いた、刃には文字の描かれた大鎌、『大神祓』を構えた『狼面の少女』。

狼面の少女は『守る為』に『衝動』を抑えきれなくなった『同類』

を裁く。
その狼面の下に隠れた顔に表情は無い。
ただ『使命』の為に、守る為に、その大鎌を振るう。

ザシャ…ッ！！

？？？？？「ガァアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

少女の振るう大鎌に斬られ、断末魔の叫びを上げるそれ――否、『狼』。
それは『衝動』を抑えきれなくなった者や不埒を犯した者に対する『裁き』だった。
だが、異変は其処で起こった。

？？？？？1「――えっ？！」

少女は驚いた。
何故なら、自分が斬った『狼』の傷から、血ではなく、『霧』が出てきたからだ。

？？？？？1「どういうこ――――」

少女の言葉は其処で途切れた。
何故なら、その霧はまるで手の形になり、そのまま少女を『握り締めた』。

？？？？？2「――――様！！」

周りにいた狼面の者達の1人が少女の名を叫んだが、霧が消える頃には、少女の姿は何処にも無かった。

――――――――――――

？？？？？？１「うっ…んっ…」

少女は目覚めた。

？？？？？？１「此処は…？」

少女は辺りを見渡した。

？？？？？？１「……――――！？　此処は！？　私は確か『嫦娥町』にいた筈じゃ…！？」

少女は驚愕の顔を隠せずにいたが（顔自体は狼面に隠れて見えない）、それでも大鎌は構えていた。

？？？？？？１「一体どうなっているの…？！」

少女は少し考え、ある答えに辿り着いた。

？？？？？？１「もしかして…、『暴走者』を斬った時にでたあの『霧』が…？」

そうとしか考えられない。少女はそう結論付けた。

？？？？？？１「問題は…」

少女は改めて辺りを見渡した。
辺りはジャングルそのものだった。

？？？？？１「この状況をどう切り抜けられるか……ん？」

少女は地面にビンが置かれている事に気付いた。

？？？？？１「これは……！　『カプセル』！？　どうしてこれが…？！」

少女はその薬の入ったビンを手に取り、その内の１錠を出した。

？？？？？１「……やっぱりこれは『精油』…。でも、何でこれがこんな所…んっ？」

少女は何かを感じ取り、大鎌をそちらに向けた。

？？？？？１「（この匂い…『神堕人』！？）」

少女はその『香り』を嗅ぎ、大鎌を構えるのはやめたが、それでも警戒体勢は取った。

ガサガサガサガサ…

？？？？？１「（来る…！）」

そして、『それ』は現れた。

？？？？？３「コンチクショウ…！！　此処は何処なんだ…？」
男は草をかぎ分けながら進んでいた。
？？？？？３「クッソ…！　これから大佐……じゃなかった、推将とのラブラブベッドインがあるのに…！　何で軍施設の廊下で『霧』が出てきてよぉ…、気付いたらこんなジャングルなんだよ！」
よくよく見ると、男が着ている服は軍の制服だった。
？？？？？３「あー、良くわかんねぇ！　兎に角前進あるのみ！」
男は兎に角進んだ。
そして

ガサッ！

？？？？？３「よっしゃあ！！　草地獄から出られ……」

其処で男は止まった。
其処にいたのは、フードの付いた漆黒のロングコードを見に纏い、そのフードの下には狼を模した仮面があり、その仮面の『目』からは、紅い光が覗いていた。
更に、大鎌を持つ姿は一見すると死神にも見える。
？？？？？３「……」
男は余りの驚きに口を上手く動かせなかった。
が、やがて堰を切ったように叫んだ。

？？？？？３「ギィヤァアアア

第6話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

銀時「今日は名前だけだが3人出てきたな。」
シン「…なんか1人は完全にバレバレだけどな。…もう2人だって、知ってる人からすりゃ、バレバレじゃねぇかよ。」
銀時「ま、次回で判ると思うし、んじゃ、これで。」
シン＆ａｍｐ；新八「早ッ？！！」

第7話（前書き）

遂に3人の名前が明らかに！！（ほぼバレバレだろ

第7話

?????「…どうしよう…。」

少女は狼面の下でそう呟いた。
目の前には、自分の姿を見て気絶している男がいる。
そして周りは見た事の無い鬱蒼とした森。
ふと、少女は何かを思い出した。

?????「…そういえば…、あの『暴走者』、『何か』可笑しかった気がする。」

少女は先程斬った『暴走者』の事を思い出した。

?????「此処数年、『暴走者』や『不埒者』は出ていなかった。そういえば、その『暴走者』は『突如現れた』って聞いていたけど…、この場所とあの『謎の暴走者』、何か関係が…?」

少女は深い思考の奥に沈んでいた。
だからだろう、風上にいるのにも関わらず、此方に向かって来る『神堕人』の『匂い』が分からなかった。

ガサッ!!

?????「?!」

少女は突然の物音に驚き、その場から少し飛び退き、大鎌を構えた。

刹那F「…お前は…？！」

出てきた者の正体は刹那Fだった。

五代「大鎌…！？」

刹那「……あれ…？！　銀時さんは…？」

刹那は辺りを見渡した。

？？？？？「あなたは…？」

刹那F「俺の名は刹那・F・セイエイ。」

五代「…えっ？！　あれっ？！　どういう事…？！」

？？？？？「（この人達なら大丈夫だと思う…。）申し遅れました。私の名前は櫛名田眠です。」

？？？？？改め、眠は狼面を取りながら言った。

五代「えっ？！　えっ！？　ええっ！？」

刹那「！……清浦刹那…。」

五代「ええっと…！　俺、五代雄介！！　よろしく！」

五代は混乱しながら、眠に名刺を渡した。

眠「…夢を追う男…？　２０００の技を持つ男…？」

五代「うんうん！」

刹那「…ん？　あそこで伸びてる人は？」

刹那はその男に指差した。

刹那F「男…？……！？　連邦の軍服…！？　まさか…！？」
刹那「どうしたの刹那さん？」

刹那Fはその男の所に駆け寄った。

刹那F「……間違いない…。やはり連邦の…。」
？？？？？1「うっ…ううん…！」
刹那F「起きたか…。」
？？？？？1「あれ…？　此処は……ってあの大鎌の奴は！？」

男はガバッと飛び起きた。

眠「…此処です。」
？？？？？1「……へっ？！」

男は眠の顔を見て、唖然とした顔をした。

？？？？？1「……（あれっ？！　この言葉、どっかで聞いた事のあるような……。）」
眠「？」

男は難しい顔をして考え込んでいた。

？？？？？1「（え～っと……何だっけ…？……おっ！　そうだ！　確か日本語だったな！！）」

男は何かを思い出した顔をした。

？？？？？1「あー、あー、コホンッ。えー、俺様の名は元ＡＥＵ、現連邦軍のエース、パトリック・コーラサワー（名字は結婚後も変

わっていないという体で）だ！　宜しく！！」

？？？？？１改め、コーラサワーは学校の授業で適当に覚えていた日本語で喋った。

刹那Ｆ「（やはり、俺の世界の…）」

コーラサワー「所で、アンタ達の名前は？」

刹那Ｆ「…ん？　ああ、俺は刹那・Ｆ・セイエイだ。」

眠「櫛名田眠です。」

刹那「清浦刹那。」

五代「五代雄介です。」

五代は名刺をコーラサワーに渡した。

コーラサワー「ん？　夢を追う男？　２０００の技を持つ男？　良いじゃねぇか。」

銀時「俺も忘れるなコノヤロー！！　坂田銀時だコノヤロー！！」

刹那「…今まで何してたの？」

銀時「イエ、ギンサンキゼツシテマシタ。」

刹那Ｆ「何故カタコト？」

眠「櫛名田眠です。」

コーラサワー「パトリック・コーラサワー様だ。よ～く覚えておきな。」

銀時「何？　眠だっけ？　何その格好？　コスプレの類いかそれ？」

眠「……」

眠は無言で大鎌を銀時の頭上に振るった。

銀時「ヒイッ？！」

眠「……」

無言で微笑む眠。
だが、その目は一切笑ってなかった。
更に周りにはドス黒いオーラが漂っていた。

銀時「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

刹那F「いや、非常食を食べるのは、本当に危険な時だけだ。」
コーラサワー「ハァ！？」
刹那「何でよ！」
銀時「テメェ！！」
眠「食料持ってきました。」
五代「あ、俺も！」
3人「へっ？！」

眠と五代は果実等を持ってきた。

刹那F「さて、食べるか。」
眠「食べましょう。」
五代「食べますか！」

3人は果実等を食べ始めた。

3人「……」

残りの3人はただただそれを見ていた。

銀時「甘いもん食いてぇなぁ…。」
五代「あ、向こうにミツバチの巣がありましたよ？」

それを聞くと銀時はそのミツバチの巣に向かった。

刹那F「奴は熊か。」
眠「いいえ、甘い物の亡者です。」
2人「……」

数分後

銀時「取ったどぉおおお

グラハム「其処の扉からだ。」

グラハムは親指で向こうにあるマンションみたいな扉を指差した。

新八「うわぁ…。」
グラハム「どうやらそっちの扉が正面の様だな。」
山崎「この建物、どうするんですか？」
土方「ああ、そうだったな。」
グラハム「どうやら4階まである様だな。どうする？」
シン「俺は4階を。」
桂「俺は間を取って3階。」
シン「いや、誰も2階を取っていないですか？」
土方「山崎、お前行け。」
山崎「了解しました。」

シンは4階、桂は3階、山崎は2階に行った。

土方「フゥー…。これからどうなるんだか。」
グラハム「確かに、な。」
しずか「……」
神楽「しずかちゃんどうしたでアルか？」
しずか「あの黒い服を見てると…、あの死体を思い出しちゃう…。」
土方「死体？　ああ、あの死体の山か？　あれはヤバかったな。だが、あの死体は探検隊の様な格好をしていたが…？」
しずか「ううん、ありがとう。これで気が済んだわ。」
土方「おいおいおい。それじゃ俺と山崎があの探検隊を殺したみていじゃねぇか。」
神楽「短気なのもいい加減にするアル。」
土方「んだとオラァ！！　殺ってねぇって！！　お前ブッた斬るぞコラァ！！」

神楽「おうおうおう。掛かってこいアル！　返り討ちにするアル！！」

土方は刀を構え、神楽は傘を構えた。

新八「ちょっとぉ！？　何やろうとしてんだ！！」

エリザベス『私にお任せを。』

新八「エリザベスが？」

エリザベスは前に出た。

既に土方と神楽はそれぞれ自分の得物で鍔迫り合いをしていた。

新八「エリザベスは一体何をしようと…？」

グラハム「面白い。刮目させて貰おう。」

新八とグラハムはエリザベスの顔を覗き込んだ。

エリザベスの口には『キャノン砲』が出ていた。

新八＆ａｍｐ；グラハム「――――！！？」

新八とグラハムは驚愕し、

新八「と…取り敢えず少し離れようか…。」

グラハム「…そうだな…。」

２人はエリザベスから離れた。

そして、

ドンッ…！！

放たれた弾丸は真っ直ぐ土方と神楽に向かい…

ドォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！

土方＆ａｍｐ；神楽「ぐあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！」

新八「ハァ…。」

２人「……」

山崎「廊下の片側、７部屋ずつ、合計１４部屋。中の広さは３．５畳程、窓は無い、か…。特に何も無かったから戻るか。」

山崎はそう言って１階に戻った。

桂「何も無かったか…。」

桂は３階を調べていた。

だが、廊下の片側、４部屋ずつ、合計８部屋の中には何も無かった。

桂「部屋には板で塞がれている窓以外何も無かった。なら、一度１階に降りるか。」

桂も１階に降りた。

シン「…これは…？！」

４階に来たシンは驚いた。
何故なら、４階には６本の柱しかその空間を仕切る物が無く、板で塞がれている窓の隙間からは、傾いてきている太陽の光が洩れ出ていて、何とも言えない光景だった。

シン「……ゴクッ…！」

シンは唾を飲み込むと４階を調べ始めた。

シン「……ん…？」

シンは柱の影に『何か』ある事に気付いた。

シン「あれは…？」

その『何か』に近付くシン。

シン「これって…？」

その『何か』の正体は、何かの鍵だった。

シン「……？」

シンはその古びた鍵を手に取った。

シン「まあ、然程重要な物、でも無さそうだな。」

シンはそう言って鍵をポケットにしまった。

シン「さて、戻るか。」
シンは1階に戻った。

土方「成る程な。そうか。」

エリザベスの攻撃でボロボロの土方は、煙草を吸いながらシン達の話を聞いていた。
神楽も土方と同様にボロボロだった。
グラハム「どうやら日も傾いている。早めに食料を取らなければ、全く動けんぞ？」

それを聞いた神楽は速攻で食料を取りに行った。

シン「早ッ！？」
神楽「帰って来たアルヨ。」
神楽はものの数秒で大量の食料を持って来た。

シン「何なんだアンタは？！　つかさっきの『ふざけ』で取った魚は？」
神楽「私と定春が全部食ったアル。」
シン「アンタって人はぁーっ！！！」
桂「まあいい、これで今日の食事は問題ない様だ。」
新八「いや桂さん。何壁に寄り掛かってカッコ付けてるんですか。」
桂「フッ」
新八「いや、もう良いで――――」

ガコン…ッ！

全員「？」

それはほんの小さな音だったが、何故か良く響いた。

桂「何だ？　俺のせいか？」

シン「何だろ？　全体に響いている感じだったけど…？」

神楽「でも、何も無いアル。」

しずか「思い過ごし…って訳でも無さそうだけど…。」

土方「ま、何も無きゃねぇで良いんだよ。」

桂「……」

シン「（…桂さん…。）」

グラハム「詳しく調べるのは明日でも出来る。今は食事の準備だ。」

神楽「アイアイサー。」

新八「でも、火はどうやって…？」

グラハム「何を言っている？　火を起こすだろ？　普通、この状況では。」

山崎「そう思って木の枝や板を持ってきました。」

土方「流石だな、山崎。」

桂「では俺が真選組に追われていた時に編み出した、速攻で火を起こせる最強の技を見せてやろう。」

土方「チッ！」

桂「フォオ〝オ〝オ〝オ〝オ〝∀⊃↑∪△☆¥＊◎●∪∠♭♯Ξ Mζι ΒΑдЖΧΜБ３ψωσΦΦΛΝヱゑ‰ΕΠ※◇§＆。＞￡＜⇔⊃♭ヰＸ┬ыфшждЩψＡ√ヱヴァ！！！！」

新八「何ですかその呪文は？！」

桂「火付いたぞ。」

新八「ええっ！？」

シン「１０秒も経ってない気が…。」

新八「早すぎるから！」

桂「言った筈だ。『速攻で火を起こせる最強の技を見せてやろう』

ってな。」
新八「そ…そうでした…。」
桂「焼くものは？　火は俺に任せろ。」

何だかんだで食事は済んだ。

新八「早っ！？」

後、神楽と定春が人の食べ物を盗ろうとしてシンに鉄拳制裁を受けた事を加えておこう。

神楽「痛かったアル…。」
定春「クゥ～ン…。」
シン「当たり前だ！！」

一同は謎の建物の3階で寝る事にした。
向かって左手前の部屋にシン、桂、新八、エリザベス。
その隣の部屋に土方、山崎、グラハム。
その向かい側の部屋に神楽、しずか、定春が入った。

新八「僕達…、明日からどうすればいいんだろう…？」
シン「そうだな。」
桂「何、心配するな。この真選組に追われている時にサバイバル術を身に付けた俺がいる限り、何ら問題無い。」
エリザベス『そうだそうだ！』
シン「ってさ。」
新八「…そうですね。僕達は一丸になればどんな困難にも立ち向かえる。まあ、銀さんがいないと妙に寂しいけどね。」
シン「銀さん？　誰？」

新八「あ、そうか。」
桂「その説明は俺が…」
新八「桂さんは黙って下さい。」
桂「……」
シン「（桂さん哀れ…。）」
新八「銀さん…坂田銀時は、何時もだらしないけと、侍の心はどんな人よりも強く持っている、そんな男。」
シン「ふーん。一度会ってみたいな。その銀時さんって人。」
新八「ハハッ、銀さん何時もだらしないし、目なんて死んだ魚みたいですよ？」
シン「死んだ魚の目…？」
新八「でも、やる時はやる人で、銀さんの周りにはいつの間にか色んな人達が集まっているんだ。」
シン「きっと銀時さんには、人を惹き付ける何かがあるんだよ。」
新八「そうですね。」
シン「ふぁ～…。そろそろ寝よう…。明日もあるし。」
新八「そうですね。」
桂「（人を惹き付ける何か…か。俺が江戸を壊せなかったのは、その銀時の何かに惹き付けられたのだろう…。）」
シン「桂さんお休み。」
桂「ん？　ああ、お休み。」

シンと新八は寝た。

桂「（高杉…、お前は何故分からない…いや、分かろうとしない…？　銀時の何かを…。まがりなりにも江戸は平和なのだ…。だが、それでもお前が全てを破壊するというのなら、俺達はお前を倒す…。）」

桂はかつての戦友に思いを馳せた。

山崎「ハァ～…。俺達、何時になったら帰れるのでしょう…？」
土方「んなもん知るかよ。」

土方は窓の板を外し（板は数枚の木の板で出来ているが、窓枠に嵌めているだけだった）、煙草を吸った。

土方「フゥ…。煙草、調節しねぇとな。何時帰れるかわかんねぇしな…。」

土方は独り言を言いながら頭を掻き、煙草を吸った。

しずか「……」
神楽「どうしたアルか？」

しずかは窓の木の板を外し、窓枠に両腕を乗せ、項垂れていた。

神楽「しーずーかーちゃん。」
しずか「えっ…？！　何？」
神楽「何か項垂れてたから声掛けたアルヨ。」
しずか「ん、そうだったの…。」
神楽「早く寝るアルヨ？　お休みアル。」
しずか「あ、うん。」

神楽は定春を抱き締めて寝た。

しずか「……」

しずかは今まで一緒に冒険をした４人の顔を思い出していた。

しずか「……」

どれ位経ったのかは分からない。

だが、しずかは急に眠気を覚え、木の板を窓枠に嵌め、神楽と同様に定春を抱き締めて寝た。

眠「……」

刹那Ｆ達は洞窟（刹那Ｆがフラッグを隠した洞窟とは違う）で夜を明かす事にした。

だが、眠は大鎌を持ったまま、月を見ていた。

眠「（あの『暴走者』は一体何者だろう…？）」

眠は謎の暴走者の事をまた考えていた。

？？？？？「お～い、寝ねぇのか～？」

眠は後ろから声が聞こえたので、後ろを向いた。

眠「…銀時さん…？」

銀時「よ。どうしたんだ？　そんなに月を見て。後、俺の事は銀さんでも良いぜ？」

銀時は眠の側まで歩いた。

眠「あ、いえ…、あんなに綺麗な月を見たのは初めてです。」
銀時「何？　じゃあ眠の世界の月は無茶苦茶汚いのか？」
眠「そんな訳ないじゃないですか。私の生まれ育った町は山の中にあって、条件によって『月が紅く見える』事がありますので…。」
銀時「うへぇ～！　ウサギじゃなくて悪魔とかバケモンとか降りてきそうだぜ。」
眠「……」
銀時「へっ？！　気ぃ滅入った？！　だったら言うわ、ゴメン。」
眠「いえ…、そう思われても仕方がない…ですよね。」
銀時「いやホントにゴメン！　今の、記憶からさっさと消去してくれ！！　頼む！！」
眠「えっ…あ…はい…。」
銀時「まあ、お前もさっさと寝ろよ。明日もあるんだし。……ん？　まだ明日か、…それともう今日なのか…。どっちだ？」
眠「そんな事知りません。」
銀時「そうだよなあ…。じゃあお天道様が出てくるまで今日にして、お天道様が出切ったら明日にしね？」
眠「…もういいです。」

眠は洞窟に行った。

銀時はその事に気付かず、終始今日と明日の定義を考えていた。

眠「ハァ…。」

眠は深い溜め息を吐いた。

眠「あの人……銀さんといると、妙に気を使う…。でも…」

眠は振り向き、まだ今日と明日の定義を考えている銀時を見た。

眠「良い人っていうのは間違いないみたいですね。」

眠は銀時に微笑みかけると、洞窟に向かった。

銀時「ゼェ…！！　ゼェ…！！　ゼェ…！！　ゼェ…！！」

今日と明日の定義を考えていただけだが、何故か息を荒くする銀時。

銀時「……あれっ？　眠は何処行った！？」

銀時は辺りを見渡した。

銀時「……フゥ…。寝るか。」

銀時は洞窟に向かった。

だが、その洞窟で、とんでもない事が起きようとしているのを、彼らは知らない。

第7話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

銀時「えー、今回は、『おおかみかくし』から『櫛名田眠』、『機動戦士ガンダム００』から『グラハム・エーカー』と『パトリック・コーラサワー』が『ロスト』されましたー。」
眠「どうも。」
グラハム「さて、この私をたぎらせる物はあるのか？」
コーラサワー「大佐～！！……あ、間違えた。推将～！！」
シン「…何だこの個性的な2人は。」
刹那F「……」
グラハム「ッ！　あの時の少年じゃないか！！」
刹那F「ハァ…。」
銀時「生ハム、出てきた所で悪いが、2、3話位出てこないので其処は留意する様に。」
グラハム「そうか。だが、私は我慢弱い男だ。さっさと出してくれると有り難い。」
銀時「そ…そうか…。」
眠「何故私が此処に？」
銀時「さあな。だが、この出会いは実は『今後』の為の伏線という事を忘れずにな。」
眠「…？」
シン「俺の過去って一体何時になったら…？」
銀時「『8．5話（1．5話）』にお前の過去が語られる事になった。」
シン「そうですか。」
銀時「つー事で、また次回な！！」

コーラサワー「推将ウウウ

第8話（前書き）

刹那F一行が色々と大変な目に合います。（笑）
銀時「笑い事じゃねぇよコノヤロー！」

バキッ！

あべしっ！！
刹那F「…何やっているんだお前ら…。」

第8話

ゴトン…ッ！！

洞窟で寝ていた刹那F一行は、洞窟に響いた音で目覚めた。

刹那「ん…？」
コーラサワー「何だぁ？」
五代「あれ？　何で暗いんだ？」
眠「…何？」
銀時「オイ、せっつぁん。」
刹那F「…せっつぁん…？」
銀時「入り口が岩で塞がってるんだが…どう思う？」
刹那F「さあ…？」
皆「えっ！？」

銀時と刹那F以外は一斉に入り口の方を振り向いた。

五代「…あっ！」
眠「入り口が…？！」
コーラサワー「マジかよオイ！？」
刹那「そんな…！？」

入り口は岩で塞がれており、岩と入り口の隙間からは、だいぶ昇っているだろう、太陽の光が洩れていた。

銀時「さあ皆さん、この状況、どう思いますか？」

眠「どう考えても閉じ込められたとしか…」
刹那F「後ろを見ろ。」
眠の言葉を遮り、刹那Fが懐中電灯を付けたライフルを洞窟の奥に向けた。
コーラサワー「後ろって、この洞窟はこの先行き止まりだろ……ってハァッ！？　マジかよオイ？！」
コーラサワーは後ろを見て、驚愕した。
それに釣られて3人も後ろを見て、同じように驚愕した。
其処には、『下へと続く道が出来ていた』事だった。
コーラサワー「オイオイオイオイオイ…！　マジかよオイ…！？」
刹那F「ああ、マジだ。」
刹那Fは懐中電灯の予備の2本を取り出し、刹那と銀時に渡した。
五代「あ！　そういや俺も懐中電灯持ってたんだよな。」
そう言って五代は懐中電灯を2本取り出し、自分はヘッドライトを頭に付けた。
五代「どうぞ。」
コーラサワー「おお！　ありがとうな！」
眠「いえ、私は大丈夫です。」
コーラサワーは喜んで懐中電灯を受け取ったが、眠は懐中電灯を受け取らなかった。

五代「えっ…？！　そうですか…。」
五代は懐中電灯をしまった。
刹那「…光が届かない…。」
刹那は洞窟の奥に懐中電灯を向けた。
だが、懐中電灯の光は洞窟の奥には届かなかった。
銀時「せっつぁん、どうするんだ？」刹那F「だからせっつぁんって何だ？」
銀時「いや、名前がせっちゃんと被ってるからせめて渾名だけでも付けようかと思いまして。」
刹那Fは少し考えて
刹那F「ああ、別に問題無い。」
銀時「あざーす！」
刹那「せっちゃんって…。」
銀時「今度から刹那Fはせっつぁん、刹那はせっちゃん。異論は一切認めん。」
刹那「ええっ？！」
刹那F「いや、台詞までFを付けなくともな…。」
眠「というか何時になったら行くのですか？」
銀時「ん？　ああ、そうだったな。それじゃ皆さん、逝きますか。」
五代「何処へ！？」
刹那F「未だ死にたくはないな…。」
兎に角、刹那F達は洞窟の奥に進む事にした。

刹那F「暗いな…。」
眠「ええ、そうですね。」
コーラサワー「おーい！！」
おーい…
コーラサワー「おっ？！　響いたぜ。」
銀時「マジか？　それじゃあ俺も……」
ゴゴゴゴゴゴゴゴ……
全員「？！」
刹那F達は一斉にコーラサワーを見た。
コーラサワー「えっ！？　俺のせい！？」
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……！！！！
全員「！！」
音は更に大きくなった。
コーラサワー「何処からだ？！」
銀時「さあね……へっ！？」
銀時は後ろを見て、固まった。
眠「銀さん、どうしまし…えっ！？」

眠も後ろを見て、固まった。

４人「ん？」

他の４人も後ろを見て、固まった。

其処には、岩が転がっていた。

銀時「えっと…、これって何？　普通に逃げた方が良くね？」

刹那Ｆ「逃げるぞ！」

刹那Ｆの言葉を皮切りに、全員逃げ出した。

コーラサワー＆ａｍｐ；五代「どわあああああああああああああああああああああああああああああ！！！？？？」

銀時「どうする！？　せっつぁん！？」

刹那Ｆ「兎に角走れ！　死にたくなければな！」

眠「清浦さん、大丈夫ですか！？」

刹那「大丈夫です！！」

銀時「よし！　全力で走れ！！　命を掛けた疾走だぜコノヤロー！！」

刹那Ｆ一行は、岩から全力疾走で逃げた。

銀時「コノヤロー！！　何でこんな事になるんだっ！！」

眠「銀さん！　無駄口叩いてる暇があったら、さっさと走って下さい！！」

銀時「バカだな～眠ちゃん。文字数でいったら、お前の方が喋っているんだぜ？」

眠「何ですかそれ！？」

コーラサワー「もう黙ってろよ！！」
刹那Ｆ「チッ！　こうなれば…！！」
刹那Ｆはグレネードランチャーをライフルに取り付け、立ち止まって後ろを向いた。
銀時「せっつぁん！？」
刹那「刹那さん？！」
銀時と刹那は、刹那Ｆの動きに気付いた。
銀時「オメェ…！　何する気だ！？」
刹那Ｆ「食らえ…！」
刹那Ｆはグレネードランチャーを天井に向けて撃った。
バシュッ！！
ズガァアアア

コーラサワーは座り込み、五代も壁に寄り掛かった。
刹那「刹那さん…凄いです…！」
眠「成る程…、そういう手もあるのですか。」
刹那は肩で息をしながら言い、眠は手を顎に当てながら言った。
銀時「へっ！　ざまぁ見ろってんだコノヤロー！！」
銀時は崩れ落ちた天井の方に歩き、言うだけ言っていた。
刹那F「坂田銀時、行くぞ。何時また動き出すか分からないからな。」
コーラサワー＆amp;五代「……へっ？！」
銀時「へいへい。そうですかー。それじゃ皆さん、生きましょうか。」
眠「銀さん、漢字間違ってます。」
刹那F一行は奥に向かった。
コーラサワー＆amp;五代「……」
コーラサワーと五代は、後ろをちょくちょく見ながら歩いていた。
銀時「なーに後ろ見てんだよ。どーせ音で判るしな。」
刹那F「確かにな。」
刹那「皆さん！！　あれ！」
刹那は洞窟の向こうを指差した。

刹那F「刹那、何を見付け…、成る程。」
銀時「皆様方に朗報です。出口を見付けました。」
コーラサワー&五代「マジでぇ？！」
眠「…ホッ」

刹那F一行は洞窟の出口を見付けた。

コーラサワー「俺様が一番乗りだぜ！！　キャホゥ！！」
銀時「そこはこの俺だろうが！！」

コーラサワーと銀時は走った。

刹那F「…子供かお前ら…。」

刹那F一行は、精神年齢と実年齢が合ってない人ばかりなのだ。
実年齢が高い程精神年齢が幼いし、逆に実年齢は低いが、精神年齢は割りに合わない人ばかりなのだ。

銀時「残念でした〜！　銀さんが一番乗……」
刹那F&眠「？」
コーラサワー「オラァ！！　この俺様を差し置い……」

出口の向こうで聞こえた銀時とコーラサワーの声は、途中で止まった。

五代「どうしたんだ？」
眠「取り敢えず、行きましょう。」
刹那F「そうだな。」
刹那「うん。」

刹那F達は、出口に向かった。

刹那F「おい、どうし…」

皆「！？」

刹那F「こ…これは…？！」

刹那F達は出口から出て、絶句した。

其処は『巨大な空間』で、３台のトロッコがあった。

銀時「おいおいおいおい、何ですかこれは？　何？　あれですか？　王道物の冒険物語？　んなバカな。銀さん乗っても『イヤッホォー！！』とか言わねぇし。」

五代「でも、何か楽しそうじゃないですか？　何か俺の冒険魂が沸き上がっているんだけど。」

コーラサワー「おっ？！　実は俺もそうだぜ。」

銀時「おいおいおい、マジかよコノヤロー。」

眠「でも、足場は此処しかありませんよ？　銀さん、どうするんですか？」

銀時「んな事、俺に聞くな。」

刹那F「（いや、何故だ？　何故『こんな所にトロッコがある』んだ？　此処は『無人島』の筈だ。何故…？）」

刹那Fは根本的な事を考えていた。

確かにこの島は『無人島』である。

だが、こうして目の前にトロッコが、複雑に組み上がった木製の陸橋が、その上に敷かれた鉄製のレールが、確かに存在するのだ。

銀時「フッ、俺は敷かれたレールの上は歩かない主義だ。」

……銀時の言葉を無視して話の続き。

銀時「……」

それらが、何故この島に存在するのか。
そしてこの巨大な空間は一体何なのか。
地上にある建物と合わさって、この島の特異性を際立たせている。
更に言えば、土方一行の大半が目撃した、集団心中死体。
何故、彼らは自殺という手段を使ったのか。
この島には『そうならなければならない程の何か』があるのだろうか。
今の所は一切分からない。
だが、１つだけ言える事はある。

この島には何かがある…。

刹那Ｆ「……？」

刹那Ｆは辺りを見渡し始めた。

刹那「？　どうしたんですか？　刹那さん。」
刹那Ｆ「いや、微かに音が聞こえるのだか…。」
コーラサワー「気のせいじゃね？」
刹那Ｆ「いや、……これは…？」
眠「？」
銀時「……！　まさか！？」

銀時は懐中電灯の光を洞窟の奥に向けた。

銀時「おいおいおいおいおい…！　マジかよコノヤロー…！」
眠「どうしたんで…！？」

眠の声で残りの４人も洞窟の奥を見た。
３人「……？！」
刹那Ｆ「やはり…か！」
洞窟の奥から、刹那Ｆが止めた岩が転がってきた。
コーラサワー「おいテメー！！　止めたんじゃねぇのかよ！！」
五代「コーラサワーさん！　刹那さんが止めたのは『一時的』ですよ？！」
刹那Ｆ「乗るぞ！」
銀時達は刹那Ｆの言葉でトロッコに乗り込んだ。
１つ目のトロッコには銀時と眠。（以後トロッコ１）
２つ目のトロッコには刹那Ｆと刹那。（以後トロッコ２）
３つ目のトロッコにはコーラサワーと五代（以後トロッコ３）がそれぞれ乗り込んだ。
そして、トロッコが一斉に動き出した。
銀時＆ａｍｐ；五代＆ａｍｐ；コーラサワー「イィイイイイヤッッッホォオオオ

眠「がいる崖下に突き落としますから。」
銀時「オィイイイ

刹那「……」
銀時「ええっ？！　何コレ？！」
眠「銀さん前！！」
銀時「んっ？……うおっ？！」

トロッコ1の前にはトロッコより少し大きめのトンネルがあり、銀時は体を屈む事でトンネルの壁に激突する事を避けた。

銀時「いやあぶねーぜコノヤロー！」
眠「というか、こんなの何時まで続くのでしょうか…？」
銀時「……」

銀時はトロッコ2と3を見た。

トロッコ2の刹那Fと刹那は相変わらず無言だし、トロッコ3のコーラサワーと五代はずっと興奮していた。

銀時「……無茶苦茶じゃねぇかコノヤロー…。」
眠「そう…ですね…。」

トロッコはまだ疾走していた。

第8話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

銀時「ったくよ、本当に色々と大変だったぜ。」
刹那F「ああ、作者が第7話で言おうとして言い忘れた事を今此処で俺が言おう。」
コーラサワー「何だ？」
刹那F「眠は『おおかみかくし本編の凡そ1～2ヶ月前の時』にこのロスト・ワールドに『ロスト』されたという事になっている。」
銀時「という事は、この眠は『おおかみかくし本編の凡そ1年前の眠』という事だな？」
刹那F「その通りだ、坂田銀時。」
銀時「でもな、何でそんなあんまり意味の無い設定をするんだ？」
刹那F「さあな。作者に問い質しても作者は音楽を聴いていたから問い質すのを止めた。」銀時「フーン。……ってこれで終わりかよ？！」刹那F「…ああ、次回は番外編として『シン・アスカの話』になる。シンの『オリジナルの部分』が明らかになる。」
銀時「…何で作者はシンなんかをプッシュするんだ？　ぶっちゃけ言ってシスコンなだけの只の負けい――――」
シン「オラァ！！」

ドガッ！！

銀時「ぶげらっ！！」
眠「…自業自得です。」
シン「俺が負け犬？　ハッ！　そんなモン、次回の『第8．5話』を読まなきゃ判るかよ！」

銀時「……」
刹那F「返事が無い、只の屍のようだ。」
シン「……」

第8．5（1．5）話（前書き）

銀時「はーい、さっさと終われコノヤロー。」
シン「何でだよ！！」
刹那F「今回はシンしか出ていないのも当然だからな。」
神楽「こんな負け犬ごときの為に何下らないオリジナル書いてるアルカ。」
シン「……」ブチッ！！
神楽「まあ、どうぜ負け犬らしい負けストーリ――」

ドガッ！！

神楽「バボガッ！？」
シン「…八つ裂きにされてぇか…？！　クソ天パとクソチャイナ…！」
沖田「俺も参加しやす。」
土方「これでテメェもおしめぇだな。」
沖田「あ、先に土方を八つ裂きにしやす。」
土方「ああッ？！　テメェを八つ裂きにしてやろうか！？」
沖田「掛かって来いよ！　返り討ちにしてやるから。」
神楽「お前が大人しく八つ裂きにされろアル。」
沖田「ハァ？　オメェが八つ裂きにされろよ。」
神楽「あぁ？！　上等アル！！」
土方「死ねぇえええええええええ！！！！」
シン「……」
銀時「あ～あ、こりゃ大変なこった。」
刹那F「何なんだこのグダグダ感は…？」
シン「もう…訳わかんねぇ…。」
刹那F「まあ…とにかく、今回はシン、お前のオリジナルストーリ

ーだ。あんな下らない奴らはほっといておけ。」
銀時「ねぇ？　それ、俺も入ってんの？　ねぇ？」
シン「…ああ、そうだな。」
銀時「うわっ、マジで無視だよコノヤロー。」
シン「では、どうぞ！」

第8．5（1．5）話

ＣＥ７４、月面、メサイア内部

ザフト軍が新たに建造した要塞、メサイアは、連合軍から奪取したレクイエムの付近にいた。
何故なら、其処でオーブ軍との戦闘が起きるからだ。
その議長室にザフト軍のエース、シン・アスカはいた。

ギルバート「……シン、それは本気、かね？」
レイ「シン…？」

プラントの議長、ギルバート・デュランダルとシンの同僚のレイ・ザ・バレルは驚愕の目でシンを見た。
それは周りのザフト兵士も同じだった。

シン「ええ、エターナルは俺１人で叩き落とします。」

ギルバートはシンのその言葉に溜め息を吐き、頭を抱えた。

ギルバート「シン、エターナルを落としたい気持ちは判るが、戦場では、たった１機のＭＳで、１人の兵士でどうにかなる程、甘くはない。」
シン「それでも、俺は１人でエターナルを落とす！　アイツらのせいで多くの人が無駄に命を落としました！　これ以上、あんな奴らのせいで多くの人が死ぬのは御免です！」
ギルバート「…！」

ギルバートはシンのその赤き目の奥にある強い意思を見付けた。

ギルバート「ハァ…。分かった。許可しよう…。」
レイ「ぎ…議長？！」

レイは驚愕した顔になり、周りのザフト兵士達も驚愕した。

ギルバート「但し、１つだけ、言う事がある。」
シン「何ですか？」
ギルバート「必ず生きて帰ってこい。ただ、これだけだが、これは命令だ。良いな？」
シン「なら、大丈夫ですね。」
レイ「シン…お前…。」
シン「レイ、俺は先に出る。」
レイ「シン…生きて帰ってくれ…。変わる世界の為に…。」
シン「…ああ。」

シン「シン・アスカ、デスティニー、出る！」

デスティニーは飛翔した。

シン「……」

シンは目を瞑り、亡くなった者達を思い出した。

シン「（マユ…ステラ…ハイネ…皆…。）」

シンは目を開けた。
その目には光を宿っていなかった。
だが、その目にはシンの意思が代わりに宿った。
シン「これで終わりにしよう…、今までの世界。新たなる世界の為に…。」
デスティニーは真っ直ぐエターナルに向かった。

兵士「！？　真っ直ぐ此方に向かうＭＳを確認！！」
バルトフェルド「何？！」
ラクス「直ちに迎撃を開始して下さい。」
兵士「了解！」
シン『ラクス・クライン！！』
皆「！？」

突然シンはエターナルに通信を入れた。

ラクス「貴方は…？」
シン「シン・アスカだ！」
ラクス「貴方が…」
シン「１つ聞きたい。何故アンタはこんな事をする？！」
ラクス「こんな事…？　私達は議長が行う自由の無い、死の世界の遂行を止める為に――――」
シン「ふざけるなっ！！！」
皆「！？」

シン「議長の行う事は間違っているかもしれない！」
ラクス「では、尚更私達の所に…。」
シン「アンタ達の所に…？　ククククク…！　ハハハハハハハハ…！！」
ラクス「…何が可笑しいですか？」
シン「ふざけるな！！　俺の家族はフリーダムに殺されたんだ！！」
皆「？！」
シン「何でそんな奴がいる所に入らなきゃならないんだ！？　酷い冗談か何かか？　これは？！」
ヒルダ「おっと、悪口は其処までだ！」
シン「アンタらに用は無い！！」

デスティニーは凄まじい勢いでドムトルーパー3機を瞬撃した。

シン「俺に用があるのは、ラクス・クラインとフリーダムだけだ！！」

爆散するドムトルーパーの光をバックに、デスティニーは対艦刀、アロンダイトを構えた。

シン「ラクス・クライン、これは警告だ…。」
ラクス「えっ…？」

ザン…ッ！！

デスティニーはエターナルの艦首を根元から叩き斬った。

ラクス「！？」
バルトフェルド「何だと！？」
シン「このまま降伏すればそれで良い。だが、このまま戦おうとす

るならば、次はアンタの首だ…！！」
ラクス「それでも、私達は議長を止めます！」
シン「そうか…、アンタの歌は嫌いじゃないがな…。」

デスティニーはエターナルの艦橋に向けてアロンダイトを振り下ろそうとした。
だが

ドゥンッ！

シン「！」

一筋のビームがデスティニーに向けられ、シンは攻撃の手を止めた。

シン「フリーダムか！！」
キラ「ラクス！　クッ！　デスティニー！」

キラの目にはシンと同様、光を宿っていなかった。

シン「フリーダム！！　アンタのせいで、色んな人が死んだんだぞ？！　分かっているのか！？」
キラ「分かっている！　だから僕は…」
シン「ふざけるなっ！！！」
キラ「！？」
シン「何が『分かっている』だ！！　何が不殺だ！！　アンタはただ自己満足の為にやっているだけだ！！」
キラ「なっ…？！　自己…満…足…？！」
シン「そうだ！！　その下らない偽善の為に多くの人が死んだんだ！！　それを分かっているのか！？　アンタは！！！」
キラ「押されている？！　この僕が！？　クッ…！　それでも、僕

達は！！」

シンとキラは言い争いながらも、お互い機体を動かし、誰も寄せ付けない攻防を繰り広げていた。
だが、両機ともダメージは受けているが、ストライクフリーダムの方がダメージは大きかった。

シン「アンタは何の為に戦う！？」
キラ「クッ…！　僕は議長を止める為に戦う！！」
シン「ハッ！　どうせ『誰かが敷いたレールの上』じゃなきゃ何も出来ない癖に！！」
キラ「君に僕の何が分かる？！　そういう君だって議長が敷いたレールの上にいるんじゃないのか！？」

ストライクフリーダムはスーパードラグーンを全て射出した。

シン「違う！！　これは…！　これは俺が決めた道だ！！！」

デスティニーはスーパードラグーンを全て斬り落とした。

キラ「なっ…？！　クッ！！」
シン「アンタと俺じゃあ、覚悟の質が違うんだよ！！」
キラ「クッ…！」
シン「アンタは俺が撃つ！！　今度こそ！！！」

デスティニーの砲撃は、ストライクフリーダムの左肩と左の翼を焼き落とした。

キラ「うっ…うわぁあああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

ストライクフリーダムは気が狂ったかのように残りの武器を乱射した。

シン「？！」

デスティニーはビームシールドを使い、それらを防いだ。

シン「あの叫びといい…どうしたんだ…？」

キラ「ぉおおお

げるシン。
ストライクフリーダムはビームサーベルを、デスティニーはパルマ・フィオキーナを突き出し、突撃した。
そして

ドガッ！！

キラ「？！！」

デスティニーの掌底は確実にストライクフリーダムのコクピットを捉えたが、ストライクフリーダムのビームサーベルは、デスティニーの実体シールドに受け流されていた。

シン「そう言えば、アンタの名前は確かキラ・ヤマトって言ってたな。」
キラ「シン！！」
シン「！　あの裏切り者から聞いたのか…。だが、キラ！　アンタは此処で死ね！！」
キラ「シン・アスカ！！！」
シン「黙れぇえええええええええええええええええええ！！！」

デスティニーの掌底は輝きを増し、そして

ドゥンッ…！！

デスティニーのパルマ・フィオキーナはストライクフリーダムのコクピットを完全に貫いた。

全員「！！？？」

その時、戦場は衝撃と驚愕で凍り付いた。

バルトフェルド「なっ…何だと…？！」

ラクス「き…キラ…！？」

ラクスは余りの衝撃に気絶してしまった。

バルトフェルド「ラクス？！　クッ！　撤退する！！」

傷付いたエターナルは撤退を開始した。

シン「……」

シンはコクピットに巨大な風穴を開けているストライクフリーダムを見て、身体に違和感を感じた。

シン「（何だ…？　この脱力感は…？　何だ…？　この感覚は…？）…クッ？！」

シンは突然の頭痛に頭を抱えた。

シン「（これは…俺の…今までの戦い…！？）」

シンの記憶にある家族の死から戦いの記憶が呼び覚まされた。

ザフト製Gの奪取、ユニウスセブン落下事件、オーブ出港、インド洋での戦闘、ガルナハン奪還作戦、ダーダネルス海峡での戦闘、クレタ島沖での戦闘、ベルリンでの戦闘、ステラの死、フリーダムの撃墜、アスランの脱走と撃墜、ヘブンズベース攻略作戦、オーブ攻

撃、フリーダム再臨とアスランの生存、ダイダロス基地攻略戦、そしてフリーダムの墜落。
一度にこれらの映像が一気にシンの脳内に溢れ出て、それが激しい頭痛を引き起こした。

シン「あぁ…っ！！　くっ！！　うぁあああああああ

感じだった。

シン「…『あの時』の感覚とは全く違う…。一度目のフリーダムを撃墜した時とは全く違う…。喪失感ではない…？　別の何かだ…。まあいい、次こそエターナルを！」

そう意気込むシンだったが、其処に

ドゥンッ！

シン「！？」

突然のビームがデスティニーを襲った。

シン「！　まさか？！　アスランか！」

アスラン「シン！　お前！！　よくもキラを！！」

シン「ハッ！　何を言うかと思えば、お友達の事ですか？　だから脱走するんですか？　いいさ、どうせアンタは裏切り者の称号を持っている。丁度良い。このまま倒してやる！」

アスラン「この…！！」

デスティニーとインフィニットジャスティスは激突した。

シン「アスラン…！！　アンタは何の為に戦う？！」

アスラン「何の…為に…？！」

シン「そうだ！　何かを守る為に覚悟を決めて戦うのが、兵士だろうが！　それをアンタという人は！　高が1人の友人の為に軍を抜ける？　ハッ！　何時かアンタ、こう言ってたな、『戦争はヒーローごっこじゃない』ってな。」

アスラン「ああ、あれはお前がただ怒りのままに撃つなと思ってな

…。」
シン「そうだな、だが、今のアンタは正しく、『ヒーローごっこ』じゃないか！！」
アスラン「うっ？！」
アスランはシンのその言葉に同様した。
シン「ハァッ！！」
シンはその隙を突いてインフィニットジャスティスの右腕を肩から斬り落とした。
アスラン「ハッ？！　しまった！」
アスランは慌てて機体を動かし、デスティニーから離れた。
アスラン「クッ…！　シン…！！」
シン「どうした？！　今のアンタじゃ俺は倒せない。」
アスラン「（確かに…今のシンには迷いが無い…！　正直言って勝てるかどうか分からない…だが！）」
インフィニットジャスティスはファントム０１を射出した。
シン「そんな攻撃！」
デスティニーはアロンダイトをしまい、フラッシュエッジ２をビームサーベル形態にし、左手のは逆手に持った。
シン「連続攻撃なら、効かない！」

デスティニーはファントム０１を撃墜した。

シン「！　いない？！」

シンは辺りを見渡したが、インフィニットジャスティスは何処にもいなかった。

シン「チッ、図られた！？」

デスティニーはその場から離れようとした。

シン「！？　ロックオンされた？！　まさか！？」

アスラン「シン！　お前を撃つ！！」

インフィニットジャスティスはミーティアを装着して現れた。

シン「このっ…！！」

デスティニーとミーティアを装着したインフィニットジャスティスの激戦が始まった。

シン「アスラン！　何故此処まで戦える？！」アスラン「それは…！」

シン「何も戦う理由も無いのに戦場にでるな！！」

デスティニーの一撃は、ミーティアの左アームを破壊した。

アスラン「だが！！　それでも！！！」

インフィニットジャスティスは真っ直ぐデスティニーに向けた。

シン「特攻！？　なら！！」

デスティニーも真っ直ぐインフィニットジャスティスに向かった。

シン「そのまま真っ二つにしてやる！！」

アスラン「やらせるか！！」

インフィニットジャスティスはミーティアから上に離れた。

シン「何！？　ハッ！」

デスティニーはそのままミーティアに激突した。

シン「うわぁあああああっ！！！」

アスラン「シンッ！！！」

インフィニットジャスティスはシールドのビームブーメランをビーム刃のみ出し、デスティニーを突き刺そうとした。

シン「てぇやぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

デスティニーはミーティアから抜け出し、パルマ・フィオキーナをインフィニットジャスティスに突き出した。

アスラン「はぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

シン「うぉおおお

インフィニットジャスティスのビームサーベルはデスティニーのコクピット横を突き刺し、デスティニーのパルマ・フィオキーナはインフィニットジャスティスのコクピットにぶつけた。

アスラン「?!」

シン「終わりだぁあああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!!」

デスティニーの一撃は、インフィニットジャスティスのコクピットを完全に貫いた。

レイ「?!　シン!?」

右腕とドラグーンを失いながらもアカツキを何とか撃退したレジェンドは、シンの異変を感じ、そちらに向かった。

レイ「シン!　シン!!」

シン「ハハッ…レイ…か…。」

レイ「シン?!　まさか…!?」

シン「レイ…どうやら…俺…議長の命令…守れそうに…ない…ガフッ…!」

レイ「な…に…?!」

シンの腹部には、インフィニットジャスティスの攻撃を受けた時に壊れた破片が深々と突き刺さっていた。

レイ「シ…ン…!?」

シン「俺は…死ぬ…のか…?」

その時、シンの周りが不可思議な空間になった。
シン「何だ…？　これは…？」
すると、空間の向こうから声が聞こえた。
？？？？？「シン…シン…」
シン「えっ…？！　この声って…？　まさか…！？　ステラ…？！」
ステラ『うん…そうだよ…。』
粒子が集まり、粒子はステラになった。
シン「そうか…、俺を迎えに来たのか…？」
ステラ『違うよ。』
シン「えっ？」
ステラ『シンをこれから、『新しい世界』に連れていくから。』
シン「まてよ！　意味が分からな…うっ？！」
シンはステラに手を伸ばしたが、ステラから光が溢れ、シンは思わず腕で目を遮った。
ステラ『シンには生きてて欲しいから、連れていくから。』
シン「何…」
光は一層と強くなり、シンを包み込んだ。
その瞬間
ドカァァァァァァァァァァァン！！！
デスティニーは爆発した。

レイ「シィイイイイイイイイイイイイインッッッッ！！！！」

レイの叫びは虚しく響いた。

そして第2話へ…

第8．5（1．5）話（後書き）

銀時「はいはい、終わった終わった～。多分面白かったな。」
シン「アンタブッ殺すぞ。」
刹那F「それにしても、かなり最終決戦の様子が大幅に変更されているな。特にシン、お前の心境の変化がこの大幅な変更の核というのは間違いないだろう。」
シン「それはどうも。」
刹那F「…復讐を成し遂げても結局は、何も得るものは無かった。だからこそお前は、『自分の様な存在を出さない』為に戦争を終わらせ、その先にある平和に希望を見出だした。…違うか？」
シン「いや、合ってる。」
刹那F「そうか。」
銀時「…戦って戦って、傷付いて倒れても、それでも平和を勝ち取る為に戦って、結局はこれか。」
シン「いや、もうそんなに後悔はしてない。……まだ『道』があるんだったら、俺はその道を行くよ。」
銀時「そうか。んじゃ、頑張れよ。」
シン「ああ！」
刹那F「（だが…、シンは一体『何処の世界に行くんだ』…？）」

第9話（前書き）

今回はあまりギャグは無い。（え）

第9話

ドラえもん「う～ん…。」
アレルヤ「どうしたんだい、ドラえもん？」
ドラえもん「うん。どうしても気になる、だからこれからその建物に向かうから、皆を集めてくれないかな？」
アレルヤ「分かった。でもこんなに朝早いから、皆寝ているじゃないかな…？」

確かに、今掛けられている時計の時間は、５時（推定）を差していた。

アレルヤ「あれ？　どうしても気になっていたって事は、ずっと此処に？」
ドラえもん「まあ…最初は寝てたけと、どうしても気になってね…。」
アレルヤ「じゃあ、誰も起きていないんじゃ…」

ウィーン…

アレルヤ&ドラえもん「えっ？」

アレルヤとドラえもんは『出入口のドア』が開いたので、そちらを見た。

近藤「いやぁ～、この島の空気は美味かったな。」
沖田「土方がいりゃ、壮大な鬼ごっこが出来たのになぁ。」

近藤と沖田は刀を持って入って来た。

ドラえもん「…あれ？」
アレルヤ「……誰も起きていないんじゃ…なかった…？」
近藤「いや、少し声を掛けてもドラえもん君、ずっとその写真見てたから、そのまま外に出た。」
沖田「青ダヌキって言っても全く気にしてなかったらァ。」

ドラえもんは『青ダヌキ』という単語にカチンっときたが、それを抑えた。

ドラえもん「えっと…、何時外に？」
近藤「あの時計で４時には外に出た。」
沖田「真選組の朝は早いでさァ。」
アレルヤ「ああ、そうですか。」
ドラえもん「丁度良かった。実は…」

ドラえもんは『謎の建物』の事を話した。

近藤「成る程、そういう事か。総悟は行くか？」
沖田「どうせ暇だし、別に問題ありやせん。」
近藤「そうか。よし、俺達も行こう。」
ドラえもん「ありがとうございます。」
アレルヤ「でも、少し早くないかい？　せめて7時には起こそう。」

アレルヤは時計（現在5時半を差している）を見ながらそう言った。

近藤「うむ、そうだな。」
沖田「バズーカドッキリやりやせん？」

ドラえもん一向には銀魂のノリのボケを突っ込める人がいない為、沖田のこの言葉は全力で無視された。

沖田「……」

そして7時になり、寝ていた残りのメンバーも起こされ、集合した。

ドラえもん「かくかくしかじか……という訳なんだ。」
スネ夫「へぇ…そうなんだ。」
ジャイアン「俺様は良いぜ。」
マリー「私も良いよ。」
のび太「僕は…いや、まあ…うん…いいよ…。」
沖田「皆決まりやしたでィ。」
ドラえもん「それじゃ皆、行こうか。」

ドラえもん一向は、その建物に向かった。

シン「取り敢えずどうするんですか？　このままこの建物に引きこもるのか、それともこの島を回るのか、どっちにします？　俺は島を回りますけど。」
桂「ウム、シン君の言う通りだな。俺とエリザベスも島を回ろう。」
グラハム「それは私も賛成だ。私は落ち着きがなく、我慢弱い男だからな。」
新八「えっ？！　何その自己診断！？　絶対ヤバい事にも首突っ込んでいきそうな！」

グラハム「何だ、分かっているじゃないか。」
新八「マジだぁああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」
土方「山崎、お前も島回れ。」
山崎「マジで？！」
土方「ああ？！　上司の命令聞けねぇのか？　斬るぞ？！」
新八「いや、それ只の職権乱用じゃねぇか！！」
神楽「イジメかこ悪いアル。」
シン「落ち着けよアンタ。」
土方「あ〝あ！？　斬るぞコラァ！！」
シン「アンタもな！！！」
桂「……で？　俺達以外にも島回るという奴はいないのか？」
桂の言葉で、皆は建物の中に居る者、島を回る者をそれぞれ決めた。

建物派

土方、新八、神楽、定春、しずか

島回る派

シン、桂、エリザベス、グラハム、山崎

こうして、建物派と島回る派が決まった。

桂「何だ、結局俺達だけか。」エリザベス『そうですね。』
シン「それじゃ、日没までには戻る。」

山崎「ハァ…。」
島回る派は建物から出た。
これ以降、島回る派が戻るまで、建物派の出番は（山崎以上に）殆ど無くなるので、建物派はそれに考慮する事。

土方「はっ？！　んざけんな！！　何で俺達が！！」
新八「土方さん落ち着いて下さい！！」
しぶか「そうなの…？」
新八「えっ…？！」
神楽「ジミーより地味…ジミーより地味…ジミーより地味…

新八「叫び過ぎだぁあああああああ

第9話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

ドラえもん「フヒヒｗｗｗ　フリスクんめぇｗｗｗｗ」
のび太「ど、ドラえもん？！」
シン「誰だよ！？　フリスク食わせたの？！」
銀時「ハァ？ｗｗｗｗ　俺じゃねぇしｗｗｗｗ　んな事よりフリスクんめぇｗｗｗｗｗ」
シン「アンタ何食ってんだぁあああああああああああああああああああああああああ！！！！？？？？」
神楽「オメェも食えよｗｗｗｗｗｗ　フヒヒｗｗｗｗｗ」
新八「ホントに誰だよ！！　フリスク置いたの？！」
桂「いや、今回はギャグがあまり無いから此処だけでもな。」
シン＆ａｍｐ；新八「アンタが犯人かぁあああああああああああああああああああああああああ

第１０話（前書き）

今回、新キャラがこのロスト・ワールドに『ロスト』されます。

銀時「へぇ。」

因みに、『ロスト』されるキャラはこの新キャラで最後とします。

眠「…それは貴方の力不足ですか？」

やっ…止めろ！　痛い所を突くな！！

眠「……」

…ああ、そのキャラはあまり出番がありません。

銀時「えっ？　それ酷くね？」

……

コーラサワー「おーい！　返事しろ～！！」

刹那Ｆ「逃げたな。」

コーラサワー「マジかよ？！」

銀時「…しゃーねぇーな、第１０話、始まれ。」

刹那Ｆ「（随分適当な始め方だな…。）」

第１０話

？？？？？「う…ん…」

真っ暗な洞窟の中、長い金髪をツインテールにしている少女は目を覚ました。

？？？？？「此処は…？」

少女もまた、『ロスト』されていた。

？？？？？「えっと……私…確か……任務があって…その世界にある『ロストロギア』を確保しに行って…それから…そのロストロギアを確保しようとしたら…突然ロストロギアから『霧』が出てきて……其処から先の記憶が…？　頭が痛い…！」

少女は頭を抱えながら、『斧らしき物』を持って歩き始めた。

刹那Ｆ一向は、トロッコでの冒険を終えた様子。

刹那Ｆ「どうやら、トロッコでは此処までの様だな。」

銀時「ゼェ…ゼェ…ゼェ…ゼェ…！！」

眠「大丈夫ですか…？」

銀時「だ…大丈夫だぜ…！」

そう言う銀時だが、その体は明らかにボロボロであった。

銀時「俺はこう見えても侍だぜコノヤロー。」
コーラサワー「へぇ～、そうだったのか。」
五代「スゲー！」
銀時「おうおうおう！　行こうぜコノヤロー。」
刹那F「待て！」
銀時「ん？」

刹那Fは先に行こうとした銀時を制止した。

刹那F「向こうに誰かいる。」
銀時「マジ？」
皆「？！」

皆も向こうを見た。

コツーン…コツーン…コツーン…

洞窟の奥から、人の足音が聞こえた。

刹那「人？！」
眠「誰でしょうか？」銀時「銀さん其処まで知りまへーん。」
眠「いえ、私は刹那さんに言ってます。」
銀時「……」
五代「誰だろう…？」
コーラサワー「俺が行ってやらぁ！」

コーラサワーはそう言って洞窟の奥に行ってしまった。
銀時「……どうするせっつぁん？　俺達も行くか？」
刹那Ｆ「…ああ、そうしよう。」
刹那Ｆ達もコーラサワーの後を追うように向かった。
コーラサワー「さあ、出てこいやゴラァ！」
コーラサワーはズカズカと歩いていた。
コーラサワー「何だ？！　出てこねぇのか！？　ホラ、掛かってこ……ん？！　おい！　大丈夫か『嬢ちゃん』？！」
コーラサワーは『少女』を見付け、側に駆け寄った。
？？？？？「うっ…んっ…」
コーラサワー「おい！！　早く来い！！　嬢ちゃんが倒れてるぞ！？」
銀時「…マジか？！」
刹那Ｆ「行くぞ皆！」
刹那「うん！」
眠「銀さん。」
五代「怪我は？！」
刹那Ｆ達はコーラサワーの声を聞き、コーラサワーの所に向かった。
刹那Ｆ「ん？　それは？」
刹那Ｆは洞窟の壁に寄り掛かっている少女を見た。

銀時「おい！！　その子頭から血が出てるぞ！」
コーラサワー「マジ？！」
銀時はその少女の頭から血が出ているのを見付けた。
五代「怪我は俺が！」五代はリュックサックから包帯を取り出し、少女の頭に巻いた。
五代「フゥー…良かったぁ～…。これでＯＫです。」
五代はサムズアップをした。
刹那Ｆ「そうか。」
？？？？「んっ…うっ…？」
コーラサワー「おっ？！　起きたぞ？！」
？？？？「あ…あなた達は…？」

少女は刹那Ｆ達を見た。

刹那Ｆ「怪しい者ではない。刹那・Ｆ・セイエイだ。」
銀時「坂田銀時だ。銀さんでもいーぜ。」
眠「櫛名田眠です。」
刹那「清浦刹那です。」
コーラサワー「俺様はパトリック・コーラサワーだぜ！！」
五代「五代雄介です。後、これを。」
五代は例の如く名札を少女に渡した。
？？？？「…夢を追う男…２０００の技を持つ男…？」
銀時「で、オメェの名前は何だ？」

銀時は頭をポリポリ掻きながら言った。
？？？？？「…あ、私の名前はフェイト・Ｔ・ハラオウンです…。」
銀時「ふ～ん、フェイトか…。良い名前だな。」
フェイト「えっ…？！　あ…はい…。」
刹那Ｆ「自己紹介は終わったか…。なら行くぞ。」
刹那Ｆは懐中電灯を付けたライフルを持ち、歩き出した。
銀時「え～？！」
フェイト「…銃…！？」
銀時「ん？　もしかして初めて見たのか？　銃。」
フェイト「は…はい…。」
銀時「（何か人見知りなのか、ウジウジしてんな、コイツ。）」
銀時はフェイトをこう評価した。
眠「銀さん、刹那さんが先に行ってますので、そろそろ私達も…」
銀時「ん？　ああ、そうだな。」
フェイト「（良く見ると眠って人…、服装がまるで何かの儀式の服みたい…。それにその大鎌は…？）」
フェイトは眠を見ていた。
眠「……」
眠もフェイトを見ていた。
銀時「眠、フェイトがお前を見てるのはその服装と大鎌だろ。」
眠「えっ…ああ、そうでしたね。」

五代「フェイトちゃん立てれるかい？」
フェイト「はい…。」
銀時「んじゃ、往くとするか。」
眠「…何も言いませんよ？」
銀時「チェッ。それは残念。」
刹那「行こう。」
コーラサワー「待ちやがれゴラァ！！」

銀時達も歩き出した。

それから何時まで歩き続けたのだろう…

刹那F「…！　おい！！　出口だ！！」
皆「！？」
銀時「マジか！」
コーラサワー「イヤッホー！！」

皆はそれぞれ驚きながら喜びに満ちていた。

コーラサワー「俺様が一番乗りだぜ！！」

コーラサワーは走り出し、刹那Fを追い抜き、遂に洞窟の外に出た。

コーラサワー「やったぜ！！……って…、なぁんじゃこりゃあああああああ

刹那F「おい、どうした……なっ！？」
銀時「こりゃあ…！」

コーラサワーの次に洞窟を出た刹那Fと銀時も驚愕した。

眠「どうしたんで…えっ？！」
皆「？！」

眠や他の皆も驚愕した。

刹那「これって…？！」
フェイト「まさか…！？」
五代「古代…遺跡…！」

刹那F達が見たものとは、『ピラミッド』だった。

五代「古代マヤ文明のみたいだ…。」

五代の言う通り、そのピラミッドは、古代マヤ文明のピラミッドに酷似していた。

銀時「おいおいおい、こんな大層なモン、一体誰が造ったんだコノヤロー。」
眠「……ハッ！！　確かに…。こんな物を建てれるのは人間だけ…、でも、この島は『無人島』の筈…？！」

眠の言葉で一同は軽く凍り付いた。

刹那F「あのピラミッドの中に何かこの島を脱出出来る物があるかもしれない。」

刹那Fはそう言ってピラミッドに向かった。

刹那「えっ？！　刹那さん！？」

銀時「…しゃーない。俺達も行くぞ。」

銀時達もピラミッドに向かった。

刹那F「……」

刹那Fはピラミッドの中に入り、銀時達もピラミッドの中に入った。

五代「うわぁ～！！　凄いな！！」

五代は興奮した様子でいた。

銀時「へぇ、こりゃまた…。」

眠「これは…？」

銀時達はピラミッドの中に来た。

コーラサワー「コイツはまた…。」

刹那「結構広いですね。」

五代「おおっ！！」

五代は壁を触りまくっていた。

銀時「おい、間違って変な所触んなよ？　どっかの冒険野郎みたいにデカイ岩に追い掛けられたりするのはもう勘弁してぇからな。」

五代「分かってますって！！」

眠「…というか先程私達も同じ目に合ってませんでした？」

フェイト「えっ？」
フェイトは眠の言葉に驚いた。
刹那Ｆ「……」
刹那Ｆは入り口から直線の壁を触っていた。
その壁は何故か他の壁と違って１０ｃｍ程の出っ張りがあった。
刹那Ｆ「これは…？」
刹那Ｆはその出っ張りを触った。
刹那Ｆ「動く…？」
刹那Ｆはその出っ張りを引いた。
ゴトン…ッ！！
刹那Ｆ「…取れたか。……ん？」
刹那Ｆは出っ張りを取った事で出来た穴を覗いた。
刹那Ｆ「……鍵穴…？」
刹那Ｆは鍵穴を見付けた。
刹那Ｆ「……今は無理だな。」
刹那Ｆはその出っ張りを穴の下に横倒しに置いた。
銀時「ん？　何か音したが、何か見付けたか？」

刹那F「ああ、鍵穴を見付けた。」
五代「マジで？！」
刹那F「だが、結構深かったから無理だな。」
五代「ガーン！！」
フェイト「大丈夫ですか…？」
銀時「んで、後は食料集めて、寝る場所は…此処か…？」
刹那F「俺と銀時が見張ろう。」
銀時「ヘッ？！　マジィ！？」

刹那F「さっさと食料集めるぞ。刹那、付いてこい。」
刹那「あ…はい…。」

刹那Fと刹那は食料集めに行った。

眠「…銀さん、さっさと行きましょう。」
銀時「…そうですね…。」

銀時と眠も行った。

コーラサワー「俺様は1人でも平気だぜ。」

コーラサワーはズカズカと行った。

五代「……あれ？　俺達余り者…？」
フェイト「……」

五代とフェイトも行った。

何だかんだで食料を集め、それを食べ、そして夜になり、殆どの皆はピラミッドの中で就寝した。
だが、刹那F、銀時、そして眠は起きて、ピラミッドの外にいた。

銀時「おいおいおい、ガキはさっさと寝ろよコノヤロー。」
眠「いえ、私はへい…」銀時「だーかーらー！　夜は大人の時間だから、R18だから、それ以下はさっさと寝ろ。」
眠「は…はい。」

眠はピラミッドの中に入っていった。

銀時「あ〜あ、何でんな事になったんだコノヤロー。」
刹那F「俺のせいか？」
銀時「そうだよコノヤロー。このツケどうしてくれんだよコノヤロー。」
刹那F「ああ、それは悪かった。」
銀時「悪かったじゃねーよコノヤロー。」
刹那F「じゃあどうしろと？」
銀時「……さあ…？」
刹那F「さあってお前…。」
銀時「じゃあ裸踊りでもしてくれたら許す。」
刹那F「だが断る！」
銀時「じゃあ何やらせよう…。」
刹那F「何故そうなる。」
銀時「じゃあさ、どじょうすくいでもやれよ。」
刹那F「？　どじょうすくいって何だ？」
銀時「ハァ？！　せっつぁんお前知らないの？！　良いか？　どじょうすくいってのは、昔の農家の人の服装を着て、そんでもってこの割り箸、今は木の枝だけどな、を鼻の穴に差して、そしてこうド

ジョウを掬う動きをすんだよ。」
刹那F「成る程…。理解は出来た。だが…」
刹那Fはライフルを銀時に向けた。
刹那F「俺は今、無性に貴様を駆逐したい。」
銀時「申し訳ありません。」
銀時は無駄に綺麗な土下座をした。
刹那F「ハァ…」
銀時「じゃあさ、こんなのはどうだ?」
刹那F「未だやるのか?!」
このやり取りは太陽が昇るまで続けられた。

第１０話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

銀八「はーい、今から転校生を紹介する。」
刹那Ｆ「何故転校生？」
眠「というか何故銀八なんですか？」
銀八「ああ？　某先生のアレだよアレ。アレって言ったら解るだろ？　アレだってアレ。」
刹那Ｆ「（パクりか…。）」
銀八「まあいっか。はいどうぞ入って～。」

ガラッ！

眠「ドアが学校の教室の扉に…？」
「あ…どうも、初めまして…フェイト・Ｔ・ハラオウンです…。」
銀八「んじゃ、席に着いて。」
フェイト「あの…」
銀八「ん？　何だ？」
フェイト「私、本当に出番が無いんですか…？」
銀八「しゃーねぇ、作者が決めたことだ。恨むなら作者を恨みな。」
フェイト「は…はぁ…。」
銀八「しっかしフリスク何時食ってもんめぇなｗｗｗｗｗｗ　フヒヒッｗｗｗｗｗｗｗ　フｗｗｗヒｗｗｗｗｗｗ」
刹那Ｆ「終われ。」

第１１話（前書き）

今回は後書きまで続きます。
ネメシスさん、遅くなったけど感想ありがとうございます！！（ＴＴ）ノシ
銀時「おいおい、スゲェ泣いてんじゃねぇか。」
シン「いや、どう見ても嬉し泣きじゃないですか。……あ、ネメシスさん感想ありがとうございます。」
刹那Ｆ「…仕方ない…、俺が言おう。先ずはシン達島回る派と近藤達が出会う。」
土方「マジでか。」
刹那Ｆ「そして次に、『意外な奴』がこの島の『情報を知る』。」
刹那「そ…それは誰ですか…？！」
刹那Ｆ「それは後書きを見れば分かる。銀時、眠。」
銀時「…チッ、しゃーねーなー。」
眠「…あ、はい。」
銀時＆ａｍｐ；眠「ロスト・アイランド第１１話、始めるぜ（まります）。」

銀時「…つーかあれはぜってーネメシスの感想のせいだな、あれは。つーわけで、ネメシス、廊下にた（ｒｙ」
刹那Ｆ「お前は銀八先生じゃないからアウトだ。幽霊の出る崖の上にでも一晩中立っていろ。」
銀時「……」
シン「酷過ぎる罰ゲームだなそれ。；；；；」
銀時「じゃあ代わ（ｒｙ」
シン「だが断わる！！」
銀時「……」

第11話

山崎「結局、何も見付かりませんでしたね。」
桂「ああ。『洞窟』以外はな。」
エリザベス『チックショー！！！！』
シン「…って何しれっと終わらそうとしてんだぁ！！！！　つーかあの冗談、ある意味此方に当たってるじゃねーかよ！！！！」
山崎「もう日も暮れますから、早めに帰りましょう。」
桂「ああ、確かにな。」
エリザベス『えっ？！　地獄に帰るの？　私は結構です。』
シン「誰も地獄に帰るなんて言ってねーよ！！！！　ってかまた死ぬのかよ！！　更に言えば一回死んだって事になるぞ！！」
グラハム「だが、明日になればあの洞窟に向かえるだけでも良いだろう。」
シン「まあ、そうですね。」

島回る派の収穫、洞窟を見付けた事と食料であった。

シン「食べ物は当たり前ですよ。」
桂「建物が見えてきたな。」

島回る派は建物に向かった。

ガサガサ…

突如草をかぎ分ける音がした。

皆「！」

シン「誰だ？！」

シン達はそれぞれ、武器を持った。
山崎はミントンのラケットだが。

シン「ってオラァ！！」
山崎「グハッ！？」

シンは山崎の顔面に強烈なキックを繰り出した。

シン「刀持てよ刀！！　何でバドミントンのラケットだよ！！」
山崎「ミントンですよ～！！」
シン「んな違いどうだっていいわぁあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」
山崎「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ

シン&グラハム「ゴリラ！！？」
？？？？？「そうです、私が変なゴリラ……ってうぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおい！！！！！　俺はゴリラじゃねぇよ！！！」
シン「えっ…？！　あ、ああ…。すみません…。」
グラハム「これは失敬。似ていたからつい言ってしまったよ。」近藤「まあ、謝ってくれたから良いけどさ。」
桂「ほぅ…、まさか真選組局長、近藤勲まで来ているとはな…。」
山崎「会いたかったですよ局長！！」
近藤「山崎？！　お前もこの島に来ていたのか！！」
山崎「はい！　副長も来てます！！」
近藤「トシもか…。」
沖田「桂覚悟ぉ！！」

ドンッ！！

皆「えっ？！」

ドガァァァァァァァァァァァァァァァン！！！

シン「どわぁあああああああああああああああああああああああああああ！！！？？？？」

沖田のバズーカはシン達を襲った。

沖田「桂何処だぁ？！」
シン「何すんだこのバカッ！！！」

ドガッ！！

沖田「グベラヴェッッ！！？」
近藤＆ａｍｐ；山崎「！？」

シンのパンチは、沖田の顔面に直撃し、沖田は見事なまでにブッ飛んだ。

シン「殺す気かアンタはッ！！？」
沖田「なっ…なかなか良いパンチだったぜィ…！」
シン「ああ、それはどうも！！」
沖田「じゃあ先にアンタをブッ殺して……」

沖田はシンにバズーカを向けたが

近藤「総悟、もう止めろ。」

近藤の一言でバズーカを下ろした。

近藤「済まなかった。部下がこんな事をして。」

近藤はシン達に対して土下座をした。

シン「いや、皆怪我はしてないので、そんな土下座までしなくても……」
沖田「近藤さんに土下座させるとはァ、良い度胸でィ！」
シン「この人が土下座してるのは全部アンタのせいだよ！！　上司だから責任取って土下座してんだよ！！　寧ろアンタが土下座しろよ！！　つーか空気読めよ！！　バカか！？」
沖田「へーい、すいやせんでしたァ。」

沖田は全く気持ちの込もっていない謝罪をした。

シン「何なんだアンタはぁー！！」

沖田「アンタ、名前は？」

シン「何？　突然？！　名前？　ああ、俺はシン・アスカ。」

沖田「沖田総悟でさァ。」

桂「フム、何が起きたのか理解不能だが、丁度良い、此処で後ろの方々にも挨拶をしよう。」

桂は近藤の後ろを見た。

アレルヤ「…どうやら終わったみたいだね。」

其処から、アレルヤやドラえもん達が出てきた。

シン「ん？　アンタ達は？」

桂「ホラ、シン殿。挨拶しろ。」

シン「あ…ああ。そうだな。」

シン達はそれぞれ自己紹介をした。

桂「……成る程、そういう事か。」

ドラえもん「ええ、そうなんです。」

シン「『ピラミッド』？！　そんな物がこの島に！？」

ドラえもんの口から突然、『ピラミッド』という言葉が出てきて、驚愕するシン達。

ドラえもん「これを…。」

ドラえもんはそのピラミッドの写真をシン達に見せた。

シン「……マジか…？」

桂「では、ドラえもん殿。このピラミッドへの行き方は判っているのか？」ドラえもん「はい、ここら辺に『洞窟』が有ると思いますけど…。」

グラハム「洞窟…？　そういえば先程私達が見付けたのは恐らくその洞窟か…。」

グラハムはフム、と顎に手を当てた。

アレルヤ「それだったら話は早いけど…」

アレルヤは空を見上げた。

アレルヤ「もう夜になってしまった。探索は明日にしよう。」

アレルヤの言葉に頷く一同。

山崎「ああ、そういえば建物の所に帰る途中でしたよ。俺達。」

近藤「じゃあ案内してくれ。山崎。」

山崎「了解！！」

シン「フゥ…。建物派の人達を外しちゃダメだな。」

シン達は建物の所に向かった。

山崎「ホラ、あれです。」

山崎は、建物に指差した。

近藤「ほう、あれか。」
シン達は建物の中に入った。
土方「何だ。結構おそ……なっ…？！」
1階には、土方が煙草をくわえて立っていた。
その土方は、近藤を見て、固まった。
土方「近藤…さん…？！」
近藤「そうだトシ。」
土方「…ハッ！　近藤さんも来ちまったのか。」
近藤「総悟もいるぞ。」
土方「ハッ？　マジかよおい。」
のび太「えっと…この人は？」
土方「？　ガキもいるのか。」
シン「取り敢えず皆集めよう。ちょっと行ってくる。」
シンはそう言って上の階に上がった。
そして、建物派の皆も集まり、その人数は二桁を軽く越えた。
のび太「！？　しずかちゃん？！」
しずか「えっ？！　のび太君？！　ドラちゃん！　スネ夫さんや武さんまで！」
シン「感動の再開か…。」
新八「怪しさ全開の無人島でですけどね。」
神楽「ゴリラだゴリラ。」
新八「近藤さんも？」
近藤「チャイナと新八君もいたのか！」
土方「此処まで来て、あの天パ野郎が来なきゃ、ある意味ドッキリ

もんだぜ。」
桂「自己紹介はどうした自己紹介は？」
桂の一言で皆、自己紹介をした。
シン「ってかずっと似たような構図になってないか？」
桂「アレンジさえ利かせれば問題無い。」
シン「そうですか。」
土方「ってかずっと気になってるんだが、総悟は何処だ？」
近藤「えっ？！　あれっ？！　どっか迷子になった！？」
シン「いや、入るまでは俺達と一緒にいた筈ですよ？」
その時
バキィッ！！
皆「！！？」
何かが窓を突き破り、建物の中に入った。
マリー「な…何！？」
スネ夫「何だぁ！？」
のび太「爆弾？！」
桂「俺が行こう。」
シン「だったら俺も。」
桂とシンはその爆弾らしき物に接近した。
桂「……ん？」
シン「ガチャガチャ…？」

爆弾だと思っていたのはガチャガチャのカプセルで、中に紙切れらしき物が入っていた。

シン「中は何だ？」

シンはカプセルを開け、中の紙切れを見た。

桂「どうだ？」

シン「？　何か書いてある…。」

桂「読んでみろ。」

シン「えっと…『土方とチャイナのたれ死ね』って書いてあります。」

新八「何その手の込んだ手紙の渡し方！？」

土方＆ａｍｐ；神楽「ブッ殺す…！！」

そう言って土方と神楽は外に出た。

シン「ええっ？！　ちょっ！？」

沖田「どうしたんですかィ？」

皆「！！？」

シン「どっから沸いてきたぁあああああああああああああああ！！！」

グラハム「まさかのミステリーだな。」

沖田「いや、ただ単純にバズーカであれ撃ち込んでィ、ただ単に裏口から入ってきやした。」

グラハム「おお、そうだったな。」

シン「ってかあの手紙出して大丈夫かよ？」

沖田「大丈夫でさァ。今頃ハチに追われてらァ。」

皆「ハチ…？！」

シン＆ａｍｐ；新八「ん？」

シンと新八は外を見た。

シン＆ａｍｐ；新八「！！？」

シンと新八は、外の光景に愕然とした。

土方＆ａｍｐ；神楽「うぉおおお

土方と神楽は蜂の引き連れて建物の方に向かっていた。

神楽「どうせ刺されるなら、道連れは多くいた方が良いアル！！」

土方「その案には賛成だぜ！！」

シン「何だアンタ等ぁああああああ

皆「！！？」

弾頭は火を噴き、炎の渦を作り出した。

土方＆amp;神楽「アチィチィチィチィチィチィイイイ

第１１話（後書き）

西暦２３１３年

月の裏側に、要塞と呼べる程の規模の『船』があった。
その名は、『コロニー型外宇宙航行母艦ソレスタルビーイング』。
ＣＢと同じ名前を持ち、ＣＢの計画の要である演算処理システム、『ヴェーダ』を保管してある。
現在は連邦の管理下にあるが、ヴェーダ内に存在するＣＢに関する情報は、例えヴェーダによって生み出された存在、『イノベイド』ですら引き出す事は不可能である。
その一端を担うのは、同じイノベイドでありながら、『イオリア・シュヘンベルグ』の『真の計画』を知り、現在は意識体としてヴェーダ内に存在する『ティエリア・アーデ』である。

ティエリア『……』

ティエリアは現在、ヴェーダ内に存在する『ある情報』を見ていた。
ティエリア『……最初は何故こんな情報が『ＣＢ側の情報として隠蔽』されていたのか分からなかった…。だが、調べてみて、それの理由が漸く分かった。だが、もし此が本当なら、『異次元空間、異空間世界の存在』はこの世界を震撼する衝撃の情報になりえる…。イオリアは此の存在すら判ったのか…。』
ティエリアは『その情報』を全て開放した。
ティエリア『凄いな…。『其処に入る為の方法』すらも明確にある

…！』

ティエリアはその情報の中にある画像を見た。

ティエリア『！　画像も有るのか！』

ティエリアは『それ』の詳細な情報を見た。

ティエリア『一見すると只の『島』…だが、その島は『半径８０ｋｍの空間』と共に『異空間』に浮いており、それ以上行こうとすると、空間の反発と反転が起こり、真っ直ぐ向かった筈なのに、元の場所に戻ってしまう。』

ティエリアは更に情報を見た。

ティエリア『この島は『意識』を持ち、様々な異次元世界の者達を『特殊な霧』で包み込み、この島に『ロスト』する。因みにこの『霧』は、必要に応じて『人の姿』になる事もある。……意識を持つ…だと…？！』

ティエリアはその島が意識を持つ事に驚いた。

そして、ティエリアは『名前』を見た。

ティエリア『この空間の名は『ロスト・ワールド』。この島の名は『ロスト・アイランド』……か…。』

ティエリアは『ロスト・ワールド』の情報を閉じた。

ただ1つ、『ロスト・ワールドに入る為の方法の所』を除いては。

第１２話（前書き）

土方が拾った日記帳の内容がドラえもんのあの道具によって解読されます。
果たしてその日記帳の内容とは…？

第12話

朝になり、建物にいた者達は皆、建物から出て、洞窟の前にいた。

土方「そういや…」

土方は、懐から日記帳を取り出した。

土方「これを解読出来ねぇままだったな…。」

土方は日記帳の内容を見た。

ドラえもん「どれどれ？」

ドラえもんは日記帳を見た。

土方「わかんのか…？」
ドラえもん「ふんふん…」
土方「スゲェな…。」
シン「俺、全然解らない…。」
ドラえもん「解らない。」

ドラえもんのその言葉に全員がズッコケた。

土方「わかんねぇのかよ？！」
シン「じゃあ何で『ふんふん』とか言ったんだよ！？」
ドラえもん「えっ…？　いや…何か…空気作り。」
新八「空気作りかよ！？」
アレルヤ「あ、そういえば『ほん訳コンニャク』はまだあるのかい

？」
ドラえもん「あ、そうだった。」
アレルヤ「ガクッ」
このやり取りに対し、大半の人は頭に『？』を浮かべていた。
ドラえもん「えっと……はい、『ほん訳コンニャク』～！」
ドラえもんがポケットからほん訳コンニャクを出したのを、大半の人は驚きの顔で見た。
シン「それは一体…？」
ドラえもん「このほん訳コンニャクはね、食べると色んな文字が読めたり、色んな国の言葉が理解出来たり、色んな国の言葉で話せるようになる道具なんだ。」
シン「マジで？！」
桂「ポケットの中を拝見させて頂く。」
ドラえもん「えっ？！　ちょっと…」
桂はドラえもんのポケットの中に手を入れた。
ドラえもん「アヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！　くすぐった…
…ヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！」
桂「……ん？　これにしよう。」
桂は何かの道具をポケットから出した。
桂「……これは…？」
ドラえもん「あ、それは『無限製造機』って言ってね、欲しい物を2つまでなら、無限に製造出来るっていう道具なんだ。」
銀魂勢「何ッ！？」

銀魂勢の目が光った。
が、時既に遅しだった。

桂「んまい棒と蕎麦が出たぞ。」
銀魂勢「えええ！！？？？」
新八「自分の好物かよ？！　欲しい物！？」
ドラえもん「後、一度出すと変更は出来ないけど、蕎麦とんまい棒…？　の中だったら、味別とかは問題無く出せれる。……結構高かったんだけどね…。」

ドラえもんのその言葉を聞き、魂が抜けた状態になった銀魂勢。……ドラえもんの最後の言葉は一切聞いてなかった様だ…。

桂「ほう、それは良い事を聞いた。なら…」

桂はんまい棒の様々な味を出した。

桂「これは…？！　凄いな！……ん？」

歓喜の声を上げる桂だが、次に出てきたんまい棒に疑問の声を出した。

シン「どうしたんですか？」
桂「いや…、何か『八朔味デラックス』なる物が出てきたんだが…？」
シン「八朔味…」
新八「デラックス…ですか？」
桂「ああ、こんな物を頼んだ覚えは無いが…。」

シン「というか本題に戻りましょう。」
シンはほん訳コンニャクを食べた。
シン「トシさん。」
土方「ああ…。」
シンは土方から日記帳を貰った。
土方「…って何でトシさんなんだよ?!」
シン「無視します。」
土方「無視かよおい!?」
シンは土方を無視して、日記帳の内容を見た。
シン「……!?　す…凄い…!　全部読めれるぞ?!」
シンはほん訳コンニャクの力に驚いた。
グラハム「どんな内容だ?　興味をそそられるよ。」
シン「えっと…」
シンは日記帳の内容を読み始めた。
シン「『我々はとある遺跡を調査していた。だが、ある時突然『遺跡内部から霧に見舞われ』、我々はこの島に来てしまった。』…霧…?」
殆どの人は『霧』という単語に首を頷いた様子だったが、シンにはそれが分からなかった。

グラハム「次は？」
シン「ああ、はい。『このノートは、我々がこの島に来てからの全ての記録である。』」
皆「……」
シン「『1日目。我々は先ず、食料や水を確保しなければならない。』」
土方「確かにそうだな。」
シン「『非常食はあるが、これは最終手段として取っておく。』」
近藤「確かにな。先に非常食食って、後が無くなった時が恐ろしい。」シン「『幸い、我々にはその為の道具を持っている。問題は無いだろう。我々は3つの班に分かれ、食料や、この島の謎について調べる事にした。調査は順調だった。食料も豊富に取れ、栄養に事欠かない。というか我々の今までの食事よりも遥かに良い食事が取れた。』」
桂「今までのほうが食事は酷かったのか…。」
近藤「辛かったんだろうな…。」
新八「近藤さん何泣いてるんですか？！」
シン「……『1日目は何の問題も無く、順調に終わった。』2日目です。」

シンは2日目に日記を見た。

シン「『我々はこの島を調査していた。その結果、様々な物を発見した。謎のコンクリート製の建物。』」

桂一同は寝泊まりした建物を、ドラえもん一同は写真等で見た建物を思い出した。

シン「『次に、第3班からの報告によると、この島の地下には、『

巨大空間』が存在するという。『…巨大空間？！」
ドラえもん「これは僕が調べてきた中には無かった情報だ。」
シン「『我々はその巨大空間を調べた。しかし、本当にただ巨大な空間が広がっているだけで、落ちれば確実に死ぬという事以外、何も判らなかった。日も暮れてしまい、其処で2日目は終わった。』3日目です。」

シンは3日目を読んだ。

シン「『3日目は、今度は2つの班に分かれ、建物とピラミッドを調べた。私は建物の方だった。だが、建物の方は何ら収穫は無く、ピラミッド班も何も見付からなかったという。』4日目です。」

だが、4日、5日、6日、7日、8日、9日目は、家族に会いたい等を書きなぐっていた。
読んでいるシンは勿論、聞いている人達まで悲しい気持ちになった。

シン「『10日目。『誰かが何処からともなく見ている』…。そんな気がする…。』誰かが…？　誰だ？」

シンは首を傾げた。

土方「いや…うん、そうだな。きっとその誰かっていうのはな、只の幻覚症状だろ？　絶対。」

土方は何故か震えた声で言っていた。

シン「『そして、隊の1人が精神に異常を来し始めた。』……！」
桂「其処まで追い詰められているとはな…。」
シン「『その精神異常者は、ピラミッドの付近で精神を来した。我

々はもう限界だった…。何時か奴の様に精神に異常を来す恐れがあるのか…。最早我々は限界だった。逸そ、このまま死にたいという思いが強まった。『……11日目です…。」

シンは11日目を見た。

シン「『我々は最早この何も無さから抜け出す為に『死を選ぶ』事にした。我々は死ぬ覚悟をした。だが、2つだけ心残りがある。家族の事だ。だが、もうこの島に来た時から、二度と会えないと思っていた。後は、精神に異常を来したままピラミッドから何処かへ行ってしまったアイツはどうしたんだろう…？　最早アイツの精神を治せる者はいないだろう…。ならば、せめてアイツは楽に殺してくれ。……これでこの日記を書く事は何も無くなった…。さようなら、私の大切な家族達よ。この日記が読まれる事は無いだろう…。だが、これだけは言わせてくれ、この日記を誰かが読んでくれる事を切に願う…。』……これで…終わりです…。」

皆「……」

全員黙り込んでしまった。

桂「だが…、何時までも死んだ人間に固執するのは良くない。俺達は今を見つめ、未来に向かう。過去を見つめ直すのはいいが、過去に固執過ぎる余り、その今へ、未来へ向かう足を止めるのは、己を滅ぼす事だ。」

桂の言う事には、恐ろしい程の説得力があった。

土方「チッ、まさか桂の言う事に同感するとはな。」

近藤「流石攘夷戦争を生き残った者だな。」

シン「……」

シンは考え事をしていた。

シン「（俺は過去に囚われていたのか…？）」

シンは今までの自分の過去を振り返っていた。

シン「（家族をフリーダムに殺されて、その怒り、悲しみ、憎しみを原動力にザフトに入り、そして戦った。だけど、『守るべき者』は何も無かった。そう、俺は、軍に入っていなかったら『只の殺人鬼』になっていた。……いや、もうその域だろう…。だけどステラに会って、守りたいと思ってた。だけど、そのステラもフリーダムに殺された。それで俺は更に憎しみ、怒り、悲しみを爆発させて、フリーダムを倒した。だけど、フリーダムを倒した所で、何も返らなかった。俺は心の中で絶望した。絶望の先にあったのは、『もう二度と自分の様な者を、ステラの様な者を、そしてレイの様な者を生み出さない』という、思いに辿り着いた。そしてその思いを胸に、俺は戦い抜いた。そして議長が提出した、『デスティニープラン』に、俺の思いは集約されていた。例えそれが『死の世界』だろうが、俺は議長とデスティニープランを守り抜く。デスティニープランが作り出す平和こそ、人類を救える唯一無二の方法と思って…。だけど、俺は『自分の世界から外れた』、フリーダムとアスランを道連れにして…。だが、ステラの言う『新しい世界』に、その俺が求める『守りたい者』がいるのなら、俺はその世界に喜んで行こう！）」

桂「シン…？　聞いているか？　シン、シン！！」

シン「……えっ？！　何？」

桂「ずっと考え事をしていた様だな。行くぞ。」

シン「あっ…ああ…！　判った…！」

シンは歩き出した。

その顔に、笑みを溢して。

シン「（そうだ！　俺はまだ生きているんだ。生きている限り、何度倒れても、何度でも立ち上がれる。それが『生きている者の特権』だ。そうだろう？）」

シンは洞窟に入る前に、空を見上げた。

新八「シンさーん！！　置いて行きますよー！？」

シン「ああ、分かってる。」

シンは洞窟に入った。

この暗き道の先に、『新しき世界』が待っていると信じて…。

第12話（後書き）

ロスト・ワールド学園高等部

３－Ｚ組

キーンコーンカーンコーン…

銀八「はーい、全員集まったかコノヤロー。」
刹那Ｆ「…副教員の刹那・Ｆ・セイエイだ。」
新八「…って、何で楽屋から学園に？！　つーか何で刹那さんが副教員に？！」
シン「…全員服が学校の制服になってたりしてるけど、もうめんどい。」
銀八「ハァ？　黙れよこの物語の主役が。」
シン「えっ？　何？　誉められてるの？　罵られているの？　どっちなの？？」
銀八「う～ん…まあ…、どっちでもいいっか。」
シン「どっちでもいいのかよ？！　どっちかにしろよ！？」
銀八「じゃあ罵ってるで。」
シン「黙れクソ天パ。」
銀八「……」
フェイト「先生、此処では授業を行いますか？」
銀八「ハ？　『３－Ｚ組』の連中がまともに授業をやれるとでも？」
新八「先生、ブッ殺して良いですか？」
銀八「せっつぁん、酷い言われようですね。」
刹那Ｆ「貴様が言うな。」
銀八「……」

シン「というか欠片も今回の事について話してないよな？」
銀八「良いんだよ。ギャーギャー騒いでいりゃ。」
シン「…良いのかよ…。；」
新八「もう無茶苦茶だ…。」
神楽「無茶苦茶なのは元々アル。判ったかダメガネ。」
新八「テメェをブッ飛ばしてやる！！」
沖田「おうおうおう、俺も混ぜろィ。」
神楽「あぁ？！　返り討ちにしてやろうかゴラァ？」
沖田「ハイ？　よく聞こえなかったなァ。何が言いたいんだィ？」
神楽「んだとオラァ！！　返り討ちにするって言ってんだろｕ（ｒｙ」

バーン…！

皆「！！？？」
刹那Ｆ「…黙っていろ…！」

刹那Ｆはライフルを持って威嚇射撃をした。

新八「オィイイイイイイイイイイイイイイイ！！？？　何学校内に銃持ち込んでんだぁあああ！！！？？　つーか撃ったよね？！威嚇射撃だけど実際に撃ったよね！？」
銀八「…俺…もう死ぬわ…。」
シン「確実に先生に当たってんだけど…？」
新八「うぉおおおおおおおおおおおいいい

銀八「な…んで…こう…なっ…た…？」ガクッ

刹那F「……」

第１３話（前書き）

シン達は洞窟の奥を目指し、刹那Ｆ達はピラミッドの周りを探索していたが…？

第13話

刹那F「……」
刹那「……」

刹那F一向は、４組に分かれ、ピラミッドの周りを見回っていた。

銀時「おーい！　そっちは何か見付けたかー？！」

眠と見回っている銀時は、ピラミッドの頂上から下にいる皆に声を掛けた。

五代「何も無かった～！！」

フェイトと一緒に回っている五代は、そう叫んだ。
因みに刹那も刹那Fと行動を共にしている為、コーラサワーは1人で回っているが、当の本人は

コーラサワー「俺様は不死身のコーラサワーだぜ？　何があっても大丈夫だぜ？」

っと言って1人で行動している。

銀時「そうか！　何かあったら直ぐ言ってくれ！」
五代「はい！」
眠「しかし…、良い景色ですね…。」
銀時「ん？　確かにな。」

銀時と眠は、暫しピラミッドの頂上から景色を眺めていた。

銀時「しっかしなぁ、何処だがわかんねぇのにさ、何見とれてんだろうな…。」

眠「ハハッ…そうですね…。」

銀時「眠。」

眠「何ですか…？」

銀時「お前が何背負っているか知らねぇが、それを全て背負うには、お前の小さなその背中じゃ、背負い切れないだろ？」

眠「……」

眠は黙って銀時の話を聞いていた。

銀時「何時かその荷物がお前を潰すかもしれねぇ。だがな、お前は『独り』じゃねぇ、俺達がいる。」

眠「……えっ…？」

銀時「例え別の世界の人間だっていい、頼りたくなったら俺達の事を呼べ、巧くすりゃひょっこり現れたりするかもな。」

眠「ハハハ…。」

銀時「ま、冗談はさておき、何も無かったから、さっさと降りるぞ。ずっと見ていたくなっちまうからな。」

眠「そうですね…。」

銀時「んじゃ、降りますか。」

眠「はい。」

銀時と眠はピラミッドから降りた。

眠「（やっぱり…銀さんは優しいな…）」

銀時「ふぁ～あ…」

眠「（まあ…、あんなにだらしないけど…。）」
？？？？？「ギィヤァアアア

コーラサワーは身軽な動きで男の攻撃を避けた。
銀時「ほほぅ、良い動きじゃねぇか、炭酸飲料。こりゃサーカス団にでも入ってたか？」
眠「いえ、本人は至極真面目に逃げています。」
コーラサワー「こうなりゃ…！　トゥ！！」

ドガッ！！

コーラサワーは男の顔面に跳び蹴りを食らわせた。
男「グガァァァァァァァァァ！！！！！」

吹っ飛ぶ男。

コーラサワー「ハッ！　そんなんでこの俺様を殺れると思ってんのか？！」
男「グルルルルルル…！！」
コーラサワー「おお、怖っ！！」
銀時「あれもう獣じゃねぇかコノヤロー。」
刹那F「……」
男「ガァァァァァァァァァァァァ！！！！！」
銀時「ってコッチ来たぁあああああああああああああああああああ！！？」

男は銀時達の方に向かって走り出した。
だが

バキィッ！！

男は刹那Ｆにライフルの後部で顔面を殴られ、吹っ飛んだ。

銀時「せっつぁん！」

刹那Ｆ「……」

ガチャ！

刹那「えっ…？！」

刹那Ｆは男にライフルを向けた。

刹那「刹那さ……」

スッ…

刹那「！？」

銀時は顔を横に振りながら手で制した。

銀時「あの男はもうダメだ。せっつぁんならせめて楽に殺す筈だ。」

刹那「え…！？」

刹那Ｆ「……」

男「グルルルル…！」

ドンッ！

刹那Ｆは男の胸部を踏みつけた。

男「ガアッ！！」

カチャ…！！

刹那Ｆは男の眉間にライフルを向けた。

男「ガァッ…！！」

刹那Ｆ「…曲がりなりにも仲間だ。それを傷付ける訳にはいかない…。貴様には死んで貰う。」

男「ウォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……」

バァン…ッ！！

ピラミッドの周辺に、乾いた銃声が響いた。

シン「この洞窟…、真っ直ぐだけど長い…長過ぎる…！！」

シンは洞窟の向こうを見た。

洞窟の向こうには光があり、真っ直ぐに延びている事を表していた。

だが、既に３０分は過ぎようとしていたが、殆ど出口に辿り着けないでいた。

グラハム「……待てよ…？　この洞窟自体も長いが、それに『目の錯覚』を使っているのかもしれんな…。」

近藤「目の錯覚？」

グラハム「そうだ。この洞窟は恐らくピラミッド側の方に向かうにつれて、段々と狭くなっている。それで実際の長さよりも長く感じる。」

土方「！　成る程…。そういう事か…！！」

土方は後ろを見た。

土方「入り口が妙にでけぇのは、そういう理由か？！」
グラハム「ああ、恐らくそうだな。」
新八「ちょっと待って下さい。それならこの洞窟、自然の力じゃ出来ませんよ。どう考えても人の手で掘られたとしか考えられないですよ。」
沖田「確かに、壁は妙に綺麗に出来てますでィ。」

沖田は壁を触りながら言った。
そして、アレルヤはこの島の『根本的な事』を言った。

アレルヤ「人が作ったと思われる物は点在するのに、どうして『人が住んでいた証拠は一切存在しない』んだい？」

皆は言われて、ハッとした。

ドラえもん「確かに…、人が作った物があるなら、『普通』なら、人が住んでいた証拠は幾らでも揃えられる…。だけど…」
のび太「この島には、それが無いってこと？」
ドラえもん「うん。そうなんだ。」
土方「まぁ、それは兎も角、さっさとこんな洞窟、出ようぜ。」
沖田「土方さんも人生の洞窟から出てこいよ。」
土方「何でだよ！！」
沖田「ま、どうせ永遠に出られねェけどなァ。」
土方「沖田其処になおれぇえええええええええええええええええええ！！！！！！」
シン「さっさと出るんじゃ……」

ギィヤァアアア

皆もそれを聞き、出口の前後で足を止めてしまった。
土方「…おめぇら其処に居ろ。合図するまで洞窟からでるな。」
シン「……」
シンは銃声のした方を見た。
其処には、数人の男女がいた。
その中に異質な服装を着ていて、大鎌を構えた者がいたが、シンにはそれ以上の光景を見ていた。
その光景とは、男が、別の男の胸部を踏み、ライフルを向けて――――いや、既に撃った後だった。
シン「……」
シンはあの男は何故この島で恐らく同じ境遇の人を撃ったのかという事で頭がいっぱいだった。
だが、それを全く意に貸さない者達がいた。
土方「チッ、何でこんな島来て、やっぱりと思ったが、テメェの胸糞悪い顔見なきゃならねぇんだ？」
銀時「あら、誰かと思えば多串君じゃない。」
土方「誰が多串君だこの野郎！！」
神楽「銀ちゃん！！」
定春「ワンッ！！」
新八「銀さん！！　やっぱり来てたんですね！」
銀時「あれまぁ、ぱっつぁんに神楽、定春も。それに総一郎君とゴリエとヅラとエリザベスとジミーも。」
沖田「旦那も此処に来やしたのかィ。後、俺は総一郎じゃないでィ。」

近藤「ゴリエ？！　ゴリラならまだしも、何でゴリラ！？　ねぇ！？　ねぇ！？」
山崎「やっと呼ばれた…。」
シン「泣いてる…。」
銀時「いや、其処のメガネザルに言ったんだけど？」
メガネザル「ウキッ。」
山崎「ハァアアア

シンはそう思い、溜め息を吐いた。

銀時「どうした？」
シン「ん、何でもない。」
銀時「つーかさ、聞いてよね。昨日隣の田中さんがこう言ったんだよ。『恋愛に未練は無い』ってね。」
新八「隣の田中さんって誰だよ？！　しかも『恋愛に未練は無い』って、何突然！？　意味わかんねぇよ！！　何？！　もう恋愛はしませんってか？！　そんなの正直どうでもいいよ！！　関係ねぇし！！」
眠「しかも昨日は私達と一緒にいたのですか？」
刹那「うんうん。」
銀時「何この総攻撃？！」
神楽＆ａｍｐ；コーラサワー「キャホォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

神楽とコーラサワーはピラミッドで遊んでいた。

銀時「テメーら空気読めよ！！」
シン「もう何が何だが…。」

シンは頭を抱えていた。

刹那Ｆ「銀時、死体の処理は終わった。」
銀時「いや、別にそんなの銀さんに言わなくていいし。で、どう処理した？」
シン「何だアンタは！？」
刹那Ｆ「フェイトと五代と一緒に地面に埋めてきたた。」
銀時「ウム、ご苦労。」
シン「何成りきってるんだ！？　ってか誰だよアンタ！？」

銀時「私はギンレオン二世だ。」
シン「ああ、もうダメだコイツ。」
桂「俺はカツレオン三世だ。」
シン「どんな便乗だよ！？」
エリザベス『私はその執事のエリザチャン。』
シン「何時までふざけてんだアンタらはぁあああああああああああああああああ！！！！！！！！」
桂「そういえば自己紹介は未だだったな。」
シン「もうずっとアンタのターン…。てか何これ、グッダグダ。」
銀時「えっ？　ミックミク？」
シン「言うかぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」
神楽「じゃあボッコボコアル。」
桂「いやいやいや、マッナマナだろ？」
沖田「ちげぇよ。サックサクだろィ？」
近藤「えっ？　ゴッリゴリじゃなかった？」
グラハム「ギッタギタではなかったか？」
コーラサワー「ジッワジワだろ？」
シン「もうどうでもいいわぁあああああああああああああああああああああああああああああああ

新八「何殺り合おうとしてんだぁあああああああああああああああああああああああ！！！？？？」
銀時「エリザベス、頼んだぞ。」エリザベス『了解しました！』
エリザベスは口からキャノン砲を出した。
皆「！！？」
それに驚く一同。
銀時「遠慮すんな。殺れ！！」
シン＆ａｍｐ；新八「殺れ？！」
エリザベス『あの世に逝きな！！』
エリザベスは神楽と沖田に向けて、キャノン砲を撃った。
シン＆ａｍｐ；新八「えええぇえええええええええええぇえええええええええええええええええええええええぇえええええ！！！！？？？」
ドガァァァァァァァァァァン！！！！！！！
シン「うわぁ…もう終わったぁ…。」
新八「アハハ…そうですね…。」
２人は軽い精神疾患を患った。
アレルヤ「刹那、あのピラミッドの中に何か有ったかい？」
刹那Ｆ「いや。ただ、『鍵穴』だけは見付けた。」
シン「鍵穴！？」

シンは鍵穴という言葉に反応した。
刹那F「…どうした？」
シン「なら、これは使えるか？」
シンはそう言いながら、ポケットから建物で拾った鍵を取り出し、刹那F達に見せた。
アレルヤ「これは…？」
刹那F「…判った。全員ピラミッドに入るぞ！」
刹那Fはそう言ってピラミッドに向かった。
シン「ちょっ！？」
その後を追うシン。
銀時「どうした？」
眠「兎に角行きましょう。何か分かった様です。」
銀時「そりゃそうだな。は～い、注目！　此方が、太古の昔から存在するピラミッドです。」
眠「銀さん？　何を言って……えっ？！」
眠は皆の方を見て、我が目を疑った。
ザワザワザワザワ…
何故か皆ツアー旅行のノリになっていた。

眠「どういう…事…？」

眠は目の前の光景が理解出来なかった。

銀時「それじゃ皆さん、レッツラゴー。」

銀時達はピラミッドに向かった。

眠「…ハァ…。」

眠は溜め息を吐き、銀時達の中に入った。

銀時「さあ、此処がこのピラミッドの内部です。」

ガチャ！！

皆「？」

皆は奥を見た。

シン「スゲェ…！　合ってた…！！」

刹那F「開くぞ。」

シン「えっ？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

壁に擬態した扉が開いた。

シン「！？　これは…！」

シンは扉の向こうを見て、驚いた。
扉の向こうには、『更に地下へ続く道』があった。

シン「わーお。こりゃスゲ。」
エリザベス『えっ？　スッケスケ？』
シン「もういいわ！！！」
刹那F「行くぞ。」
シン「えっ…ちょっ…？！」

刹那Fはピラミッドの奥に行った。

シン「あ～！　しょうがねぇ！！」

シンもピラミッドの奥に行った。

銀時「……よし、皆様、これからピラミッドの奥に行きます。足下にご注意下さい。」

銀時達はまだツアー旅行を続けていて、そのままピラミッドの奥に行った。

眠「…何時までこんな事続けるんだろう…？」

眠はそうボソッと呟いた。

シン「こんな洞窟…何時まで続くんだ…？」
シンと刹那Fは洞窟の奥を目指した。

刹那F「分からない。だが、恐らくこの先にこの島の秘密が分かる筈だ。」

シン「まあ、此処までやって、此処まで来て、『何もありませんでした』じゃ済まされないしな。」
刹那F「…ん？　扉？」
刹那Fは扉を見付けた。
シン「でかいな…。」
シンの言う通り、その鋼鉄製の扉は、洞窟の狭さ（人3人分の広さ）と全く異なり、その大きさは、建物にあった扉と全く同じ大きさだった。
シン「さて、何が出るか。」
刹那F「シン・アスカ。お前はそっち、俺はこっちを押す。」
シン「分かった。」
まだツアー旅行をしていた銀時達だったが、扉の向こうの『何か』を見て、驚愕した。
土方「なっ…何だありゃ…！？」
銀時「そうか…！　コイツがこの島の『根っこ』か！！」
果たして、『それ』の正体とは――！？

第13話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

銀時「さて、せっつぁん。殺っちまったなコノヤロー。」
シン「…っで、結局楽屋に戻ってんじゃねぇかよ！！？」
銀時「後3話しかねぇんだよ。しゃーねぇーよ。」
シン「しゃーねぇーよじゃねぇよ！！」
銀時「（、ゝ、）～♪」
シン「殺すぞ？！」

チャキ！

シンは銀時のこめかみに拳銃を突き付けた。

銀時「はい、すみませんでした。」

銀時は綺麗な土下座をした。

シン「コイツ…ッ！」
新八「というか今回の話の内容、一切触れてないし。」
ティエリア『何をしているんだ君達は？　万死に値するぞ。』
銀時「誰だテメェ？！　つーか何処から出てき……って、何で半透明？！　ま…まさか…？！」
ティエリア『僕はティエリア・アーデだ。因みに今の僕の姿は立体映像だ。』
銀時「あ…ああ…！　じゃあ『アレ』じゃねぇのか…。」
シン「アレ？」

銀時「アレって言ったらアレだよ。アレだよアレ。うん、アレアレ。アレしかねぇよ。アレ以外何が有るんだ？　そうそう、アレアレ。アレに決まってんじゃんかよ。もうアレしかないね。アレだー！　アレだー！　何でアレなんだよ！　アレと言ったらアレだね、うん。もうアレ以外何も考えられねぇな。アレだねアレ。アレ？　ああ、アレだねぇ…。アレか…、アレはなぁ…。」
シン「アレアレうるせぇよバカが！」
ティエリア『駄目だコイツ、早く何とかしないとな…。ああ、代わりに僕が言おう。』
刹那F「……」
ティエリア『あの探検隊の中で精神がイカれて逃げた男は刹那・F・セイエイによって殺された。そしてロスト・アイランドに『ロスト』された者達が遂に集結し、物語はラストスパートを迎える。ピラミッドの奥の隠し扉が開かれた時、その扉の向こうにあるものとは一体…？　次回を待て！』
刹那F「……」
ティエリア『……』
シン「何この空気。」

第１４話（前書き）

「今回、銀時達が『心臓』と戦います！」
銀時「さあ、やってやろうじゃねぇか！」
シン「ってかメイン銀魂勢じゃね？　何か知らないけど。」
「お前もメインだよバカめ！」
シン「あ、そ。……えっ？　マジ？」
「マジ。」
シン「…よし！」
刹那Ｆ「さっさと始めるぞ。」
シン「おｋ」
銀時「第１４話、始まるぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
刹那Ｆ「…死んどけ。」
シン「えっ？」

第１４話

ドクン…ッ！！　ドクン…ッ！！　ドクン…ッ！！　ドクン…ッ！！

扉の向こうの部屋の壁は全て『機械』で出来ており、その中央には、上下を繋がれた、『巨大な心臓』が脈を打っていた。
よく見ると、その巨大な心臓は、生体部品と機械部品の融合体だった。

シン「これは…！？　何なんだ…？！」
のび太「ど…ドラえもん！！　あ…あれは…！？」
ドラえもん「僕にも分からない。でも…」
銀時「そう何度も言わせるなよ。『この島の根っこ』だってな。」
沖田「とすりゃ、要はコイツをブッ潰せば俺らは帰れるって事かィ。」

沖田はバズーカを構えた。

近藤「待て総悟。未だそうと決まった訳ではない。無闇矢鱈に破壊するのは良くない。」
沖田「へ～イ。」

沖田は近藤の言葉を聞き、バズーカを下ろした。

土方「…っで？　近藤さん。これをどうするんだ？」
近藤「う～ん…そう言われてもなぁ…。」
銀時「ま、大丈夫だろ？」
シン「……ん？」

シンは壁に何かがぶら下がっているのを見付けた。
シン「あれは……人の腕…いや、機械の腕…！？　というかあれは……デスティニーの腕？！」
シンはぶら下がっている腕を見て、驚いた。
何故なら、その腕は、『人間サイズのデスティニーガンダムの肘から先の左腕』だからだ。
シン「いや、何でデスティニーの腕がこんな所に…！？」
刹那F「どうした？」
シンは全て小言で言ってる為、刹那Fにはボソボソとしか聞こえてなかった。
シン「いや、何でもな――」
シンの言葉は其処で遮られた。
ドガァァァァァァァァァァァァァァァン！！！！！！！
皆「！？」
シン「爆発！？」
刹那F「何だ！？」
一同は音のした方を見た。
山崎「えっ…？！」
グラハム「ホウ…！　これはこれは…！」

音の正体は、『心臓』だった。

ギョロッ！！

刹那「うっ？！」

心臓から巨大な目玉が覗いた。

銀時「おお～、気持ちワリィ気持ちワリィ！！　何か心臓の回りから先に刃物の付いた触手出してきやがって！」

沖田「ホラァ、近藤さん。」

近藤「ウムゥ…！　やるしか無さそうだな…！」

土方「その言葉、待ってたぜ！！」

桂「…フッ、行くぞ！」

エリザベス『ラジャー！』

神楽「どっからでも掛かってこいヨロシ！」

銀魂勢は明らかにやる気だった。

刹那F「敵として来るのなら……駆逐する！！」

シン「さてと、鈍ってるかもしれないけど、ザフトレッドの実力、見せてやる！！」

グラハム「フッ、この私をたぎらせてくれよ！！」銀時「武器持ってる奴はさっさと持てよ？！　武器持ってねぇ奴はさっさと端とかにいろ！　死にたくなきゃな！！！」

銀時はそう言うと心臓に向かって走り出した。

神楽「銀ちゃん行くアルヨ！！」

近藤「行くぞ！！」

土方「っしゃあ！！」
沖田「土方ごと纏めて木端微塵にしてやらァ！！」
土方「ハッ！　こんな所で死ねるか！！」
桂「エリザベス、武器を持たぬ者を守れ。」
エリザベス『ラジャー！！』
シン「刹那さん！！」
刹那F「ああ、分かっている！」

武器を持つ者達は皆心臓に攻撃を開始した。

土方「チッ！　斬っても斬っても減らねぇ！！」
沖田「まるで寝る前に土方殺す数を数えるのと一緒でさァ。」
土方「ざけんな！！　羊じゃねぇのかよ！？」
沖田「昨日は土方を１７２６人殺した所で寝れやしたァ。　つーことで、お前は１７２７人目でさァ。」
土方「ぜってぇ殺す！！　あの気味ワリィ心臓と一緒にブッ潰す！！！」
近藤「喧嘩するな２人とも！！　今は目の前の敵に集中しろ！！」
沖田「分かりやしたァ。」
土方「チッ、わーたよ近藤さん。」

近藤は一言でピタリと喧嘩を止めた土方と沖田だった。

銀時「やっぱ最後は戦いだよな！！」
桂「そんな減らず口を叩く隙があれば、さっさと腕を動かせ。」
銀時「黙れヅラ！！」
桂「ヅラではない、桂だ！」銀時「うるせー！　ブッ潰すぞヅラァ！！」
桂「やれるものならやってみろ。後俺はヅラではない、桂だ！」

銀時と桂は喧嘩を始めてしまった。……駄目だコイツら、早く何とかしないと…。

シン「んな下らない喧嘩するんなら、終わってからしろ！！！」

眠「そうですよ銀さん！」

そう銀時と桂を叱咤するシンと眠。

だが

スッ…！

眠「えっ…？！」

触手は横払いで眠に襲い掛かった。

シン「危ない！！」

シンは眠を庇ってナイフで触手を受け止めたが

ドガッ！！

シン「ぐあっ！！」

触手の勢いは強く、シンは弾き飛ばされてしまい

ドガァァァァァァァァァァァン！！！

シン「グハッ！？」

眠「シンさん？！」

銀時「何！？」
桂「なっ！？」

シンは壁に叩き付けられた。

シン「グッ…！！　こんな事で俺は…！！」

シンはそう言って立ち上がろうとした。

ガタ…ッ！！

シン「ん？」

シンは『何か』が目に付き、それを見た。

シン「……デスティニー…？」

それは先程のデスティニーの左腕だった。

刹那F「避けろシン！！」
シン「ハッ！！」

触手はシン目掛け、その凶刃を向けた。

シン「チッ！！」

シンはギリギリ触手の攻撃を避け、避けると同時にデスティニーの左腕を取った。

シン「また頼むぞ！　デスティニー！！」

シンはデスティニーの左腕を自分の左腕に付けた。
キィイイイイイイイイイイイイイイイ…！！
シン「！」
デスティニーの左腕は蒼白い光を放った。
シン「デスティニー…ガン…ダム…？」
シンはデスティニーの左腕から直接脳に流れ込んでいく情報に従った。
シン「分かった！　デスティニーガンダム、イグニッション！！！」
シンは左腕を掲げ、叫んだ。
すると、デスティニーの左腕は更に光を発した。
皆「！！？」
皆はその光を見た。
刹那F「ガンダム…？！」
刹那Fはシンが言った『ガンダム』という言葉に反応した。
刹那F「まさか奴の世界にもガンダムが…？」
ズァッ！！

眠「ハッ？！」
触手は集合体となり、シンに襲い掛かった。

桂「シン！！　逃げろ！！」
刹那Ｆ「シン・アスカ！！　お前のその『ガンダム』の力、自らのその思いと共に見せ付けろ！！！」
桂「何！？」

桂は刹那Ｆの言葉が理解出来なかった。

シン「思い……。分かった！」

シンは構えた。

シン「デスティニーッ！！　俺の思いに応えろッッ！！！」

デスティニーの左腕に蒼白い電撃が走り、掌底が光を放ち始めた。

シン「行くぞ！！」

シンは触手に向かって走り出した。

桂「なっ！？」
眠「無茶です！！」
刹那Ｆ「いや、シン・アスカなら出来る。」
眠「えっ？！」
銀時「どんな根拠だよそれ。」
刹那Ｆ「奴は『ガンダム』だ。奴なら出来る。『ガンダム』に不可能は無い！」

皆「？？？？？」
皆は刹那Fが言っている事は全て理解出来なかった。
ドガッ！！
皆「！！！」
キィイイイイイイイイ……！！！
皆「！！！？？？」
シンの左腕は触手の集合体を受け止めていた。
土方「何ッ！？」
グラハム「何と！！」
刹那F「……」
銀時「スゲェぜ…！！」
シン「消えろ！！　パルマ・フィオキーナッッッ！！！」
デスティニーの左腕は輝きを増し
ドゥン…！！
デスティニーの左腕から蒼白い光――――否、ビームが放たれ、触手の集合体を消滅させた。
グラハム「なん…だと…！？」
アレルヤ「ビーム？！」

銀時「こりゃスゲェぜ。ありゃかめはめ波だぜ。片手だけどな。」
刹那F「流石だな。」
シン「ハァ！　ハァ！　ハァ！　ハァ！　ハァ！……」

シンは膝を付き、倒れた。

桂「シン！」
眠「シンさん？！」
銀時「新八、シンを頼んだぜ。」
新八「あ、はい。」
桂「エリザベス、お前もだ。」
エリザベス『了解しました。』

新八とエリザベスはシンの所に向かった。

銀時「さぁて、最後の仕上げといくか！！」

銀時達は心臓に向かった。

心臓「ウォオオオ

゛ア゛ア゛ア゛ア゛！！！！！！」

心臓は叫び声を上げた。

銀時「発情期かコノヤロー！」

刹那F「全員、銀時が付けた目の傷に攻撃しろ！！」

刹那Fの言葉で皆、心臓の目の傷に攻撃を掛けた。

近藤「俺に続け！！」

土方「おうよ！！」

沖田「ハイさァ！」

桂「エリザベス、あの目に砲撃しろ！！」

エリザベス『ラジャー！！』

眠「…凄い…！」

そんな中、眠は銀魂勢に目を向けていた。

眠「『神人』ではない…だけどあの動きは一体…？」

確かに、銀魂勢の動きは眠の知る『神堕人』の動きとは全く桁違いの動きだった。

眠「あんな動きを何処から…？」

眠は思考の底に行き掛けたが

シュッ…！

眠「！」

ガンッ！！

眠「そうだった！　今はまだ…！」

まだあの心臓と戦っている、眠はそう言い、大鎌を構えた。

銀時「オラァ！！！」

銀時は心臓の目に連続攻撃していた。

神楽「オラァ！！　キモいから死ねアル！！　マジで死ねヨオラァ！！」

神楽は番傘をマシンガン形態にして乱射した。

グラハム「無茶苦茶だな、彼らは。」

刹那F「フッ、アンタもそうじゃないか？」

グラハム「フッ、それもそうだな。」

心臓「グォオオオオオオオアアア

近藤の言葉で全員外に逃げた。

桂「エリザベス、シンは？！」

エリザベス『今目覚めて新八君の肩に掴まってます。』

見ると、シンはいつの間にか目覚めていて、新八の肩に掴まっていた。

シン「俺は大丈夫です…。」桂「そうか。ならさっさと出るぞ。」

シン「はい。」

そう言うとシンは新八の肩から離れ、普通に立った。

新八「えっ？！　大丈夫なんですか！？」

シン「問題ない。」

桂「早くしろ！」

シン達も外に逃げた。

シン「皆は！？　無事か！？」

銀時「おう！　皆ご覧の通り、バッチし平気だぜ。」

シン「そうか…。」

眠「シンさん。」

シン「ん？」

眠「助けて下さって、どうも有難う御座います。」

眠は深々と御礼をした。

シン「良いって！　そんなの。当たり前なこt――」

ゴォオオオ

ガチャガチャガチャガチャ……

皆「！！！？？？」

シン「なっ…！？」

グラハム「何！？」

コーラサワー「マジかよ！？」

アレルヤ「アレは…まさか…！？」

刹那Ｆ「モビル…スーツ…！？」

肩当てはＭＳに酷似した物に変形した。

沖田「マジ…ですかィ…？！」

刹那Ｆ「クッ！　それでも俺達は諦める訳にはいかない！！！」

刹那Ｆの言葉に頷く一同。

そして、更なる異変が起きた。

ドゥン！！　ドゥン！！

突如、桃色の光の閃光がその２機のＭＳ擬きに襲い掛かり

ドガァァァァァァァァァァァァァァァァァン……！！！

撃墜された。

一同「！！！？？？」

一同は一斉に振り向き、驚愕した。

果たして、桃色の閃光を発したものの正体とは一体……？

第１４話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

銀時「誰だ、誰だ、誰だ～！！」
シン「えっ？　何いきなり！？」
刹那Ｆ「頭がイカれているんだ、気にしたら負けだ。」
銀時「ざけんなよオラァ！！　銀さんが折角今回の話を振ったんだぞ？！　何この仕打ち！？　酷くね？」
神楽「え？　何時もの事じゃないの？」
銀時「何その標準語？　ねぇ、ブッ飛ばしていい？　答えは聞いてねぇ！！」

ドガッ！！

神楽「ブゲラッ！！」

神楽は銀時に顔面を殴られて吹っ飛んだ。

シン「うわっ、ひでーな。（棒読み）」
銀時「つーかあの光線を撃った奴超知りてぇんだけど！？」
刹那Ｆ「そんなもの、普通に次回だろ。」
銀時「そうデスよね～、そうデスよね～。」
シン「ってか何で俺達しか出てなくね？」
銀時「えっ？　作者がめんどくさいだけだろ？」ホジホジ
ダメガネ「それでも僕は出るぜ～！」
ヅラ「俺はヅラではない、桂だ。」
アレ？　お前誰？「ちょっ？！　こんな名前じゃない！！やｍ（ｒ

y』
ゴリラ「お妙さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！」
マヨラー「何で名前じゃねぇんだよ。」
サディスティック星から来たドＳ王子だけどガラスのハートを持っている男「何かなげぇな。」
ギャグキャラなのに不死身で幸せすぎる男「ハハハ、幸せすぎて困っちゃうぜ～♪」
ガンダムに心を奪われた乙女座の男「正にその通りだな。」
シスコン「先ずは乙女座の人達に謝る作業に戻れよ。」↑乙女座
ガンダムに心を奪われ過ぎて愛も憎しみも超越して宿命になっちゃった男「だが断わる。」
ガンダム「その歪みを破壊する！」
シン「…ってかもう終われ！！」
ヴェーダ『やれやれ、全くだ。』
ガンダム「ティエリア…いや、ヴェーダか。」
ヴェーダ『ん？　刹那…いや、ガンダムか。』
ガンダム「何故此処に？」
ヴェーダ『いや、最初から此処にいたが？』
ガンダム「そうか。」
シン「えっ？　未だ続くの？」
ヴェーダ『いや、もうこれで終わりだが？』
ガンダム「待て、次回は最終回だから１５話とエピローグを立て続けに出す事になった。」
シン「えっ？！　次回で終わりかよ！？」
ガンダム「ああ、次回で終わりだ。」
シン「おいおいおいおい…、マジかよ…。」
ヴェーダ『ああ、マジだ。』
皆「……」
シン「…えっ？」

天パ「…俺は？」
オオカミ少女「……」

第１５話（前書き）

劇場版で見事ＧＮ電池卒業「結構間が空いたけど、どうしたんだい？」
作者「まあ、色々有ったからさ、色々。」
劇場版でもハサミ大好き「ま、どうせ忘れたとかそんなんだろ？」
作者「ギクリ！？」
どうやったらそんな前髪になる「ギクリって…。」
作者「う…うるせぇ！！　前書きと後書きを書くのがめんどいのもあるよ！」
ダメガネ「オイ！！　何投げ槍になってんだよ！？　真面目にやれよ！！」
作者「えー…。」
ダメガネ「えー…じゃねぇよ！！」
青狸「フヒヒヒヒｗｗｗ　フリスク切れたｗｗｗｗ　フｗｗヒｗｗフヒヒヒｗｗｗｗ」
恐らくは元祖ダメガネ「ドラえもん！　もう元に戻ってよ！！」
サムズアップ大好き「じゃあこうしちゃえ！」

ボカッ！

サムズアップ大好き…もとい五代は青狸…もとい、フリスク中毒者…じゃなくて、ドラえもんの頭を叩いた。
青狸「…あれっ？　僕何してた？」
まあ、何時もはダメガネだけど、やる時はやる「治ったーーーー？！」
２０００回目の技が色々とえげつない「お…おお…！」
アレルヤ「…というか、ちょっといいかな？」

作者「ん？　何だし？」
アレルヤ「前書きが『内容』に全く触れてないかい？」
皆「……」
作者「た…たしかし…。」
シン「オイ。」
作者「そんじゃ、銀時、宜しく。」
銀時「…マジかよコノヤロー。」（と言いつつメモを見る）
シン「結局やる気あんじゃん。（呆」
銀時「突如放たれたビーム、それを撃った奴とは？！　そして、このロスト・ワールドの正体とは！　次回、こうご期待！！」
シン「次回じゃねぇよ！！！」

バキッ！！

銀時「グェッ？！」

シンは何処からか持ってきた巨大ハリセンで銀時を打ちのめした。

シン「ったく…！　ああ、次回じゃなくて今回だからな。こうご期待！」
銀時「クソったれが……ガクッ」
シン「……」

第１５話

刹那Ｆ「なん…だと…！？」
銀時「ん？　どうしたせっつぁん？」
刹那Ｆ「アレは…まさか…『ガンダムデュナメスリペア』！？」
刹那Ｆは深緑のＭＳの名を叫んだ。
アレルヤ「デュナメス！？　ロックオンか？！」
シン「ん？！　何か引いてるぞ？」
シンはそのＭＳ――――デュナメスが『何か』を引いているのを見付ける。
刹那Ｆ「ハッ！？　アレは…『ガンダムエクシア』？！」
刹那Ｆはかつての愛機、エクシアを見付けた。
ロックオン「よぉ、刹那、アレルヤ、その他皆さん。」
刹那Ｆ「やはりロックオン・ストラトスか。」
銀時「えっ？　何その厨二病みたいな名前？　何？　精神どっか逝っちゃってるの？　ねぇ？　ねぇ？」
桂「因みに、今銀時が言った『厨二病』の『ちゅう』は、厨房の『厨』であって、決して中学生の『中』ではない。」
シン「んな事どうでもいいし、つーかどっちでもいいし。」
桂「えっ？　どっちでもいいのか？」
刹那Ｆ「ダメだコイツ等、早く何とかしないと…。」

シン「えっ？　何その『中の人ネタ』？」
ロックオン「おーい…。何楽しそうにやってんだ…？」
ティエリア『やはり僕の推測通りだったな。』
刹那F「何！？　どうしてお前が…？！」
アレルヤ「ヴェーダの中にいた筈じゃ…！？」
ティエリア『今はハロの中にいる。』
アレルヤ「ちょっと待って…？！　何でロックオン達がこの島に来れたんだい？！」
ティエリア『ああ、恐らく刹那達も見てきたであろう、『霧』の再現に成功したからだ。』
皆「！！？？」
シン「？」
銀時「何ィ！？　じゃあこの島がどういうのか、分かっているのか？！」
ティエリア『ああ、勿論だ。この島の名は『ロスト・アイランド』。そして『この世界』の名は『ロスト・ワールド』だ。』
皆「ロスト・ワールド…？　ロスト・アイランド…？」
シン「ちょっと待てよ！　それじゃ、このロスト・ワールドってのは、『全くの別世界』に有るのか？！」
ティエリア『正確には、『異次元空間』だ。』
銀時「へぇ～、そりゃスゲ――」
心臓「グォオオオ

確かに、人間の上半身が付いたコアの高さは、優に１００ｍ以上はある。
だが、銀時達には頭部になっているコアまで辿り着ける力など、皆無だった。

ティエリア『だが、刹那・Ｆ・セイエイ。君になら、あのコアを貫ける。』
ロックオン「その為にエクシアにＧＮソード？ブラスターを付けたんだぞ？」

確かに、エクシアの右腕には、エクシアの為に改修されたＧＮソード？ブラスターが付いていた。

刹那Ｆ「イアン達に感謝しなければな。」
ロックオン「ホラよ。」

デュナメスはエクシアを降ろした。

刹那Ｆ「最後に俺の出番か…。」
銀時「この～！！　俺にも出番くれよコノヤロー！！！」
新八「落ち着いて銀さん！！」

そんな銀時達を尻目に、刹那Ｆはエクシアのコクピットに乗り込んだ。

刹那Ｆ「ハァ…。懐かしいな…。エクシアに乗るのも…。」

刹那Ｆはエクシアを起動させた。

刹那F「刹那・F・セイエイ、ガンダムエクシア、目標を駆逐する！！！」

エクシアは、GNソード?ブラスターをコアに向けた。

刹那F「トランザム！！」

トランザムによる高濃度圧縮粒子の開放により、エクシアは真紅に染まり、刹那Fはイノベイターの力を発現した。

刹那F「……」

刹那Fは、その金色に輝く瞳でコアの目の傷を狙っていた。

刹那F「其処か！！！」

刹那Fは、トリガーを引いた。

ドゥン！！！

放たれた強大なビームは正確無比にコアの目の傷に向かい、そして

ドガァァァァァァァァァァァァァァァァン！！！！！！

コア「ギャァァァァァァァァァァァァァァァァ

ティエリア『いや、コアの『コア』は未だ破壊仕切れてない！！』
土方「何だと！？」
刹那F「クッ、粒子量が…！」
エクシアはトランザムを停止し、ゆっくりと地面に落ちた。
ロックオン「エクシアが…！　クッ！　此方はGNコンデンサーだからトランザムなんかしたら一瞬で機体が停止する！！」
のび太「そんな！？」
ジャイアン「打つ手無しかよ？！」
絶望に打ち拉がれる一同。
だが
？？？？？「うぉおおお

ティエリア『何だ！？　あの無茶は？！』
銀時「どんな無茶だろうがな！！　どんな無理だろうがな！！　どんな不可能だろうがな！！　それでもやり抜くのがな！！　俺の『侍魂』ってモンだぁああああああ

ティエリア『何という男だ…。彼のブレイクスルー能力は特筆に価する。』
シン「坂田銀時…。あの人はやれば出来る男なんだ…。」
コアはコアのコアを破壊された事により、崩壊を始めた。
銀時「よぉ、やってきたぜ。」
桂「フッ、流石だな。」
新八「銀さん！」
神楽「やったアル！！」
銀時「さっさと帰ってのんびりするか。」
ジジッ…！
皆「……？」
皆は身体に妙な感覚を覚えた。
ロックオン「何だ今のは？」
銀時「…っておい！？　何だこの身体のノイズみたいなの？！」
銀時は自分の身体を見て、驚愕した。
その身体には、ノイズが走っていた。
眠「えっ？……！？」新八「あっ！　ホントだ！」
皆も自分の身体を見て、驚愕した。
ティエリア『コアを破壊した事により、このロスト・ワールドに強制的に閉じ込める力が無くなり、『消えてから凡そ１０分後の自分

のいた場所に帰れる』だろう。』
コーラサワー「１０分後？！　未だ間に合うか。」
銀時「しっかしまあ…何日も此処に居たのに、元の世界ではたったの１０分間か…。そう考えると結構寂しいと思うけどな。」
桂「何だ。お前でも寂しさを感じる事があるのか。」
銀時「テメェぶっ殺すぞズラァ！！」
桂「ズラではない、桂だ。」
沖田「土方さん。」
土方「ん？　何だ総悟。」
沖田「どっか違う世界に飛ばされちまえ。」
土方「何だこの野郎！！　叩き斬るぞ！！！」
新八「でも、ずっとこのままなんだけど、何時になったら戻れるんですか？」
ティエリア『いや、実はコアを倒した時点で力は無くなり、そのまま戻れる筈だが…。』
銀時「おい、法螺でも吹いたか？」
新八「おい！！　何酷い事言ってんだ！？」
ティエリア『…待てよ？　戻れる事が出来ない『何か』がある筈だ。』
銀時「何かって言ってもな…。それがな…。」
眠「し…シンさん…？」
眠は驚いた顔でシンを見た。
銀時「ん？」
それに釣られて銀時達もシンを見た。
シン「……」

シンの顔は何故か俯いているが、何故か悔しそうな顔をしていたのは分かった。

銀時「シン？　折角元の世界に戻れ……なっ？！」

銀時はシンの身体をよく見て、眠が何故驚いたのか実に良く理解出来た。

シンの身体に『ノイズが走っていなかった』からだ。

銀時「おいシン、これはどういう事だ…？」

シン「……実は俺…」

シンはこのロスト・ワールドに来た経緯を銀時達に話した。

その内容に銀時達は驚愕した。

何故なら、シンは『死んだ扱い』になっており、自らは死んだと思っていたら、このロスト・アイランドにいたという。

そして、その際、ステラという少女の幻影が現れて、『シンには生きていて欲しいから、新たな世界に連れて行く』と言われたらしい。

ティエリア『成る程、死んだという事なら、元の世界に戻れないのも、頷ける訳だ。』

銀時「何冷静な事言ってんだオメェは？　コイツのせいで戻れねぇんだぞ？」

ティエリア『いや、そのステラの言っている事が正しければ、我々の世界が、その『新たな世界』という事になるのではないのか？』

のび太「えっ？　それってどういう意味ですか？」

銀時「ああ、そういう事か。」

皆は銀時を見た。

銀時「言うなれば、シンは俺達の世界の何れかを選べる権利を持っているって事だ。んでもって、シンが何れかを選ばなきゃ、俺達は自分の世界に戻れないって事だ。」
刹那F「なら、シン・アスカ。お前が決めろ。どの世界を選ぶのは、お前の自由だ。」
シン「いや、もう決まってる。」
銀時「へぇ、もう決まってんのか。」
近藤「ああいうの欲しいよな。」
シン「それは…」

シンは歩いた。
銀時達の所に。

近藤「えっ？！　マジ？」
シン「これから、宜しく頼みます。」

シンは手を差し出した。
土方に。

近藤「ええ～？！」
土方「いや、せめて近藤さんにしてくれ。」
シン「えっ？　じゃあ、近藤さん。宜しくお願いします。」
近藤「ああ！！」

シンと近藤は堅く握手を交わした。

ジジッ…！

シン「！」

シンの身体にもノイズが走った。

シン「ノイズが…！」
近藤「ハハッ！　これでお前も我が真選組の仲間だな！！」
沖田「言っとくが、土方のしばきは酷いでっせェ。」
土方「ビシバシやってやるよ。」
シン「うっ？！　それはお手柔らかに。」
沖田「ああ、そん時は俺がブッ飛ばますァ。」
土方「じゃあ何にも出来ねぇじゃねぇかよ！！」
近藤「これから、共に市民と守ろうじゃないか！」
シン「ハイ！！」
銀時「あ～あ、全部真選組に取られたよこりゃ。」
新八「まあ…ある意味仕方がないみたいです。」
銀時「そんじゃ、皆さん。またな。」

フォン…ッ！！

ロスト・アイランド、ロスト・ワールドから、皆は消えた。
そして、これが、『新たなる物語の扉を開ける』事になろうとは、
銀魂勢と一部世界はまだ知らない。
ただ、今は新しい仲間、シン・アスカを迎え入れた。
これからの物語は、シンを含めて続けられるだろう…。

第１５話（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

銀時「ふぅ…、もうおしめぇか。」
眠「ええ、そうですね。」
刹那Ｆ「後はエピローグだけだな。」
アレルヤ「皆と一緒に居られるのも後僅かか…。」
ロックオン「まあ、『物語』には必ず『終わり』が付き物だからな。それは仕方ねぇことだ。」
コーラサワー「キャッホーイ！！　大佐の所に戻れるぞー！！」
土方「オイ、コイツ何なんだ？」
グラハム「無駄な詮索は止めた方が良いのでは？」
沖田「そうでさァ。だから此処での垂れ死ね土方。」
土方「ァア？！　テメェが死ねよ！！」
近藤「二人とも止めんか！」
沖田「へーイ。」
土方「はいよ。」
シン「大丈夫なのかこれで…？　何か急に不安になってきたぞ…？」
銀時「…まあ、お前なら何とかなるんじゃね？」
シン「…そんなアバウトな。」
桂「まあ、ガンバ大阪。」
シン「そんなボケいらねぇよ。」
桂「ガーン」
シン「えっ？！　そんな落ち込むもんなのそれ！？　下らねぇボケだと思うんだけど。」
銀時「ウンウン、確かし。」
桂「もう止めろォオオオ

オオオオオ！！！！！！」

桂は楽屋から逃げた。

刹那「あ、あれ？　どうしたの？」

桂と入れ替わる様に果物を入れた紙袋を持った刹那が楽屋に入ってきた。

シン「…今更な気がするけど、意外と楽屋の出入りは自由なんだな…。」

桂「但し、この楽屋に出入り出来るのはこの物語の出演者だけだがな。」

シン「ちょっ？！　何処から出てきた。」

桂「ドラえもんのポケットから。」

ドラえもん「えっ？！　ホント！？」

桂「嘘だ。」

シン「ちぇすとぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

桂「ぐおぉぉっ？！！」

桂は吹っ飛び、壁に当たった。

シン「ハァ…ハァ…ハァ…！　下らねぇ事してんじゃねぇよ…！」

銀時「お…おう…！　そんじゃ、次回、エピローグだぜ。こうご期待。」

桂「む…無念……ガクッ」

シン「……何だろう…このデジャヴ。」

銀時「き、気にしたら負けだと思うぜ？」

眠「銀さん顔引きつってます。」

銀時「…ですよね～…。」

シン「…ハァ…。」

エピローグ（前書き）

刹那F「そうか…、もうこれで終わりか…。」
銀時「思えば、17話もあったんだよな…。」
作者「それ俺のセリフだし。あ、因みにこのエピローグ、作者の都合で刹那F、眠、シンと銀魂勢のみになります。；；」
ハレルヤ「どうせめんどくせぇだけだろ！」
マリー「ハレルヤ落ち着いて！」ハレルヤ「チッ！」
眠「…私がこの中に…？」
銀時「おうおうおう、名誉な事じゃねぇか。喜んだらどうだ？」
眠「あ…はい。」
ロックオン「てか、もう俺の出番終わり？　マジかよ。」
ティエリア『フッ、僕ですら2回程出番があったけどな。』
ロックオン「何かうぜぇなおい。」
フェイト「……」作者「臭いものには蓋だぁああああああああああああああああ！！！！！」（ゴミ箱を持ちながら）
シン「最低過ぎるだろアンタはー！！！！」
作者「ギャアアア

ティエリア『やれやれだな。』
シン「…このままだと収拾が付かないから終わりにしね？」
作者「ぉk」
刹那F「お前が言うのか…。まあ、別に良いが。」
シン「…ってか、こんな感じで終わ…り…？」
皆「……」

エピローグ

シュン…！

刹那F「！？」

刹那Fは、気が付いたら、其処はフラッグのコクピットだった。

刹那F「…元の世界に戻れたのか…？」

刹那Fはふと、コクピットの脇を見た。

其処には、ライフルがあった。

刹那F「フッ、夢でも幻でも無かったか…。」

刹那Fはそう微笑むと、フラッグを飛ばした。

シュン…！

眠「！」

眠は嫦娥町にいた。

「お…お嬢？！」

「おい！　見たか！？　突然お嬢が現れたぞ！！」

「お嬢！　ご無事で！」
眠「……ええ…。」
眠はそう言って浪面を被った。
「しかし、『１０分位』捜しても見付からなかったのに、これじゃ骨折り損のくたびれ儲けですよ。」
眠「……」
眠はオオカミの１人が言った言葉に少し悲しい気持ちになった。
眠「（……？　あれ…？　私……、何故…こんな気持ちに…？……
…ああ…そうか…。）」
眠は紅く輝く月を見上げた。
眠「（…銀さん。また何時か、また…会えますか…？）」
この心の呟きが叶わないのは分かっている。
だが、だが眠は信じている。
自分の『櫛名田としての役割』に必要無いと厚く冷たい氷の中に閉ざした心を知らずの内に溶解させた銀髪の侍にまた会えると信じて
……

シュン…！
銀時「ん？　万事屋？　俺、外で消えたんじゃなかったか？」

新八「…知りませんよそんなこと。」
銀時「ま、いっか。」

そう言って銀時は玄関に向かった。

銀時「おい、オメーら、これから真選組の所に行くぞ。」
新八「えっ？　僕達もですか？」
神楽「何かヤったアルカ？」
銀時「何もヤってねーよバーカ。」
新八「じゃあ何を……って、あ！　そういうことですか！」
銀時「そう、会いに行くんだよ。この世界に来た『仲間』をな――」

――――――――

シュン…！

シン「！？　此処が…？！」
近藤「そうだ。此処が武装警察真選組、その屯所だ。」
沖田「此処は局長室でさァ。」
近藤「コホンッ。改めまして、真選組局長、近藤勲だ。」
シン「シン・アスカです。」
沖田「俺ァ、真選組一番隊隊長、沖田総悟でさァ。」

ガラッ…！

シン「！」
土方「俺は真選組副長、土方十四郎だ。」

山崎「俺は真選組密偵、山崎退です。」
土方「さて、これからどうする？」
山崎「早速、過激派の攘夷士のアジトに殴り込みに行きます？」
近藤「おおっ、そうだったな。」
土方「待てよ。まだコイツの役職が決まってねぇよ。」
沖田「補佐で良いんじゃねぇかィ？」
土方「何？　補佐？」
沖田「そうでィ。局長と副長の補佐でさァ。」
近藤「おおっ！　それは良いな！」
土方「……？」

土方は沖田の言葉に違和感を感じた。

土方「（何でいきなりそんな役職をコイツに？……ああ、もしかして入れ込んだな。コイツに。）」
沖田「つー訳で、土方さんが何かやらかしたら、遠慮無く叩き斬っていいでさァ。」
シン「どっちかといったら、沖田さんの方がやらかしそうだけどな。」
沖田「おっと、シン、今何歳だ？」
シン「えっ？　18だけど…？」
沖田「誕生日は？」
シン「9月1日…。」
沖田「じゃあ俺の事、総悟でいいでさァ。」
シン「えっ？！　良いのか？」
沖田「いいでさァ、いいでさァ。タメ口てもいいでさァ。」
シン「ああ…それじゃ、総悟。宜しく。」
沖田「俺もでさァ。」
土方「（やっぱ入れ込んでやがる…。これからどうなる事やらだな。）」

土方はフッと微笑んだ。

シン「（ステラ…俺、この世界で生き続けるからな。）」

シンは心の中でそう言った。

～終わり～

エピローグ（後書き）

ロスト・ワールド楽屋

シン「……」

シンは椅子とテーブル等が片付けられた楽屋を見ていた。

銀時「おーい、シーン。どしたー？」
シン「あ…ああ…、銀時さん。」
銀時「…お前は気持ちは判らなくはねぇ。だがな、何時までも引きずんじゃねぇよ？」
シン「まあ…そうだけどな…。」
銀時「ま、『再会出来る奴』もいるんだしな。」
シン「そうか……って、えっ？　今何て言った？」
銀時「えっ？」
シン「えっ？」
銀時「いや、散々『次回作』の『伏線』とか有ったし。」
シン「えっ？　マジ？」
銀時「マジ。」
シン「……」
銀時「……」
新八「なんちゅう終わり方だあぁぁぁ

銀時「……」
シン&新八「逃げるなオラァ！！！」
シンと新八はそそくさと逃げようとする銀時を追い掛けた。
桂「フッ、あれでシンも元気になったか。」
桂は楽屋を見ながらそう呟き、立ち去った。
だが、この楽屋は恐らく近い内にリニューアルされ、また使われるだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8626k/

ロスト・ワールド

2011年1月22日09時13分発行